



# HELP!



taichiumi

何もできない。見ることはできる。でも、それ以上何もできない。

助けて――ああ、誰かが呼んでいる。その声は確かに届いている。けれども、手を差し伸べられないのだ。

助けて。助けて。苦しい。お願い、誰か、助けて。耳をふさいでしまいたくなるような、切ない声色。無視したいわけじゃない、ただ駆け寄ったって相手を無駄に期待させるだけなのだ。

「ごめんなさい」

声に向かって、彼女は精いっぱい謝罪を続けた。謝ることしかできなかった。そうして自分を恥じる彼女に降ってきた声は冷たかった。

「ウラギリモノ」

志織はその瞬間に目が覚めた。視線の先には、何の変哲もない自室の白い天井に、カーテンの隙間から侵入した光が走っていた。

いやな夢を見て目覚めた朝は、心拍数が少し早い。そして、吐き出す溜め息も鉛色に染まってしまうそうなくらいに重いのだ。動きの鈍い身体でカーテンを開けると、それを待っていたかのように、朝日は一気に室内に流れ込んできた。その眩しさに目を閉じる。

心苦しい気持ちと、関わり合いになりたくない気持ちと、どこかいらついた気持ち。夢を思い出すとそれらが腹のなかで混ざりあって、ますます吐く息の色が濁っていくような気がした。

志織はベッドから下りて、制服に手を伸ばす。そして着替え終わると、机の上に置いたお守りがわりのネックレスを身につけた。そうすることでようやく、気持ちが晴れる気がした。

リビングの扉を開けると、すでに母が身支度を整えていた。挨拶もそぞろに、母は急いで出ていく。今日は早く出なければならないのにすっかり寝坊してしまったらしい。

残された志織は、テレビのニュース番組を聞き流しながら、テーブルに用意された食事に手をつける。こういう日の朝は、何を食べても味がしなかった。

再度身支度を整えて鞆を持ち、志織は玄関に向かった。そして、つい毎朝の習慣を忘れたことに気づいて慌ててリビングに戻った。サイドボードの上の写真。こういうときだからこそ、いつも行っていることは忘れてはいけない気がした。

「行ってきます」

返事はない。しかし、それでもいいのだ。志織は少し気分が晴れ、若干軽くなった足取りで玄関の戸を開けた。行ってらっしゃいと呼びかける声はなく、彼女はいつもどおり鍵を閉めた。

「二年三組の渡辺志織です。忘れものを取りにきました」

当直の警備員に志織が学生証を提示すると、いやそうな顔をされた。自分だって、こんな時間にわざわざ学校になど入りたくはなかった。

時刻は午後九時三十分。どの部活もとっくに活動を終了している。本当なら志織も自分の家でのんびりテレビでも見ていたはずだった。しかし、閉館ぎりぎりまで図書館で勉強をして帰宅したのは八時を回ったころ。そこで学校に自宅の鍵と父の形見のネックレスを忘れてきてしまったことに気づいた。

父は志織が小学生のときに亡くなり、唯一の家族である母は夜勤で一晩中留守だった。ネックレスはともかく、家に入るには鍵を取りに戻るしかなかった。近頃は物騒で高校生の出歩きも厳しいので、外で時間つぶすのも躊躇われた。

さいわい制服姿のままだし、学生証を持って行けばすんなりと通してもらえると踏んでいた。黙って忍びこんでもよかったかもしれないが、さすがに平凡な公立校とはいえ、最低限のセキュリティシステムは施されている。下手に侵入して騒ぎになるよりは、正直に堂々と理由を言って入れてもらうほうがずっと手間がはぶけた。

「すみません、今日は親がいないから、鍵がないと家に入れたいんです」

若い警備員は舌打ちをして、鍵の束を取り出した。志織はノートに学年と名前を書かされ、学生証はコピーをとられた。昔はもっとゆるかっただろうな、と志織は面倒くさく思ったが、そもそも忘れ物をした自分がいちばん悪いので、粛々と言われたとおりにする。

手続きは短時間で終わり、警備員に付き添われて職員用玄関から校舎のなかに入った。

「先生たちはもう帰ってるんですね」

この時間だとまだ残業している教師がいても不思議ではないと思ったが、来るときに見上げた二階の職員室は暗く、玄関も施錠されていた。

「今日ちょっと何かあるみたいだから」

そっけなく、歯切れも悪い口調だった。その様子を見て志織はどこか違和感をおぼえたが、そもそも自分が手間を増やしているのだから何も口にしなかった。

来客用のスリッパは床に貼りつくような感触だ。ぺたぺたと音を響かせながら、二人は階段をのぼった。警備員が手に持つライトの照らす先はくるくると動いて定まらない。それをずっと見ていると酔いそうだと感じるほどに。

二階に到着して廊下を出るとき、警備員は立ち止まって注意深く左右を確認して、やっと左に曲がった。本校舎の二階、長い廊下のちょうど中ほどに三組の教室がある。

夜の学校というものは、思いのほか空虚だ。昼間は生徒であふれて騒々しく、ときには呆れるほどの大声の会話がなされるほどだが、いまは誰もいない。あるべきものがない。それは、不気味というよりも寂しく思えた。

真っ暗で誰もいない中庭を窓から眺めながら、ここまで来て見つからなかったら恥ずかしいな

、と志織は声に出さずに思った。どこで忘れたのかは確証がなかったが、鍵もネックレスも今日の昼間に教室にいたときまでは確実に手元にあったことは覚えているので、まずは学校に戻っただけだった。

警備員に教室内の鍵を開けてもらう。このときも、彼は恐る恐る戸を開けた。真っ暗な教室に誰かがいるわけでもなく、電気をつけるのも面倒に思えた志織はすたすたと自分の席に向かう。

床に膝をつく、ひやりとした温度が伝わってくる。机のなかを覗きこんだが、目当てのものは見つからない。教室後方のロッカーを開け、ようやく探し求めていたふたつを発見した。

「すみません、ありました」

鍵を目の高さに持ち上げて見せてやる。土産物の人形のキーホルダーがゆらゆらと揺れ、金属音がかすかに発せられた。警備員は微かに安堵の表情を浮かべた。それを見て、志織もなんだか緊張がとけた。

「では、すぐ出しましょうか。今日はあんまり人を入れるなって言われてるんで」

そういえば、志織が名前を書かされている間、彼はトランシーバーか何かで誰かと話していた。目的を果たした以上、志織だってここにいる理由はない。できればネックレスだけは身につけたいところだが、ここで悠長に首に巻くのは気が引けた。急いで鍵と一緒に鞆に入れ、小走りで彼を追って教室を出た。

鍵を発見し、来るときよりも戻るときの方が気持ちは軽い。まだ用心深く周囲の様子を窺っている警備員の姿を見て、つい志織は口を開いた。

「学校に泥棒とか出るんですかね」

警備員は一瞬びくつく。見た目は三十前後なのに、ずいぶん怖がりな男だ。彼はひきつったように笑う。

「泥棒だったらいいんだけどね、最近、ちょっとね」

ああ、と志織もその言葉に頷く。どうやらこの高校、何かが出るらしいのだ。妙な音を聞いただの、怪しい影が走っただの、よくある怪談がここ数週にわたって噂されている。ちょうど半月ほど前に文化祭があり、遅くまで残っている生徒も多かった。そのせいで、こういった怪談が広まったのだろう。

この近くに刑場があったことも噂の拡散につながった。無実の罪人の怨念など、面白がって話を脚色して広めた生徒がクラスにもいて、志織は彼らをひどく軽蔑した。刑場といっても明治よりも前の話で、いまでは碑がひっそりと立っているだけである。それでも、夏休みになるたびに、肝試しをする生徒たちが出るようだが。

しかし、噂自体は毎年の名物でもなんでもない。今年になって突然発生したものだ。一年生のときはどんなイベントでもそんな話が出てこなかったし、最近の校内は妙な気配でどこか空気が濁っている。何らかの変化が生じたのは間違いないと思う。

それが幽霊とか物の怪とか、そういう類のものが関係している現象だということも、志織は知っている。彼女はいわゆる「見える人」であった。幼少のころから、幽霊とは彼女にとって当たり前前に存在するものだった。

幽霊が見えるということ、ちょっと特別な自分に憧れる中高生からは羨ましがられるかもしれ

ない。しかし、志織はこの能力を持っていてよかったと思えなかった。彼女は見えるだけで、小説やドラマに登場する霊能者のようにお祓いする力など一切持ちあわせてない。せいぜい霊を避けることくらいしかできないのだ。

彼女の経験上、霊は自分が見えると判断した相手には何らかの反応を示すことが多い。厄介なのは、助けを求める霊である。志織はどうやって除霊とかいうものをすればいいのかわからない。

そうして中途半端に関わったあげく何もできないとなると、裏切られたと逆上する霊もいる。実際、過去に彼女はそれで恨まれ、家には不幸が続き、生まれ育った町から去らなければならなくなった。

そのときのことを考えると、心臓のあたりが押さえつけられたようになって、苦しくなる。彼女の周囲には難が続いて、大好きな祖父と父を相次いで亡くした。偶然だったらどんなによかっただろう。何度も自分の苦しみを軽くしようとした。しかし、あのとき自分が関わらなければ、と志織はどんなに時間が経っても思わずにいられなかった。

だから、志織は一切を無視すると決めていた。普通の人間は何にも気づくことなく過ごして、普通の生活を送っているのだ。自分もそうすればいい。結局、それが一番安全だった。

「――」

階段で、ふと志織は立ち止まった。それに怯えて、警備員も縮こまる。

「あの、何か？ さっさと出ない？」

「上に誰かいますか？」

具体的な言葉は聞き取れないが、声が聞こえる。高い、子供か女性の声だ。なんとなく言っただけなのに、警備員は狼狽する。

「ちょ、ちょっとやめてくれない？ 俺、本当に駄目なの。肝試しとか本当無理でさ」

「静かに」

少し考え事をして歩いていたが、気づけば気配が強くなっている。確実に何かいることは間違いない。しかし、それが声の持ち主のものかどうか志織には判別できなかった。声の主からは、霊特有の空気というか雰囲気というか、そういうものは何一つ感じられなかった。

「まだ生徒残ってたり」

「ぎゃあああああああああ！」

いきなり悲鳴が聞こえた。ぎょっとして二人は顔を見合わせるが、警備員は既に顔を歪めて恐怖に震えていた。

「な、なに？ なんなの？」

「とにかく落ち着いてください。上、行きますか？」

高速で首を横に振る警備員をなだめる。その瞬間、ごろ、と音がした。階段の上からだ。

「え、何？」

「え、ちょっと、勘弁してよ。ねえ、お願いだからさ」

ごろ、ごろ、ごろ。ゆっくりと発せられる、鈍い音だ。断続的に響いていたそれは、途中からリズムカルになった。

「階段下りてきてる？」

志織の言葉に警備員はもはやパニックを起こしていた。

「下りよ、下りようって」

それについては志織も賛成だった。幽霊の気配には慣れっこだが、関わっていいことなどひとつもない。怯えた警備員に手を引かれて、駆け下りる。しかし、背後の何かはこちらが走れば走るほど近く感じる――それは、明らかに加速していた。

「迫ってきてます！」

「やめろって、本当に勘弁してよ！」

もはや断続的な音は一続きになって確実にすぐ後ろまで来ていた。そして肩に衝撃が走り、志織は転倒してしまった。

「痛……」

とっさに顔を上げると、それはすぐ側にいた。志織ははじめ、それが何なのかよくわからなかった。いつもの経験で、追ってきているのは人間の霊だと思っていた。しかし、それは人ではなかった。木でできた車輪に黒い靄が巻きついていて、恐らく後ろから志織にぶつかったのだろう。勢いを殺されたそれは、やや前方で、きいきいと音を立てながらゆっくりと回転していた。

靄が動く。だんだん形を変化させて、笑った。そう見えた。

思わずびくっとした志織をよそに、車輪はそのまま行ってしまった。志織はそこで座り込んでしまった。久々にまともに目を合わせてしまった。もしかして笑った？ ターゲットにされた？ でも、行ってしまったし。混乱して考えがうまくまとまらない。

肩が熱い。確認すると、制服が割けていて出血していた。傷を見た瞬間に心拍数が上がっていき、その分だけ寒気も増した。

警備員はいなくなっていた。きっと恐怖にかられてそのまま出て行ってしまったのだろう。まずはここを出なくては。一刻も早く立ち去ったほうがいい気がする。なんとか立ち上がろうと志織が床に手をついて力を入れようとした瞬間、また声がした。

「こらー、いいかげん、出てきなさいー」

明確な声だった。自分と同じくらいの少女のもの。今度はあっけにとられて固まっていると、その主はどんどん近づいてきた。

「お前は完全に包囲されているー。もう逃げられないぞー」

角を曲がって現れたのは、ヘルメット姿で棒を胸に抱いた女の子だった。

目が合う。志織が息をのむより先に、相手は叫んだ。

「ぎゃあああああああああああああああああああ、出たああああああああああああああっ！」

「あー、もう、びっくりさせないでー。心臓止まるかと思った」

腰を抜かした少女を、立ち上がった志織が起こしてやることになった。

「ところで、誰ですか？ うちの学校の人？」

失礼とは思いつつも、志織は彼女の全身をじろじろと見てしまう。カットソーにショートパンツ、靴下にスニーカーという、ありふれた服装だ。目を引くかわいらしい顔立ちだったが、少なくともいままで会った生徒のなかにはいないように思える。友人ならともかく、クラスメートくらいなら、制服から私服にかわってしまえば印象も違って見知らぬ他人に見えるかもしれないが。

「えー？ あ、生徒じゃありません。霊能者です霊能者。はい」

「は？」

いきなり飛び出した単語に、志織はうさんくさそうな目を向ける。その様子を見て、少女は慌てて手をぶんぶんと振った。

「本当、名刺とかないけど、本当だから！」

自分も霊が見えるのだから、他に見える人がいても不思議ではないし、霊能者という職業もあるかもしれない。けれども志織には、すぐ目の前にいるこの少女が、とてもそんなものには思えなかった。

「証拠は？」

そう尋ねられた少女は困ってしまった。単にどこの学校に通っているかであれば、学生証を出せばいい。しかし、霊能者にはその身分を証明するものなどないのだ。

「これ！ これが家宝の霧風です」

そう言って志織に差し出したのは一本の棒だ。

「何これ？」

「代々霊能者である我が祝家に伝えられる霊刀ですよ。人間は切れないけれど、霊とか妖怪はばかすか切れます」

刀のような形をしているが、刃はない。志織が手を当てても、確かに特に皮膚や肉が切れたりもしなかった。持ってみても、特に良いものも悪いものも感じなかった。まったくの無だ。何か憑いているようには思えなかった。あえて言えば、見た目よりも軽く思えた。

腑に落ちないまま、志織は少女に霧風とやらを返す。少女はヘルメットをかぶり直して、周囲を見渡す。

「この学校、幽霊というか物の怪が出てるんですよ」

それは知ってる、などとは志織はあえて言わなかった。少女は気分が昂揚しているのか、やや早口で説明を始めた。

噂が出回りはじめたのは九月だが、本格的に物の怪の目撃談が増えたのは十月に入ってからだ

という。まず、警備員が学校内を巡回中に、妙な音が聞こえるようになったことがきっかけだ。「それだけなら別にどうということもなかったと思います。そのうち、夜まで残っていた職員が、廊下に影がちらつくと訴えるようになりました」

怪現象が発生するのは、主に日が沈んでから。部活によっては遅くまで残っていたりするが、遭遇するのは主に教職員だという。廊下を歩いていて突然激痛が走り、腕や足に切り傷を負う者もいれば、妙な音が耳に残って離れなくなったあげくに不眠になった者も出た。

「それで、完全に参ってしまって休職された先生が出てきて。うちはそういうちょっとした心霊相談を受け持っていて、それで有志の先生方が相談にきたの」

「有志？」

「ここ公立でしょ？ 本格的に学校が調査とかになるとややこしいみたい。だから、先生たちが自腹切って、権限の範囲で出来ることをって」

報酬を聞くと、そこらのよくわからない占いよりもずっと安価で、むしろ学生の小遣いといってもいいくらいの金額だった。

「安いね」

「うん、まあね。私だってまだ修行中だし」

少女のけらけらした笑い声に交じって、ごろ、と音がした。先ほどと一緒だ。少女の声がぴたりと止まった。二人で、廊下の奥を注視する。

ごろ、ごろ、ごろ、ごろ。ゆらりと姿を現したのは、先ほどの車輪だった。

「で、出たあああああああ！」

叫んだのは志織ではなく少女のほうだった。志織はあやうく鼓膜が破れるかと思った。少女はへたりこんだまま、せめてもの威嚇にと息荒く霧風をかざす。その瞬間、車輪はゆっくりと揺れて溶けるように消えてしまった。

「ど、どこ行ったー？ まだ滅してないのはわかってるんだぞー。出てこい、出てこい……」

言葉とは逆に、勢いは徐々に失われていって、最後のほうは声にすらなっていかなかった。車輪の出現よりもこの少女の間抜けさが際立って、すっかり気を削がれてしまった志織であった。

彼女の言うとおりに、まだ気配は残っているのは志織にもわかっていた。この世のものではない、独特の匂いがする。慣れたものではあるが、それでも嗅いだ瞬間に嫌悪感が生じるような匂い。

怖くはない。ただ関わりたくないだけだ。志織はまだ床から立ち上がれない少女に声をかけた。

「とりあえずどっか行っちゃったし、私、帰るから」

逃げてしまった警備員は玄関前で待っていてくれるだろうか。もしそこにいなくても、せめて校門の警備室にはいてほしい。そう思いながら志織が歩き出そうとすると、いきなり足首をつかまれた。ぎょっとして視線を落とすと、そこにいたのはもちろん霊でもなんでもない。

「何？ もう帰らなきゃいけないんだけど」

「いま、『どっか行っちゃったし』って言いました？」

ぎらついた瞳で問いかけてくるものだから、思わず志織は気圧されて頷いた。

「さっきも、あれに気づいてましたよね？ ね？」

嫌な予感がして、思わず後ろに下がろうとするが、少女は情けないほどに弱々しい姿だということにその力は強かった。

「見えたんでしょ？ 見える人なんでしょ？ 見えるんですよね？ そういう人？ お願い、だったら一緒にいてえー」

「何で」

部外者がわざわざ付き添う意味がわからなかった。むしろ邪魔じゃないのか。もしも自分と彼女の立場が逆なら、絶対中途半端な人間には同席してほしくない。もしかして偽物？ いや、それならもっと無関係の人間の介入を嫌わないか。

混乱して、疑問符を脳内でぐるぐると回しつつづけている志織に、少女は思いも寄らぬ言葉を発した。

「お願いお願いお願い！ 私、幽霊怖くてダメなのー」

志織は自分の耳を疑った。

「はああ？」

霊能者のくせに霊が怖いなんて聞いたことがない。

「本当さー、私、昔からお化けとかって苦手だったんだよね。だから一人だと怖いのに」

「意味わかんない。じゃあなんで霊能者やってんの？」

「うち、一応代々霊能者ではあるんだけど、血がだいぶ薄まっちゃって、霊が見えるのもう私しかいないんだよー」

志織は踏ん張って、脚に絡んだ少女の手を振り払おうとする。しかし、少女の力のほうが上だった。

「だったら廃業しちゃえばいいじゃん」

「長くやってると、しがらみとかあるんだよー。だから私でも除霊しなきゃいけないんだよー」

「そんなこと言ったって、私を巻き込まれても困るって」

「お願い！」

少女は志織の脚を囲むようにして手を合わせる。ぱん、と乾いた音が静かな廊下にこだました。

「人助けだと思ってえー。家族もほとんど見えないから、見える人仲間っていないんだ。本当さ、そういう人って貴重なんだよ。お願い、せめて友達になってよう」

志織は呆れて長い溜め息をこぼした。それでも、なんとなくこのまま彼女を見てるのは罪悪感があった。こういう思いをしたくないから、なるべく靈感なんて最初からないものだと思っていたかったのに。

考えてみれば、この少女の言うように、同じような能力を持つ人間は志織の周囲にはほとんどいなかった。志織も、特殊な人間を気取っただけの似非でなくて、自分と同じように見える仲間がほしかった。もしかしたら、ちょっとした愚痴のひとつやふたつくらい、受け入れてくれるかもしれない。理解してくれるかもしれない。

「私、除霊なんてできないよ？ 見てるだけしかできないよ？」

それでもいい、と少女は笑った。

「とにかく、そばにいて。それだけで心強いから」

そうやってすがりつく様は、むしろ哀れにも思えた。心強いっていったって、実際に志織が立ち会ったところで、彼女が心穏やかに仕事をまっとうできる予感など全然おこらなかった。幼いころに夢みた霊能者とはまさに正反対の姿だ。

けれども、思えばこの少女の言うように、同じような能力を持つ人間は志織の周囲にもほとんどいなかった。志織も、特殊な人間を気取っただけの似非でなくて、自分と同じように見える仲間がほしかった。もしかしたら、ちょっとした愚痴のひとつやふたつくらい、受け入れてくれるかもしれない。理解してくれるかもしれない。

「じゃあ、ついててもいいけど」

それは、完全に自分のための答えだった。自分以外の……いや、自分以上の能力者というものを知りたい。ボランティアでもなんでもなく、ただそれだけだった。それでも、少女がまるで志織を神のように崇めるから、どうも複雑な気分だった。

少女としては、本当に何の疑いもなく、願ってもない存在の出現に心を踊らせたただけだったが。

「ありがとう、ありがとう！」

腕がちぎれそうになるくらい、少女は握った志織の腕をぶんぶんと振り回した。

「あ、なんて呼べばいい？ 私は祝みさきっていいです。高校二年生です」

そういえば自己紹介していなかったことに、志織も思い当たる。

「私も同い年。渡辺志織です。ここの学生です」

制服を着ているのだから、それは一目瞭然であったことに、言い終わってから気づいた志織は、少し顔を赤くした。それは、暗闇のなかではしゃぐ少女——みさきには気づかれなかった。

少女二人で歩く廊下は静かで、二人の会話がやけに響く。

「渡辺さん、渡辺さんもやっぱり生まれつき見えるの？」

さきほどまでの弱気な態度はどこへいったのやら、みさきはやたらと浮かれていた。志織はどうも調子が狂ってしまう。

「うん、気づいたら。だから、幽霊自体はそんなに怖くないよ。人間でも、好きだったり苦手だったり怖く思える人もいるでしょ？ あれと同じで相手によってはやっぱり怖いよ」

実を言えば、一度逆恨みされた霊への恐怖も、不思議と他の霊には影響を及ぼさなかった。家族を二人も亡くしたはずなのに、関わりたくないだけで、霊に対して無条件に怯えているわけではなかった。

(あらためて考えると、私って薄情なのかな)

祖父だって父だって大好きで、相次いで亡くしたときは悲しかったし、思いきり泣いたのに。

(私のせいじゃないって思いたいだけかも)

二人の死と、自分の出会った霊を結びつけないといえ、その通りだ。偶然かもしれない、と何度も思おうとしている。もしも自分のせいだと認めてしまったら、自分を許せなくなって自己嫌悪で押しつぶされそうだった。

「ね、渡辺さん」

「え、なに？」

話を聞いていなかったというのに、みさきは嫌な顔を見せなかった。

「さっきね、私、四階の階段であいつと出会ったの。それで、次は一階の廊下でしょ？ なんか法則あるかな」

「まだ二回だけだからなんとも……」

志織は、はたと気づいた。

「あ、あの階段のときの声、あんたか！」

「聞こえてた……？」

みさきは恥ずかしそうにする。

「最初に遭遇したときも叫んじゃったの。そしたら逃げられちゃって」

もしもそこで叫ばなかったら、自分や警備員が追いかけることもなく、少し遠回りしただけの平穏な夜を過ごしたのかもしれない。志織はあらためて大きな溜め息をこぼす。

「何がそんなに怖い？ 靈感あるなら存在には慣れっこでしょ」

「慣れっこでも苦手なものってあるでしょ。それって、ゴキブリとか爬虫類が嫌いな人に『何が嫌なの？ 珍しいもんじゃないでしょ』って言うのと一緒だよ」

確かにそう言われると、志織は何も言い返せなかった。しかし、それでも幽霊が苦手な霊能者とは不思議なものである。

みさきもそれについては既に承知していた。彼女だって本当はこんなことしたくはないが、何せ人手は足りないのに依頼は次々に舞い込んでくる。家の大変さは幼いときからよくわかっているし、困った人々を無視できない性分でもあった。

「霊能者の家ってどんなの？」

「うーんとね、基本的には悩み相談なんだよ。紹介とかでうちに依頼が来て、状況を聞いて、それが霊由来かどうかをまず判断するのね。うちに来てもらう場合もあるし、今回みたいに出向く場合もあるし。で、問題があれば除霊するし、なければならないって言う」

「手に負えない場合は？」

「そのときははっきり言うよ。それで、他のところを紹介してもらって、あとはお客さんの判断にお任せ」

みさきの話は志織にとって新鮮で面白かった。みさきはみさきで、そんな当たり前のことを聞くのかと不思議に思っているが、それはそれぞれの育った環境の違いだった。

二人で雑談しながら校内を回って車輪を探す。話しているうちに、みさきの緊張はすっかり取れているように見えた。志織もすこし気が緩んだが、その瞬間寒気がして思わず立ち止まった。

みさきの顔を見る。彼女は、志織以上にガタガタ震えていた。顔面はすっかり白くなっている。

いる。志織が視線を上にとると、音楽室の表示が目に入った。

「開ける？」

志織は小声で尋ねる。みさきはしばらく泣きそうな目で志織を見ていたが、黙って頷いた。

ためらうように少しずつ引き戸を開ける。その先には、ゆっくりと揺れる影があった。もう三度目の出会いで覚悟もあったせいか、志織は思いのほか冷静な自分に気づいた。みさきはやはり恐ろしいらしく、相変わらず腰が引けていた。それでも、なんとか霧風を向ける。

みさきは何かを唱えた。日本語であることは確かだったが、志織にはなじみのない言葉だった。みさきの言葉に反応するように、車輪の揺れが大きくなる。右、左、右、左、右……左……。

車輪の軸には人面が張り付いていた。それは、芝居で使われるような鬼の仮面に見えた。深いしわ、つり上がった目、大きな口。

「ひいひいひい」

みさきが間抜けにも悲鳴をあげる。それで我に返って、再びぶつぶつと言い始めるものだから、いちいち恐怖心が殺される。しかし、ここまできたら志織にできることなど何もなかった。せいぜい邪魔にならないように立っていることくらいだ。

――あ、動く。それは直感だった。

志織は急いでみさきの手を引いた。驚いて宙に上がったみさきの指先を車輪が掠める。

みさきは驚きのあまり声が出なかった。自分の左手を見ると、あれに触れてしまった部分からは血がにじんできている。

「何あれ！」

「知らないよ！」

みさきの手首をつかんだままの志織もやや混乱していた。こういう場面に出くわすのは初め

てで、何をどうすればいいのかもわからない。みさきが魂が抜けそうな顔でがたがたと震えていなければ、自分だって怯えていた。

彼女たちに突っ込んできた車輪は、制止しているものの、一部が壁に溶け込んでいた。それが、にちゃりと音を立てながら離れた瞬間、いやな予感がして志織はみさきを引っ張って廊下に出た。

「ちょ、ちょっと！ 戦わなきゃ……！」

廊下を駆ける。昼間にこんなに全力疾走したら即刻嚴重注意だ。

「あっちはともかく、狭いところじゃこっちが不利だよ！ もっと広いところのほうがいい。私たちは生身なんだから」

車輪は実体がないから壁なんてすりぬけられるが、志織たちはそうもいかない。身動きがとりづらいとあちらにやられるだけだと志織は判断した。

けれども、校舎内で広いところなんてない。あっても机や椅子、機材が置いてあって、動きが取りづらいところは音楽室とあまり変わらない。

「あ、あ、来るうううう！ 来てるうううう！ いやああああああっ！」

走りながら振り向くとやや後方にあの顔があった。きりきりと音を立てながら方向転換し、こちらに転がってきた。

「落ち着いて！ 霊能者でしょ？」

「だから、霊能者でも怖いものは怖いんだってー！」

ちらりと後ろを確認する。もうすぐそこまで来ていた。

「危ない！」

ちょうど階段があって、無理やりみさきと一緒にそちらへ曲がる。車輪はそのまままっすぐ行ってしまった。けれども、追ってくるかもしれない。志織とみさきはそのまま一階へと移動することにした。

「どうしょどうしょ」

みさきは混乱しているだけでなく、この学校の生徒ではない。場所に関しては自分がどうにかしなければならぬという責任感がなぜか芽生えていた。

「ああー、もう、それなら私が切りかかっていきたいくらいだよ」

「それができたらとっくにお願ひしてる……！ 持ってみて」

みさきから霧風が差し出される。志織は先ほどと同じように持とうとするが、今度はいきなり弾かれた。火花の似た強烈な光が散った。

「え？」

「除霊するときになると、お父さんもお兄ちゃんも受け付けないんだ」

最初に握らせてもらったときは何ともなかったはずなのに、いまでは手を近づけようとするだけで目眩に似た不快感が出る。思わずその場でしゃがみこみたくなる。

「さっきと何が違うの？」

「とにかく除霊モードのときはこうなの！」

もっとまともな説明はないのかと言いたかったが、いまの彼女にそういうことを求めても仕方

ない気がした。とにかく、こちらにはゆっくり談笑している暇などない。

志織は走りづらいのでスリッパを脱いでしまう。靴下越しの床は相変わらず冷たく、滑りそうになるが必死に走った。

階段を下りた先には扉があった。考える間もなく志織はノブに手をかけて鍵を回し、その先の空間へ自分とみさきの身体をねじこんだ。

そこは本校舎と特別教室棟に挟まれた中庭だった。三分の一は花壇と数本の木と芝生、残りはアルファルトで覆われた地面が広がっていて、ダンス関係の部活がよくここで練習している。

その空間に飛び込んだ瞬間、さすがに限界でそろって立ち止まる。お互い息が上がっていた。「ごめん、広いところじゃないほうがやりやすい？」

志織は我に返った。なんとなくの判断で動いてしまったが、素人の自分がいったい何がわかるというのか。勝手にみさきを引き回してしまったことが急に恥ずかしくなった。

みさきは首を横に振る。

「ううん。渡辺さんの言うとおりに、さっきの部屋よりいい。私はまだ、きちんと見えないと辛いから」

みさきもまだ未熟だった。達人は天井や壁ごしどころか、目隠ししても相手の気配を察知できるけれども、彼女にはできない。なるべく視界が広いほうがいまは都合が良かった。

「ごめん、そっちから来たら教えて」

そう言うみさきはしっかりした態度で、先ほどまでの怯えようはなんだったのかと志織に感じさせた。

ふと地面の影が気になった。いままでと何も変わっていない。それなのにどこか歪んで見えた。

見上げると、校舎の三階の窓が目に入る。

「あ」

無意識に、志織はぼつりと声をこぼした。

整然と並ぶ窓の一角だけが黒かった。たとえるならば、それは暗い水面だった。波が立つように黒は動き、底から何か浮かんでくるようだった。それはどんどん姿を現していく。どうして動かずに見入ってしまうのか志織にはわからなかった。

ジェットコースターの最初の山を上っていく、あの静かな緊張があった。もしくは、満杯のコップに落ち続ける雫を見ているときの。

車輪はほぼ全身をすりぬけていた。進む、進む、進む――落ちる。果実の落下よりもそれは早かった。

実体はないはずなのに、着地した瞬間、車輪は跳ねた。しかし、音の衝撃に耳をふさぐ余裕はなかった。跳ねて落ちて、もう一度地面に触れたと同時に、車輪はこっちに向かってきた。

「うわああああ、来ないで来ないで！」

みさきは逃げながら威嚇するが、ただ子どもが無邪気に棒を振り回している様子で大差なかった。

「あっちが来るかこっちが向かうかしないと。そのままじゃいつまで経っても切れないんじゃないの？」

みさきよりは冷静だからか、どこか上から目線な言いかたになってしまう。そんな自分が志織はいやだった。これで自分が彼女の分まで立ち向かえるならいい。けれども、その力がなかった。みさきに頼るしかないのだ。

「つつこめない、つつこめないよー」

「じゃあ、なんか技とかないの？ 離れても切れるみたいな！」

「そういうのまだできないー」

腰は抜かさなかったものの、再び半泣きになるみさきに、さっき一瞬見せた姿はいったい何だったのかと言いたくなかった。

「とにかく落ちついてよ！ これじゃ私がいてもいなくても関係ないじゃん」

「そう言ったってえ。渡辺さんがいなかったら、もっと取り乱してるよ！」

「これで？」

そう返さずにはいられなかった。志織の目から見たら、みさきは十分取り乱して見えた。もしかしたら、ここで逃げ出していないだけましかもしれない。

そうやって言いあう二人をからかうように、車輪は執拗に追ってくる。

「うわあああん、どうしようー」

「結局祝さんが動かないとどうしようもないよ」

こんなに頼りない自称霊能者に何ができるのか、志織は把握していない。情けない姿しかまだ見ていない。それでも、志織が理解しているのは、自分にできることは本当にわずかだということだ。彼女には、みさき以上に可能性がない。それをひしひしと感じていた。ただひとつはっきりしているのは、まだ自分のほうがみさきよりは落ちついていること。

「祝さん、二手に分かれない？」

「え？」

「私が追いかけられる役になるからさ、そっちはどこかに隠れててよ。それで隙をついてそれで切りかかって」

みさきはぼかんと口を開け、目を丸くした。

「え、え、だって、そんなことしたら渡辺さんが……」

「いつまでも鬼ごっこしてられないでしょ」

「でも」

「とにかく、早めにケリつけてよ。私、あなたが側にいてって頼むからいるだけだよ。巻き込ま

れてるんだよ。だったら早めに片づけるくらいの誠意見せてよ」

それを言われると弱いみさきであった。

「うー、でも、やっぱり危険だよ」

「一応見えるからさ、ただの人よりは逃げるのうまいと思うよ。とにかく、どこに隠れるか決めて。そしたら適当に走り回って最終的にそっちに誘導するから」

「もしも、分かれて、私のほうに来たら……？」

「そのときは頑張るって」

絶望したような表情のみさきの肩を、志織は軽く叩いた。

みさきと早口で相談し、一度角を曲がって校舎の陰に二人で向かう。みさきとはそこで離れた。みさきはすぐに身を隠し、車輪が角を曲がったときにはもうそこには志織の姿しかなかった。

車輪はまっすぐ志織を追いかけてくる。

正直、こんな経験はしたことがない。わけもわからないままみさきに付き添って、こんなことになって――夢ではないかと思うくらい奇妙な夜だ。もしかしたら、現実の自分はまだ図書館にいて、居眠りでもしているのではないかと思いたくなるほどに。

しかも、頼みの綱は霊能者のくせに霊が怖いなどと言う。そもそも彼女は本当に霊能者なのだろうか。疑わしいにもほどがある。それでもいまは彼女を信じなければどうしようもなかった。

志織は走りつづけた。動きまわりすぎて体がおかしくなりそうだった。けれどもいま止まってしまうたら、何が起きるだろう。車輪に掠っただけで傷ができた。もしもまともにぶつかったらどうなってしまうだろうか。未知への恐怖だけで身体を動かしていた。

隠れているみさきに気づいていないのか、ただ単に志織に目標を定めているだけか、車輪は絶えず志織のあとを追った。

志織の経験上、霊というのは何らかの感情をこちらに訴えてくるものが多い。しかし、あれからは何の意志も感じない。それがまた恐ろしかった。

息を切らせて、志織は特別教室棟周辺を巡り、再び中庭へ戻ってきた。もうすぐそこまで黒い霧が迫っている。蛇のようにうねる影が視界の端にちらついた――追いつかれる！

「祝さん！」

「うん！」

木の枝に上って常緑樹の葉の陰に潜んでいたみさきが、飛び降りながら霧風を叩きつける。

霧風はいとも簡単に車輪を真っ二つに割った。同時に甲高い叫び声が少女たちの鼓膜を攻撃した。志織は思わず転んで、とっさに耳を押さえる。まるで巨大なガラスをひっかいたような、目眩を引き起こしそうになる音だった。

片目だけ開けて見ると、車輪だったもののひとつはその場で倒れ、もうひとつはそのまま脇へ転がり、やや離れたところをかたかたと音を立てながら地に伏せた。そして、そのまま飛散するように無くなってしまった。いくらかの黒い霧が宙をさまよっていたが、それらも数秒後にはふっと消えた。

志織は瞬きを何度もするが、もう何の音も臭いもしない。荒い息を整えることも忘れ、呆然とその様子を眺めていた。何が起きたのか、見て理解しているはずなのに脳の処理が追いつかない

。みさきもその場でへたりこんでいたが、霧風の無事と車輪の消滅を確認すると、すぐに志織のもとへと向かっていった。

「渡辺さん、大丈夫？」

「うん、さすがに、疲れたー……」

二十分は全力疾走していたのではないか。喉はひりひりするし、ふくらはぎは一気にだるくなった。靴下を脱ぐと足の裏は皮が何カ所もめくれていた。心臓の音はやかましく、横隔膜も穴があいてしまうのではないかと思うほどに激しく上下している。汗で濡れたブラウスが胴や腕に貼りつく。

「え、除霊できた？」

「うん、ばっちり。渡辺さんのおかげだよ」

みさきは志織に抱きつく。それに大きな反応を示す気力は、いまの志織にはなかった。なんとなく、ぼんぼんとみさきの肩を叩くと、彼女はまだかすかに震えていた。

先ほどの光景が浮かんでくる。自分とはんでもないものを見てしまったのかもしれない。みさきは力なく呟いた。

「祝さんって、本当に霊能力者なんだね……」

みさきは一瞬その意味もわからず首をかしげたが、すぐに大笑いした。志織も自分の言ったことが馬鹿馬鹿しくて、思わず笑ってしまった。

職員用玄関にある志織の靴を取りに行くと、泣きそうな顔の警備員と青い顔をした三年生担当の教師が立っていた。

「あ、来た！ ごめん、置いてって本当にごめん！」

いきなり警備員は志織に向かって土下座する。どうやら、玄関を出たものの志織を置いてきてしまったことを後悔し、かといって中にもう一度入る勇氣もなく、警備員室とここを往復していたらしい。教師のほうは、みさきに依頼をした有志の代表とのことで、警備員から話を聞いたけれどもやはり入ることができずに一緒に待機していたとのことだ。

「どうでしたか？」

「はい。俗に言う……妖怪みたいなものですね。人の魂ではありませんでした。これが正体です」

みさきは仕事上の彼女と同一人物とは思えないほどしっかりした態度で、手のひらに乗せた木片を見せた。

「なんですか、これは」

「百年、二百年前のものではないと思います。元は……刑場のものだと思います」

「あ」

志織は納得する。元刑場からは、百メートルも離れていない。

「事前に古い地図を見たのですけれど、ここがちょうど刑場への道が通っていたようですね。壊してしまったので、何に使われていたものかはこの状態だと判別がつかないのですが」

「車輪？」

志織が尋ねると、みさきは曖昧に頷いた。

「かも、しれない。資料だと、罪人を市中引き回しにするのは馬がよく使われていたようなのですが。どちらにしても、そこで過ごした人々の念が実体化したんだと思います。原因は……多分、誰かが碑にいたずらしたんでしょうね。側面にテープとインクの跡がありましたし、地面を掘り返したあとがありました」

教員は頭を抱えた。毎年、肝試しについては口酸っぱく注意しても高校生の好奇心は止められず、近隣から苦情がくることもしばしばだったという。

「供養とかしたほうがいいですか？」

不安そうに尋ねる教師に、今度は確かに首肯するみさきだった。

「そうですね。いまちょっと行ってみませんか？」

他に待機していた教員二名とも合流して向かった刑場跡は、志織の通学路とは反対方向だ。肝試しにも参加したことがなかったので、志織は噂でたびたび耳にしていたけれども、初めてここを訪れた。何もない、静かな公園だった。人も動物もそれ以外も、誰もいない。

片隅に碑があった。状態については、みさきの言ったとおりだった。碑まで行った証拠となる物を事前に土に埋めて、参加者は一人ひとつずつそれを掘り返して持ち帰ったのではないか。そんな想像をしながら、志織はみさきを見る。

みさきは地面をきれいにならして櫛を差し、瓶を取り出して中身の液体を周辺に撒いた。そして拍手を一回。その音は音楽ホールで鳴らしたように響いた。残響がその場を満たして、ゆっくり消える。

「これでひとまず大丈夫でしょう。また何かありましたら……その、ご連絡ください。今回に関連したご相談でしたら、追加料金なしでよいので」

「ありがとうございます」

教員たちはゆっくりと頭を下げ、反射的に志織も頭を下げる。みさきは、大人びた笑顔でそれに応えた。

時刻は十二時近かった。こんな遅くまで学校にいたことはないが、それよりも、あれだけ動き回っても三時間にも満たなかったことに志織は驚いた。ずいぶん長い夜に思えた。

警備員室に預けた荷物を取りに行き、駅に向かう。背後から声がして振り向くと、みさきが走って追いかけてきた。

「渡辺さん、本当に、本当にありがとう！」

「え、私、何もしてないよ？」

ぶんぶんとみさきは首を振って否定する。

「ううん、助かったってもんじゃないよ！　今回は特に怖かったから、いてくれてよかった」

志織は、さきほどのみさきの様子を思い浮かべていた。最終的にはきちんと対処し、依頼人とも問題なく仕事の話をしてきた彼女は、自分なんかよりもずっと優れた人物に見えた。

そして、自分は本当にただ見えるだけの人間なのだと噛みしめた。今夜だって無様に走り回っただけだった。それでも、みさきがそう言ってくれるのは嬉しく、気が軽くなった。

「怪我大丈夫？」

みさきは心配そうに尋ねる。裂けたセーターとブラウスは仕方ない。傷は職員室の備品を拝借して、簡単な手当だけは済んでいた。

「平気。思ったよりたいしたことないから。あ、それより祝さんだって」

志織はごそごそと鞆を探った。みさきは不思議に思って、それを見つめる。志織が取り出したのは絆創膏だった。女子高生らしいかわいらしさはあまり持ち合わせてないので、どこにでもありそうな無地のものだったが。

「音楽室で指かすったでしょ？ これ使って」

手当をしたのは志織だけで、みさきはその様子を見ていただけだった。みさきはいたずらがばれてしまったように舌を軽く出し、手を見せる。血は止まっているものの、赤く染まったままだった。

「ありがと。なんか、こういうの初めてだ」

みさきは大事そうに絆創膏を受け取り、それを摘まんでにこにこ眺めていた。そして、満面の笑みで志織に提案を持ちかけた。

「ね、メアド交換しようよ！」

勢いに負け、みさきに言われるまま連絡先を教えあった志織であった。

駅に着くと、みさきは反対方向だということでそのまま別れた。電車の窓ガラス越しに無邪気に手を振る彼女に、つつい笑いがこぼれた。

終電も近く、気づけば傷やらなんやらでボロボロになった女子高生の姿は目立った。志織はなるべく身を小さくして、端の席に座った。

深く息を吐きながら、携帯電話のアドレス帳を見る。すぐに見えるあ行の「祝みさき」の文字。志織はこの夜の出来事が夢ではなく現実だったのだとしみじみ感じながら、その文字を眺めた。

。

志織はかれこれ二時間ほど悩んでいた。目の前には、学校から配布された進路希望調査票。彼女ももうすぐ高校三年生。受験勉強に本腰を入れなければならない。

これほど悩むのは、志織には既に父がなく、渡辺家の家計は母の稼ぎだけで成り立っているからだ。できれば高校卒業後はすぐに就職して働きたいと思っていたが、それは母に止められた。既に何らかの能力があるならともかく、いまの志織だったらそのまま大学に上がってほしいという。それならせめて専門学校へ行って、資格を取るなりして働くための勉強に専念したいと思っていたが、これといって就きたい職業が思いつかなかった。

母には安定した職もあって、きちんと収入を得ているから、学費の心配はしなくていいという。それでも、なるべくだったら不必要な負担は避けたかった。

志織の母は、妙なところで頑固だった。夫に先立たれても、それで娘に苦勞してほしくないといい、家計の助けのためのアルバイトは認めないほどだった。小遣いくらいは自分で稼ぐと主張しても聞き入れず、結局アルバイト全面禁止令を出されてしまった。志織も浪費する性格ではないので、月々にもらう分で十分やりくり可能だったが、単純にアルバイトをしている他の子が羨ましい気持ちもあった。

「お母さんも志織も真面目だね。なんでそんなに堅いの」

友達からはそう笑われたが、母一人子一人となると、お互いしがらみや意地や相手への思いでがんじがらめになってしまうのだと志織は主張したかった。

学校の成績は問題ない。予備校なしでも受かるところは受かるだろう。問題は学費についてどうやって折り合いをつけるかだ。安いところにするか、奨学金にするか、学費免除の制度があるところにするか。

「好きな勉強をすればいいのよ。たとえそれが就職に結びつかなくても、何かの役に立つのだから」

母はそう言うけれども、志織は遊ぶための四年間はいらなかった。そんな余裕があったら、もっと他のことに使いたい。母と自分の暮らしに充てたい。

推薦入試で入れるところで、志織が心ひかれるものはなかった。将来どうしたいのか、全然決まっていない。大学に通って卒業したらどこかに就職して――その先は何ひとつ想像できなかった。もしも適当に入学して、そこで勉強になじめずに苦しんで、留年やら退学やらになってしまったらどうしようか。志織は大学生活に不安しか感じられなかった。

（お父さんが生きていたら、相談できたかな）

彼女がこんな不毛な過程をするのは何十回目になったのかも不明だ。事あるごとに、父が亡くなっていなければ、と思わずにはいられなかった。いまの時期になっても、まったく目標が定まっていない自分に腹が立った。

「あーあ、もう嫌だなあ」

方々からの大学案内や赤本が置かれている進路相談室の机で、志織は突っ伏す。どうせ自分し

かないからと、独り言も大きくなってしまふ。

いきなり、ぶるぶると携帯電話が鳴った。タイミングが良くて思わず変な声が出てしまった。赤のライトはメール受信のサインだ。志織が携帯を開くと、予想外の人間の名が目に入った。祝みさき。いまからほんの数ヶ月前、志織が突然巻き込まれた校内の心霊現象をきっかけに出会った霊能力者。いろいろあったはずだが、まず浮かんでくるのは悲鳴とくしゃくしゃに歪めた顔だった。

結局あのあと、二人が連絡を取りあうことはなかった。みさきはみさきで忙しかったし、志織も制服の惨状や夜遅くまで学校にいたことを母親に隠すので精いっぱいだった。

志織は件の夜のことを思い返し、苦笑する。そういえば、まだまだ聞いていないことはたくさんあった。一度、飲食店かどこかで話しこんでみたいと思った。

メールの内容を読む。件名は「助けて！」だった。志織は笑顔のまま携帯電話を閉じた。もしかしなくとも、いやな予感がした。できればそのまま放っておきたい気持ちでいっぱいだったが、もういちど開いて内容を確認する。

「みさきです。お久しぶりです。最近はどうですか？ 実は困っていることがあって相談に乗ってほしいので、今週の夜で空いている日があったら教えてください。できれば早いほうが嬉しいです。よろしくお願いします」

文面は高校生にしては十分丁寧で、しかも華やかな絵文字もついている。かわいらしい彼女のイメージそのままだ。しかし、志織のいやな予感はまだ続いている。困っていることとは何か。たったひとつの可能性を必死に追い払い、志織は何パターンも考えてみた。そのたびに、志織が必死に絞り出した脆弱な他案は最有力候補によって見事に押しつけてしまうのだった。

「お久しぶりです。何に困っているの？」

そっけない、文字だけのメールを返す。数分もしないうちに、みさきからの返信が届いた。

「実は、また除霊に付き合ってくれたら嬉しいです！」

志織の肩の力が一気に抜けた。この間みたいな目に遭うのは、もうこりごりだった。できれば一生一般人でいたい。やはり霊には関わらない方が身のためだと、あの一件で志織は判断していた。

志織は何度か携帯を見つめては溜め息をつく動作を繰り返した。みさきは、貴重な存在だと思う。他に見える人と会うことは稀だった志織にとって、自分以上の能力を持っているだけでなく何か起きてても対処できる術を持っている彼女は特別な存在だった。彼女が困っているのなら助けてやりたいとも思う。けれども、あと一步のところまでその答えを出せずにいた。

逡巡していると、今度は音声着信のバイブ音が響いた。慌てて落としそうになる。画面に出た名前は、みさきだった。

「もしもし？」

恐る恐る出ると、みさきの声がした。

「もしもし、渡辺さん？ 祝です。先にメール送ったんですけど、電話しちゃいました。ごめんなさい」

たった一回しか会っていないのに、みさきの顔がすぐに浮かんだ。ただし、主に叫んでいる

顔が。

「ごめん、まだ返事見てないや。で、何？」

「それがねえ、またちょっと依頼が入ったんだけど……あああああ、怖いよおおおおおお」  
すぐに涙声になる。それをもう既に聞きなれたと感じてしまうのはなぜなのか、志織にはわからなかった。

「え？ あのあとも仕事とかなかったの？」

「あったけど、ちっちゃいやつか霊じゃないやつだったんだもん。今回はそういうのじゃないんだ」

「いや……頑張ってる……」

志織が力なくそう言うと、みさきはヒートアップする。

「やっぱり怖いよー。みんなついてきてくれないし、もう渡辺さんくらいしか頼れないんだよー」

「私、一回しか会ってないだけの他人なんだけど」

「冷たいこと言わないでえ。一緒に解決したじゃーん。私、渡辺さんを心の相方だと思ってるの。お願い、来てえええ、助けてえええええ」

いつの間にそこまでの地位に昇格したのだか。志織には謎だった。

「お願いだよー。一緒に来てえ。なんならバイト代出すからさ」

バイト代？　そこで志織の目が輝き、すぐに自己嫌悪に陥った。お金で心を動かされてはならない。

「祝さん、お金で友情をどうにかしようなんて良くないよ？　スネ夫じゃないんだから」

自分にも言い聞かせるように、志織は諭す口ぶりで答える。そう言いながらも、進学にあたって何かの足しになりそうだと考えてしまう自分が嫌だった。

「あ、そうか……。じゃあ、お友達ってことで！」

それでも志織には抵抗があった。あんな面倒な夜になるのは懲り懲りだった。

「本当に渡辺さんしかいないんだようー。見える仲間じゃないー。お願い、協力してえ」

見える仲間——いい響きだ。しかし、みさきは自分とは格が違う。また足手まといにしかならないに決まっている。複雑な感情が喉に絡みついて絞めてくるような心持だった。

「私にどうしてほしいの？　せいぜい走り回ることしかできないよ？」

「走り回るなんて……。この前みたいな目に遭わせちゃったのはごめんなさい。今後はね、ただ、そばにいてほしいだけなの」

みさきだったら、それを男子に言えば何人でもついてきてもらえるのではないか。その言葉を志織は飲み込んだ。

総合的にはみさきのほうが志織よりずっと優れているが、ひとつだけ志織のほうが優っているとしたら、霊を怖がらない精神だ。志織だってまったく恐ろしくないわけでもないが、これに関してはみさきがあまりにも論外の域に達していた。

(これで失敗してどうにかなっちゃったら、目覚めが悪いなあ)

自分がいなくてもどうにかなるだろうと推測したが、志織の脳裏に焼きついたみさきの姿の大

半は、悲鳴をあげたり怯えた姿だった。なんとなく心配する気持ちもわいてくる。

「……今週の予定言うね」

一瞬の沈黙。

「あ、ありがとうおおお！ 渡辺さん大好き！ 大好きだよおおお！」

電話からみさきの魂だけ現れて抱きつかれても不思議ではないくらいの喜びようだった。けれども、自分にいま巡った感情は、霊が見える仲間がほしい、バイト代、みさきは頼りなくて心配などと言ったどうしようもないものばかりで、後ろめたい志織だった。

志織は手帳を開いて予定をチェックし、翌日が母の夜勤であることを確認した。そのことを告げるとみさきは大喜びで、通話を切るまでに数え切れないほどの礼を志織に告げた。

「あ、渡辺さーん！」

ターミナル駅は賑やかで、待ち合わせしやすい場所はどこも混んでいた。それでも、みさきがすぐさま志織を見つけ、一生懸命跳ねて自分の居場所を教えるものだから、志織も難なく合流できた。

「久しぶりー。元気だった？」

「おかげさまで。傷ももうないし」

脱がないと見せられないけどと志織が付け加えて言うと、みさきは口を押さえて笑った。自分もと見せてきた指先は、時間が経っていることもあってすっかりきれいになっていた。

「絆創膏、ありがとね」

「ううん、ただ親に持たされているだけのものだし」

「へえ、親御さん、しっかりしてるねー」

みさきは前回のようにカジュアルな女の子らしい私服で、通学用の鞆と市販のボストンバッグ、斜めがけバッグ、それから霧風を入れた袋を持っていた。

「何入ってるの？」

「あ、こっちは制服。これからロッカー入れるけど、渡辺さんの服も一緒にでいい？ こっちの斜めのは除霊道具」

みさきは事前に、志織にも私服を持ってくるよう頼んでいた。待ち合わせたのは、飲み屋が建ち並ぶ繁華街の近く。あまり高校生が制服でうろつくような場所ではない。志織も事前に動きやすい格好に着替え、制服は適当にバッグに突っ込んでいた。

「貴重品は大丈夫？」

「うん、このなかに入れてあるから。これだけお願い」

みさきは領収書が出るというコインロッカーに移動し、そこで二人分の荷物を詰めた。手なれた様子に、志織は思わず尋ねた。

「いつも制服そのなかに入れてるの？」

「うん、制服でうろつくと補導されちゃうかもしれないし」

「いっそ私服校に行けば良かったのに」

みさきは苦笑いした。

「徹夜になったらそのまま学校行くから着替えは必要だし、荷物があるのは変わらないよ。だったら、万一のことを考えたら、昨日と同じでも問題ない制服校のほうがいいかなって。制服が汚れたときは慌てるけどね」

前回の事件で、夜中に帰宅した志織はセーターとブラウスを修繕する暇もなく寝てしまった。おかげで翌日は、まだ寒くないからとクローゼットに押し込んでいたブレザーを着て登校するはめになった。それを考えると、どちらにしる大変さは大差ないような気がする。

みさきはロッカーの施錠をし、暗証番号を控えて志織に渡す。

「もしもはぐれたら、これで開けて。その場合、私の荷物は落としもの扱いでいいから。その際に領収書は受け取って私の鞆に入れといて」

「領収書って、やっぱり商売なんだね」

「まあねー」

バイトもしていない志織には、高校生で商売をしているみさきはやはり別世界の人間に思えた。だからこそ、第一印象とのギャップに戸惑う。

「さ、行こうか」

みさきに案内され、志織は夜の街に足を踏み入れた。自分も普段付き合う友人もこういう場所には馴染みがないから、ネオンや賑やかな大人たちの人波が新鮮だった。しかし、これから行く場所のことを考えると、興奮と同じくらいの不安が広がった。

「やあ、みさきさん。そちらがお友達ですか？ こんなところまでよく来てくれましたね。ありがとうございます」

そう言って二人を出迎えてくれたのは、五十代半ばに見える紳士だった。相手に指定された事務所につくと応接間に通された。自宅で使っているものとは比較にならないほどのカップで茶を出され、志織は思わず固まってしまった。ソファもふかふかで、身体が沈んでしまいそうになる。みさきが姿勢を正して品よく座っているのが信じられないくらいだった。

「社長、おみえになりましたよ」

紳士が奥にむかって声をかけると、社長室の扉が開く。登場したのは、恰幅のいい男性だった。スキンヘッド頭でサングラスをかけており、派手なスーツを身にまとっていた。小指が関節ひとつほどなかったが、志織は見て見ぬふりをした。

「ずいぶん若いなあ。君も現役高校生？」

「は、はい！」

思わず立ち上がると、男たちは苦笑して座るように言う。志織は顔を真っ赤にして、椅子に腰かけた。

「彼女が昨日お話しした助手です」

「渡辺と申します」

一生懸命会釈すると、社長は笑った。

「みさきちゃんだけでもかわいいのに、こんな助手までつけちゃあ大忙しだなあ」

「まだ修行中の身ですよ。渡辺さんについては、私はとても頼りにしていますけれども」

その言葉は本当といえば本当とも言えるが、この場では口にしないでほしかった。威圧感ある男たちに囲まれても平然としていられるみさきが、志織には信じられなかった。いまの状況では、明らかに志織のほうがよほどみさきに頼ってしまいたくなる。

「自己紹介が遅れてごめんなあ。俺が横川で、そっちが立野。ここいらのビルやら土地やらで商売してるんだ」

一等地に物件を持っているということはかなり裕福なのだろう。事務所の内装も豪華だし、横川も立野もじろじろ見なくてもわかるくらいに身なりは立派だ。

「こういう場所には変なものがでることも多くてね。みさきちゃんの家にはお世話になっているんだ。爺さんが亡くなったときはどうしようかと思ってたんだけどさ。ほら、祝家も跡継ぎがいなくて大変だって聞いていたから。でも、みさきちゃんが頑張ってくれるっていうんで、ほっとしたんだよ」

「やだ、横川さん。私はまだまだですから」

「いやさ、みんな本当に喜んでいるんだよ。こういうので頼れる人がいるって、それだけでありがたいんだから」

みさきは曖昧に笑う。横川の熱心な口ぶりで、みさきが言っていたしがらみというものを窺えるような気がした。

「それで、今回は」

「ああ、そうそう。ここからちょっと離れたところにあるんだけどさ」

立野がこの近隣の地図を広げる。現在地である事務所は赤く塗られていた。

「こここの二階。最近ヘアサロンなんだけど、オープンしてから急にビル全体でラップ現象ってのが起きてさ」

老朽化した建物を新しく造りかえたのが十年ほど前。ヘアサロンの前は占いとその道具の店が入っていたが二年前に撤退し、それ以降はずっと空いていた。

「最近不景気だから、こういう場所でも店を出したがるのっていなくなっちゃったんだよ。ようやく賃料下げて入ってもらったと思ったらこれだ」

「サロンの人は」

「いま呼んでくるよ」

立野が連れてきたのは若い男性だった。飯倉と名乗ったその男は、まだ二十代後半に見える。ゆるいファッションで、渋谷や原宿あたりでうろついてそうな風貌だった。そのわりには態度が弱々しいのは、横川の存在のせいかもしれない。

「いまのサロンの様子は？」

「ひとまず、内装途中で放り出してる。こっちだって困ってるんですよ。せっかく雇った若い子は示し合わせて逃げるし、オープンの日取りも未確定なんですから」

飯倉は控え目な態度だったが、愚痴まじりの口調だった。

「心当たりは」

「特にないですけど。この歳まで幽霊自体信じてなかったくらいですから」

みさきと志織はそれぞれメモをとる。どちらかが聞き洩らしたときの保険だ。尋ねるのはもっぱらみさきの役割だが。

「横川さん、前の占いショップのときは、なにかありましたか？」

「いや、普通に業績不振で撤退。家賃安くしろってねばられたけど、こっちは商売だからさ。まあ、あのあとこんなに間空くなら下げてもよかったかもしれないね。まあ、でも、このあたりはサロンのほうがやっぱり利益出やすいし」

「うーん」

みさきはペンで顎を叩く。

「一度、現場見せてもらってもいいですか？ できれば、私と渡辺さんの二人で」

飯倉は明らかに嫌そうな顔をした。しかし、横川が二つ返事で引き受けたから、反論ができないようだった。大家と店子の関係からなのか、横川自身が恐ろしいからなのかは不明だが。

立野と飯倉に案内されて、四人で件のビルへ向かった。建物自体は築十年ということもあり、新しくまだ綺麗だ。中に入っているテナントも、看板を見た限り印象がよい。

「……」

志織は思わずみさきを見つめた。みさきも複雑そうに志織を見ていた。

「あの、なんかある？」

疑わしげに飯倉が尋ねる。志織はどう返事していいのか戸惑った。あの、独特の臭いがする。別にそれはごく限られた場所で発生するものではない。霊は世のなかの至るところにいるので、微弱なものならどこだってそれを嗅ぐことはある。しかし、ここは違った。

「ちょっと、気配が強いですね。ここに立っただけでわかります……」

志織は、数ヶ月前の車輪を思い出した。あのときも同じくらい強い臭いがした。憂鬱になったが、それ以上にみさきが気になった。彼女は女子高生ということもあり、軽んじられることは多い。だからなるべく、たとえ元々馴染みのある横川たちが相手でもしっかりと口調を保っているのだ。ここでも平静を装っているが、さっそく声が震えている。

「とりあえず、案内するからついてきて」

飯倉は鍵をゆすりながら言うが、みさきは思わず大きな声を出してしまった。

「え？」

「え、ってなんだよ。俺の店なんだから当たり前だろ。何？ なんか見られちゃまずいの？ 本当はインチキしているの見られたくないとか？」

飯倉がバカにしたように笑う。

「飯倉さん、うちは祝さんの家自体にはもう何十年もお世話になっているんですよ。いんちきなんてとんでもない。みさきさんだって着実に実績を積み重ねていっているのですから」

立野が助け船を出してくれる。飯倉は納得がいかない様子で黙る。

表のエレベーターは現在二階には止まらないとのことで、階段から上がって二階通路に出る。そして、しゃれたデザインの扉を開けた。

「わ！」

みさきが立ち止まって、あとに続いた志織はその背中にぶつかってしまった。訝しみながらみさきの肩ごしに向こうを見やっ、志織もわずかに驚いた。その向こうにあったのは、一人の女性のバストアップだった。それは霊でもなんでもなく、ただのポートレートだ。

「あー、びっくりした」

大げさな調子で志織が先に口を開く。ここで下手にみさきが騒ぐと厄介だろうと予想した。そんな志織を見て、立野が苦笑した。

「こういう現場は初めてですか？」

「えーっと、二回目です」

「慣れないとね。みさきさんみたいに」

それを聞いて冷や汗をかいたのは、みさきだった。横川の依頼が今回初めてではないが、いつもは人払いをして仕事をしている。みさきは志織のフォローに感謝した。

「これは？」

「ああ、これは去年コンクールで賞取ったときの。気に入ってるし、引き伸ばして飾ろうと思って。まだ仮で置いてるだけだけど」

店内は、志織が予想していたよりも広かった。小ぶりの一軒家なら、ひとつやふたつは余裕で入りそうだ。壁と床の仕上げはほとんど済んでいるが、まだシャンプー台や鏡は途中までしかできていない。壁には、同じようなポートレートがいくつも飾ってあった。

気持ち悪い。空気が濁っており、妙なものが視界にちらつく。志織は奥まで見渡して絶句した。霊が朝の通勤ラッシュのごとく押し込められていた。一斉にうつろな目で見つめられ、みさきは泣きそうになっていた。それでも依頼人の手前、絶叫しなかったところは偉いと志織は感心した。

「いますか？」

「はい。数えたくないくらい」

「あ、あの！」

みさきが挙手をした。全員の視線が彼女に集まる。

「ここ、危険です！ すごく、危険です！ 立野さんと飯倉さんはなるべく離れたほうがいいと思います……」

後になるにつれて、トーンダウンしていく。志織まで気が滅入ってしまいそうになる。もっと言いかたはあるだろうに。横川と会話していたときの彼女に戻ってきてほしかった。同一人物とは思えないほどの変貌ぶりだ。

「はあ？」

不満げな声を出したのは飯倉だった。

「俺の店なんだけど、どうして俺は立ち会えないわけ？ どうせインチキだろ。そうやって大人

騙して金取ってんの？ まったく信用できないんだけど」

正直、志織もそう言いたくなる気持ちはよくわかるが、前回の彼女の取り乱しように考えると逆に立ち会われたほうが信用をなくす気がした。

「飯倉さん、今回のお金を払ってるのはうちなので」

立野がなだめるが、飯倉はまだ不服そうだ。

「そもそも、面倒な物件押しつけたのはそっちでしょ？ こんなところだって知ってたら、いくらなんでも借りなかったんですけど。この子にいくら渡してるの？ 本当に除霊だけの謝礼？」

その態度にまっさきに怒りがわいたのは、志織だった。

「祝さんはちゃんとしてます！ 大人げないこと言わないでください！」

本当は、志織はみさきの怖がりにも腹が立った。ここで一気に片をつけて、しっかりしたところを見せてほしかった。そして、霊を見ることができない彼らは、みさきが車輪を一刀両断したときのような光景を見ることができないのだろうと考えると、唇が震えた。

「飯倉さん、こうしましょう。とりあえず、今夜は二人に任せる。それで、明日も何か起こった場合は、そのときは立ち会わせてもらいましょう。うちは彼女以外の霊能力者さんも知っていますが、こういうとき霊能者以外はあまりうろつかないほうがよいみたいです」

「でもさ」

「わかりました。そうしましょう。もしも私たちが帰ったあとも何かあるようでしたら、そのときは立ち会いをお願いいたします。今夜中にケリつけますけど」

涙目になりながら、みさきは力を振り絞って言った。その口調はとても力強く、思わず志織は呆けてしまった。飯倉はまだ納得していなかったようだが、なかば立野に抱えられるようにして階下の車へと去った。

二人の姿が完全に見えなくなり、志織がほっとしたのもつかの間、いきなり後ろから抱きつかれた――みさきだった。

「あああああ、怖いよ怖いよー。なにこれ、満員電車じゃないんだからさー。もうさ、こういうのはやめようよう。よくないよう。もう、ああああー」

いままで我慢していた分をすべて吐き出すように、みさきは愚痴りはじめた。霊があれだけいるなか無視して喋れる時点で相当彼女も肝がすわっているように感じた志織だった。

「ほら、さっさと終わらせるよ」

「うん。絶対明日も来たくない。一日で終わらせよう！」

ああ、やっぱりそういう理由か。先ほどの啖呵が急に安っぽく思えた。

密集した霊は霧風を持ったみさきが――正確には、そのみさきに抱きつかれている志織が近寄るだけで散っていった。気配が弱くなっただけで部屋にはまだいるようだ。気弱な霊たちで害はない。悪意を感じられないどころか、こちらに怯えているようで逆に気の毒になるくらいだ。

「祝さん、とりあえず皆隠れちゃったよ」

みさきは薄目で視界を確認し、ようやく両目を開いた。まだ霊の気配が完全に消えていないので怯えた様子だ。はあ、とこぼれる溜め息。

「ああ、怖かった。渡辺さん助かるわー」

明らかにそれは間違っていた。霊たちはみさきの霧風に注目するばかりで、志織やみさき自身は眼中にないようだった。

「ひとまず落ち着こう」

まだうっすらと霊の気配は残るとはいえ、これ以上怖がられてはならない。志織はみさきを部屋の中央に置いてあった椅子に座り、自分もそばにあった椅子を引き寄せて腰かけた。

なぜか落ちつかない。ぴりぴりとした空気の感触が、二人の肌を撫でる。しかも、姿を見せるようになった霊たちはまたぽつぽつと部屋の隅に溜まっていく。こちらに危害を加えるつもりはないようだが、彼らが持っている悲愴感が伝わってきて気が滅入る。

「なんか、嫌な感じだね、ここ。開いても流行らないんじゃないかな」

「渡辺さん、よく平気だね。怖くないの？」

志織は頭を掻いた。

「昔、すごい見たんだ……」

喉からゆっくり声が上がる。当時のことを思い出すと、いつもそうになってしまう。

「そういう場合って霊そのものが怖くなるかなって思ったらそうじゃなくて、それはいまでも怖いけど、逆に他の霊が怖くなくなったっていうか。それも妙な話なんだけど、何もこっちに害がないなら、きっと私は平気なんだと思う」

できれば関わりあいにはなりたくないけれど、と志織は付け加えた。不思議なことに、いまはさらに霊への嫌悪感はない。それはみさきがいるからだ。志織は心のどこかで、いざとなったら彼女がいるという安心感を得ていた。

「とりあえず、どう感じる？」

「うーんとね、まずは占いショップが怪しいかなって思ったんだ。ああいうのは、いいものも悪いものもひきつけるから。でも……」

言いよんだみさきの顔がひきつる。

「で……で……」

「で？」

「でたあああああああああっ！」

振り向くと、そこには誰もいない……はずだった。鏡とポートレートしかない部屋。ポートレートに写る茶髪の女性が、やけに浮き出て見えた。それはただの写真ではない。あきらかに人の姿をしてゆっくりと出てきた。

しゃきん、と金属音が響いた。とっさに志織は、パニックになって正常な判断ができないみさきを突き飛ばした。風が吹いて髪や襟が一瞬舞い上がる。ぱらぱらと志織の首に何かが落ちて、見ると、横の髪が一房切られていた。

「またこういうの？」

車輪のときとは違い、傷がつかなかっただけよかったかもしれない。

しゃきん、しゃきん、しゃきん。女が歩くたびに金属音が鳴る。

「はさみい……」

床に投げ出された姿勢のまま顔を上げたみさきが呟いた。女の手には、彼女には不釣り合いに

大きなカット用はさみが握られている――のではなく絡みついていた。少女二人に見せつけるように何度も刃が閉じる。

まっすぐ向かってくる。志織は思わずみさきをかばった。また風。肩に二房ほどの髪が散る。みさきは這ったまま壁際に移動し、志織も背中を見せないようにしながら慎重に足を進める。

女はそこでみさきたちに迫ってくることはなかった。ただ、はさみの音を何度も立てながら室内を徘徊する。みさき以上に怯えていたのは、他の霊たちだ。女は腕を振り回しながら霊たちを威嚇する。しかし、霊はみな逃げられず、時には彼女の刃に裂かれてしまう。

みさきは目をそむけた。志織も、霊たちの断末魔に耳をふさぎたくなかった。志織は、どうして彼らが壁をすり抜けるか何かして脱出しないのか疑問だった。あの女はともかく、他の霊たちはどれもこの場所に縛られるほどの縁を感じられなかった。

一人の霊が壁をすり抜けようとするが、まるで実体があるように弾かれてしまう。

「祝さん、なんかこの部屋おかしい」

みさきは声も出せないほどだった。半泣きで、うんうんと無言で頷くだけだった。

志織はみさきの手を引いて、こっそり移動する。女の視界に入らないようにしなければ、自分たちに害はないようだ。そのかわり、切られる霊たちを見殺しにする。この密室の片隅でさながら虐殺のような光景を見ないふりしなければならぬのは、志織も苦痛だった。割かれた霊たちの残骸――悲しみや恐怖が部屋に溜まっていく。

志織が驚いたのは、それをことごとく女が吸収したことだ。その分、女の存在感が増す。

「な、なんか気配強くなってない？」

志織がみさきの肩を叩くと、みさきが震えながら答える。

「俗に悪霊って言われるもののなかに、そういうのいるんだ。周りの魂を栄養にして……えええーん、気持ち悪い、吐くうー」

みさきはよろよろと入り口近くの窓に手をかけた。そこで泣きじゃくるような表情がずっと消えた。

「祝さん？」

みさきは窓を開けることも忘れて、ある一点を凝視した。志織も彼女の視線をたどる。金属製の窓枠の一部がかすかにへこんでいる。絵が描いてあるように見えた。

とっさに志織が触ろうとすると、みさきがあわててその手を止めた。

「触らないで！」

「え？」

みさきは目を細めて、それを確かめる。

「霊たちが逃げられないのは、わかった気がする」

みさきは生唾を飲み込み、霧風を構えて向き直る。その先には女がいた。こちらを睨みつけながら向かってくる。

「まずはあの人をどうにかしなきゃ」

しゃき、しゃき、と刃が閉じる。志織はとっさにみさきの袖を握る。そこには、みさきの切られた髪が引っかかっていた。

「絶対に」

自分のものでもみさきのものでもない声に、びくりとなる。それは、あの女のものだった。

「絶対に許さない」

憎しみのこもった声色だった。じわじわと彼女の姿からにじみ出る怒りに、志織も固まる。

みさきは、女と背後を交互に見る。背後といっても、じりじりと下がっていくうちに追いつめられ、壁に迫っていた。

「あああああああああ」

みさきはまた泣きそうになっていた。霊でなくても、刃物を持った女がせまりくる構図は確かに恐ろしい。

「うええええええ、やだよ、やだよおお、来ないでよおー」

霧風の切っ先を相手に向ける。嗚咽とはさみの音だけが室内に響く。女は急に勢いをつけてはさみを振りかざしてきた。

「ぎゃああああああああああああっ！」

喉を痛めるのではないかと思うほど絶叫し、みさきは横によけた。志織も反対側へと飛んだ。女のはさみの切っ先はそのまま二人のすぐ後ろにあったポートレートに向かった。しかし、はさみはいくら女が突き立てても刺さらない。霧のようにすり抜けていくだけだった。

「死ね、死ね、死ね」

女の声は生々しかった。けして触れることのできないポートレートに向かって刃を振りつづける。

「い、祝さん……」

志織がみさきを見ると、みさきはがたがたと震えていた。

「ああああん、人型にあんまり切り込みたくないよう……」

志織としては、前回の車輪につっこむほうがよほど勇気のいることだと思うのだが、へたに生々しい人間の姿だとよけいに尻ごみするらしい。あきらかに腰が引けていて、あるべき位置よりも二歩分は下半身が後方に下がっていた。

「でも、いま行かないと」

女の動きがぴたりと止まった。ゆっくりと彼女は首を動かし、志織と目が合う。明らかに目が据わっている。志織が後ずさりしようとしても、そこは角。逃げ場がなかった

(私もあっちに行けばよかった……！)

しゃきん。鼻と頬がちくりとする。細かく切られた自分の前髪が気持ち悪かったが、それに構っている余裕はなかった。

しゃきん。女が迫ってくる。女がはさみをもう一度閉じようとしたそのとき、彼女の身は真一文字に裂けた。

女は悲鳴をあげることもなく消えてしまった。代わりに、志織の視界に現れたのは、息の荒いみさきと霧風だった。

「わ、渡辺さあん、怪我ない？」

言いながら志織の無事を確かめる手が震えていた。志織は安心してほっと肩の力が抜けた。

その瞬間。

しゃきん。消えたはずの音に、二人は固まる。

しゃきん、しゃきん。女が姿を現した、奥の写真が揺れる。みさきはすぐに駆け寄って、荷物から細い杭を取りだした。それを写真の女の両目に突き刺す。

音は止まった。追いついた志織には何がなんだかわからなかった。

「とりあえず、大きなのは片付いたよ」

みさきは力なく笑って、崩れるようにその場に座り込んだ。

「え、大丈夫？」

「また腰抜けちゃったあ……」

志織は苦笑いして、みさきに手を差し出した。

しばらくして落ちついたみさきは、階下の駐車場で待機していた立野と飯倉を呼びに行った。そこには横川もいつの間にか加わっていて驚いたが、どうやらみさきの様子を見にきてくれたらしい。男三人を招き入れて、みさきと志織はまず彼らを窓際に誘導する。

「まずはこれですね」

「それは……？」

立野は近づいて目を細める。窓枠に施された、小さな凶形。窓枠を彫り、墨を入れて表面だけ同じ色の塗料でごまかしてある。

「おそらく、これは前に入っていた占いショップの誰かがやったものでしょう。墨を動物の血で溶いた……そんな気がします」

げ、と顔を潜めたのは飯倉だった。

「これも改装したんですか？」

「ああ、窓枠は確かにそのままということになってますね」

「本当に目立たないので、みんな気づかなかったんでしょう。これが、他の窓にも、合計で四カ所ありました」

「これはなんですか？」

問われたみさきは言いにくそうに眉間にしわを寄せた。

「霊を呼び寄せて閉じこめるためのものです」

男たちは絶句した。

「推測なんですけれど、腹いせだったんじゃないかなって。この凶形は外から内にどんどん取り込むもので、排出するものがないんですね。だから、ここが霊のたまり場になったんじゃないかって思います」

横川が、それこそ呪詛になりそうな言葉を吐く。立野もさすがにそんな上司を咎める気にもならなかった。

「でも、聞きかじった知識だと思いますよ。ああいう占い師さんが必ずしも呪いに精通しているとは限りませんし。これもずさんで、特にそれほど強い力も感じさせないから、弱い霊しか呼べないし」

「じゃあ、なんであんなに騒ぎになったの」

飯倉の言葉に、みさきは口を開くのをためらった。沈黙が続けば続くほど、彼は苛立ちを募らせていった。

「言えよ、別に怒らないから」

「本当ですか？」

「本当だって」

逡巡ののち、みさきは意を決した。

「ポートレートです」

飯倉は不意打ちをくらったように、目を丸くした。志織は、四枚のポートレートを見比べる。「あの、なんというか、モデルさんたちは気が強くなかったですか？」

飯倉は目をそらして頭を掻く。志織はそれを肯定と受け取った。

「気が強いというか我が強いというか……特に、あの人」

みさきは一番奥に位置する、あの茶髪の女性の写真を指した。

「相当腹立たしい出来事があったと思うんです。こちらの写真の人に」

今度指したのは、入り口の正面にある女性の写真。そこで志織は気づいて、ぞくりとした。

「祝さん、視線が……」

みさきはこくりと頷いた。それぞれを単独で見ただけではわからなかったが、斜めに視線を逸らした構図になっている奥の女性は、そのまま真っすぐに正面の女性を見つめる形になっている。その目つきが鋭く、まるで射るようだ。

「あの、飯倉さんには言いづらいのですが、あまり人間の写真って飾らないほうがいいんです。特に目には何か宿ったり、通り道になったりしますから」

「は？ そうなの？」

「はい。こちらとしては、なるべくトラブル避けたいなら置いてほしくないものではありません」

みさきがいままで依頼を受けたなかにも、店や個人宅に人間を大きく写したポスターを貼ってあったがために、不要な心霊現象を引き起こした例は少なくないという。それを聞いた飯倉は長く息を吐いて天井を見つめた。

彼が言うには、正面の写真とはあるコンテストで自己最高の評価を得たものだという。その前の年のものが奥の写真だ。それまではその茶髪の女性の方にモデルを頼んでいたがどうも相性が合わず、思い切って新しいモデルに乗り換えた。そして、めでたく受賞に至ったわけだった。

「そうしたら、あっちの子が怒り狂って。それで新しい子は新しい子で挑発するようなこと言うし。もう、散々だったよ。前の子だって素材は良かったんだけどね。だからここでも飾ってるわけで」

「そうとうカチンときたんでしょうね……」

みさきに比べたら劣る志織の霊視でも、あの燃えるような怒りはなかなかお目にかかったことはなかった。

「それで、なんというか、写真にモデルさんの生き霊が憑いてしまったんだと思います。それで元々霊が溜まる部屋に来てしまったわけで、お互いが悪い方向に作用しちゃったんですね。写真の目で霊の通る道が広がってしまったのもあるんじゃないかと」

茶髪の女性の生き霊はただでさえ恨みを抱えていたのに加え、霊たちが詰め込まれたこの場所の影響を受けて力を増した。そこに写真の位置関係もあって、正面の女性への憎しみが高まって悪霊となってしまった。

他の霊たちは逃げられない。女は怒りにまかせてはさみを振るい、周囲の魂を切り刻む。しかし、部屋は際限なく霊を呼ぶ仕掛けが施されており、周囲の霊が次々に吸い込まれてはバラバラにされる。その残骸を女が吸収し、また力を増す。そうして悪循環となってしまっていた。それが、みさきの出した結論だった。

「申し訳ないんですけど、写真は二つとも、できれば全部外したほうがいいと思います。一応、目は先につぶしてしまいましたけれど、取っ払って燃やしてしまうのがよいでしょう。窓のものに関しては私がもう消しますので」

みさきは、志織の高校の近くにあった碑のときも使った液体を取り出した。それを、四力所の印にかけ、真新しい布を押しつける。そして、息を吹きかけ、祝詞をあげながら霧風に似た木の彫刻で叩く。

そして窓を開けると、夜風が室内に入ってきた。その瞬間、志織は呆然とした。一気に空気が清浄化していく。息苦しさが無い。

振り返ると、あれだけいた霊がどれもいなくなっていた。まだ若干影響は残っているものの、最初にきたときと比べたら格段に状況は改善していた。

「これで、あとは写真を外すだけですな」

「それだけで大丈夫？」

あまりに地味な作業に、飯倉は拍子抜けしたようだった。志織でも、霧風を使うときだけは派手だと思ふし、霊が見えずにこの変化も感じられない彼にはなおさら奇怪に見えるだろう。

「保証はします。それに、また似たようなことが起これば、すぐに飛んできますから」

「うん、これでひとまずいいかな」

黙って話を聞いていた横川が伸びをして、歩きはじめた。立野がそれに続く。まだ腑に落ちない様子の飯倉と志織が同時に動くが、飯倉はふと立ち止まって志織の髪に触れた。

「わっ！」

「なんか、変な髪になっちゃったね。明日か明後日だったら切ってあげるけど」

飯倉は、志織の髪をつまむ。さきほど切られてしまった部分だ。志織はあわてて固辞した。

「いえ、自分で切れるんで！ そんなに気にしないんで」

「気にしろよ。そっちの何さんだっけ？ 知り合いのところ使わせてもらえるから、明日また来てよ。一応トラブル片づけてもらったし、お礼くらいはするよ」

「え、いいんですか？ だったら渡辺さん、また今日と同じ時間でどう？」

みさきは目を輝かせた。志織はというと、今回も自分はただの付き添いでしかなかったのに、そういうお礼に便乗していいのかわからずにいた。しかし、みさきと飯倉が勝手に話を進め、志織も翌日の予定は特になかったのものでそのまま了承する形になってしまった。

横川から謝礼をもらって事務所をあとにし、二人は駅に向かった。並んで歩きながら、志織は口を開く。

「祝さんに会って、霊能者は地道な仕事なんだなって思ったよ」

みさきはきょとんとする。

「テレビとか見てると、なんか派手じゃん」

志織がそう付け加えると、みさきは意を解して笑った。

「ああ、大手はね。うちは小規模でやってるし、そもそも元々は邪道の家だからあまり表だって

派手なこともしないでいっているんだ」

祝家の初代は由緒正しい家系の出で、さる有名な団体で修行を詰んでいたという。しかし、独自の除霊法を見出し、所属先に無断であちこち除霊して回っていたがために破門されてしまったとのことだ。

「だから、きちんと王道の勉強した人からすると、いろいろ変みたい。私は、おじいちゃんから教わったのをそのまま引き継いでるだけなんだけどね」

「へえ」

みさきは小さいころから素質をもち、一族待望の次世代霊能者だったこともあって、修行として祖父についてまわっていた。それで横川とも子どものころからの顔見知りだった。

「横川さんはもともとお祖父ちゃんのお客さんで、私が跡を継いでもそのまま残ってくれた人なの。伯父さんはその前に亡くなっちゃったし。それで、そのとき私はまだ中学生で、やっぱり『もうあの子には無理だろ』って思って離れていっちゃったお客さんって結構いるのね。だから、我が家にとっては恩人みたいな人で」

祖父が生きていたときと同様、横川は祝家に相談事を持ちこんでくる。それだけでみさきはありがたかった。現在は比較的小さい案件のみで、修行の場を提供してくれている形だ。いずれみさきが一人前になったら、もっと大きな仕事もまわしてくれる予定らしい。

「だから、少なくともあの人の前では、お祖父ちゃんほどじゃなくてもしつかりした人でいたいんだよね」

実際はこんなんだけど、と小さな声で付け足す。理想と現実のギャップは大きかった。

志織は素朴な疑問をぶつけた。

「たとえば、高校卒業するじゃない？ そうしたら霊能者一本で稼いでくの？」

まだわからない、とみさきは首を振った。

「とりあえず大学生になって様子見かな。いまよりは確実に時間の余裕はできるし。その代わり、忙しい学科には絶対に行けないけど」

ふとみさきは目を見開いた。

「そうだ、渡辺さん！ 大学か専門には行く？ そのまま就職しちゃう？」

「え？」

志織は困惑した。ちょうどいまそれで悩んでいる真っ最中だ。

「まだなんとも……。親は大学に行けって言うけど、何も決まってない」

「受験勉強で忙しくなったりは？」

「未定……」

「じゃあ、また付き合ってくれない？」

志織は立ち止まった。気づかずに何歩か先に進んだみさきがふと振り返って、慌てて戻ってくる。

「え、どうした？ もしかして、いや？」

「あ、ううん」

志織は、いまの自分の気持ちをどう伝えればいいのかわからなかった。幽霊と関わっても面倒

だと思ってはいたが、みさきの存在はむしろ心強い。しかし、みさきはきちんと霊能者として修行して仕事も受けていて、現在の彼女は情けないことこのうえないが、それでもいつかは一人前になるのだろう。

対して、自分はただ見えるだけの素人だ。ひとりで幽霊に立ち向かっても何もできない。みさきが行動しない限り、事態は解決しない。それなのに一緒にいたら、いつか足手まといになるのではないか。

みさきは、自分が何か悪いことをしてしまったのではないかと不安そうに志織を見る。志織はおずおずと口を開いた。

「そうしたら、また今回みたいに、私はぼんやり突っ立ってるだけにならない？」

「どこが！」

みさきは目をまんまるにした。

「ぼんやりなんてとんでもない！ 渡辺さんいなかったら、むしろ私、腰抜かして終わってたよ！」

みさきは志織の手をがっしりと掴む。見かけにはよらず、彼女の手は志織のそれよりも大きく、ごつごつとしている。

「私からしたら、渡辺さんってすごくありがたい存在だよ！ 今日だって、お兄ちゃんについてきてもらったとしても、きっとあの女の人避けるどころか思いきり切られるだけだったと思うし！ ただ付き添うだけじゃダメなの。せめて自衛くらいできてないと」

みさき曰く、防具になるようなものを持っていたとしても、幽霊なんてかけらも見えない彼女の兄は使いどころもわからないらしい。それで幽霊に正面から衝突し、しばらく後遺症に苦しんだほどだった。

「本当さ、私はまだこんなのだから、引っ張ってくれたり声かけてくれたりする人の存在って嬉しいんだ。しかも、渡辺さんは幽霊自体が怖いわけじゃないでしょ？」

「う、うん……」

確かに、悪霊の類の霊は恐ろしいが、それは犯罪者に遭遇したときの感情と似ているだけだった。無害な霊だったらあまり恐ろしいとは思えない。それがよいのだとみさきは力説した。志織はまだ、その感覚がいまひとつ理解できなかった。

みさきの現場に二回立ち会って、自分が抱いていた霊能者のイメージの問題かもしれないと思った。ドラマや小説に登場する霊能者は、力があって悪霊に立ち向かい、あざやかに事件を解決してみせる。なまじ自分に除霊する力はないせいか、そういう能力を持っている人間はどれも同じように怯まず恐れず華麗に悪霊退治をしてみせるという先入観があった。

それゆえに、みさきが余計に頼りなく見えた。いや、もしかしたら実際に霊能者とは頼りないのかもしれないが。みさきは、霧風など多少特殊なものを持っているが、基本的には普通の女の子だった。友人として話していれば楽しいとすら志織は感じていた。

「そうだ、これ」

みさきは封筒を取り出した。雑貨店に置いてありそうな、かわいらしいデザインだ。

「これは？」

「今回のお礼。助手って名目で引っ張り出しちゃったからさ」

同い年の、一応友人という関係の女の子から金銭をもらう。志織はその行為に躊躇した。

「だから金で釣るような真似は――」

「友達でしょ？ だったら余計に無償のやりとりはよくないよ。そうしたら、私が一方的に負担かけてるだけじゃん」

確かにつきそいとやらを依頼してきたのはみさきだが、最終的にいろいろ計算してついできたのは志織だ。

「あのさ、今度ももしついていったとして、そうしたらまたこうなる？」

みさきは真顔で頷いた。

「ついてきてくれるんだったら、毎回それ相応のお礼はする。今回は遊びじゃなくて、仕事してくれたわけだし」

あれで仕事といえるかどうか、志織にはわからなかった。肝心な部分ではみさき一人の働きになるからだ。

「とりあえず、もらっておく。じゃあさ、完全にアシスタントって立場でバイトさせてもらえない？」

志織は自分の状況を簡単に説明した。母子家庭であること、アルバイトは母がいい顔をしないこと、生活の足しに少額でも稼ぎたいこと。

「正直言うと、祝さんと出歩いただけなら、バイトに見えないからお母さんにも怪しまれない気がするんだよね。いざとなったら、祝さんと遊んでたって言えばいいから」

改めて言葉にすると、自分がとても打算的な性格でいやになる。恥ずかしくて目を見て言えなかった。それでも、みさきが無言のままにいるから、志織は顔を上げて彼女を見る。みさきの瞳はうるんでいた。

「もう、大歓迎だよ！ それでいい、それでいいよー！ つまり、また一緒にきてくれるってことでしょ？ ありがとう、ありがとうーっ！」

みさきはいきなり抱きつく。志織は戸惑った。

「え、ええっと」

「もうね、これからすっごく、すっごく頼りにしてるっ！ そうだ、もう渡辺さんのこと、しーちゃんって呼んでいい？ 私のことも、みさきでいいから！」

必要以上に感謝するみさきに、志織はこれでよかったのかとしばし困惑した。

五月は気持ちのいい季節だ。寒すぎず暑すぎず、出かけるにはちょうどよい頃合いだろう。ゴールデンウィークという、旅行に最適な連休には感謝したいところだ。

「うえええええ、怖いよおおおお」

それなのに、微妙にさわやかではない場所にいる。

「し、しいちゃん、手握っててね。離さないでね」

「わかった。わかったから、もうちょっと力抜いてよ」

みさきの平均よりもずっと強い握力に、志織の右手は悲鳴をあげていた。

天井からぶら下がった血まみれの男。床に放り出された上半身だけの幼女。水槽に詰まった人の手。棚に陳列されている生首。

「あ、ここ、注意してください」

案内人の男――加藤がそう言いながら通り過ぎると、いきなり首を吊られた女が降ってきた。

「いやああああああああああああああっ！ 死ぬううううううううううううううううっ！」

さすがに驚いた志織の声も、みさきの悲鳴でかき消された。

ここは都内より車で二時間ほど走らせたところにあるテーマパークだ。少し距離はあるが、話題性のあるアトラクションが人気で客入りはいい。志織たちはその敷地内の片隅に位置する建物のなかにいた。

「ずいぶん精巧ですね」

「スタッフが頑張ってくれました。資料の標本もたくさん集めたんですよ」

標本というのが中途半端に生々しかった。

六月から始まる新アトラクションは、この夏最大の目玉となる予定だ。しかし、ここに来て問題が発生し、みさきに依頼がきたわけだ。

「お化け屋敷って幼稚園のとき以来ですよ。ここまで凝ってなかったなー」

「そうですね、ここ十年ちょっとでだいぶ様変わりしましたね」

ホリブルキャッスルは、家屋がいくつか組み合わさった歪な外観をしている。案内役の職員によると、実際に住まいとして使われていた屋敷をいくつか持ってきて移築したとのことだ。つなげるにあたって、わざわざ家を横倒しにしたり傾けたりしているのだから、労力は並大抵のものではない。

「そういうデザインの建物を一から造ったほうが手っ取り早かったんじゃない？」

「ええ、予算のうえでは。けれど、それをしなかったのは私どものこだわりです。なんて言っちゃって、本物の幽霊屋敷を集めたのですから！」

ほとんど城といってもいいくらいに豪勢なメインの屋敷は、わざわざイギリスで持ち主と交渉に交渉を重ねて契約を成立させ、運んできたという。他の屋敷も、持ち主が不幸な死を遂げたり、特定の条件を持った住人だけが呪われたりなど、どれも不可解な事件が起きたという曰く付

きだ。

「あの一、それなら別に幽霊出たっていいんじゃないんでしょうか」

「そこなんですよ」

加藤は眉を八の字にしながら、こめかみのあたりをぼりぼりと人差指で搔く。

幽霊屋敷をドッキングし、ホリブルキャッスルは見事に幽霊の集合住宅地となった。ところが、霊同士の相性が悪すぎて、トラブルが絶えないとのことだ。

「まさかの誤算でした……。実は、私どももあくまでも幽霊というのは話半分だったんですよ」

一般人というのは結局これだ。志織はその無神経さに陰ながら舌打ちをした。

「ちょっとリアリティを追求しすぎたというか。さすがにここまでだと業務に差し支えがあるんじゃないかって一部から言われましてね」

すでに役者を雇い、オープンに向けてテストは重ねている。しかし、聞こえるはずのない声が聞こえたり、開くはずのないドアが開いたり、逆に開くはずの扉が開かなかったりとトラブルが続いた。そのうち、備品が飛んできたり固定していたライトが落ちたりとあからさまに危険な現象が起こり、とうとうスタッフの数人が負傷した。そこでアトラクション公開に「待った」がかけられているのだ。

「霊を説得すればいいんですか？」

「減らしてもらっても構いません。最終的にほんの少し出てもいいかな一くらいで」

それならなおさら、本物の幽霊屋敷など持ってこずに一から造ればよかったのにと思わずにいられない志織であった。

「しいちゃん、しいちゃん」

みさきはぶるぶると震えながら上を指す。少女の人形と並んで霊がいたが、こちらが完全に焦点を合わせる前にさっと逃げてしまった。

「落ちついて。行ったから」

「うん、うん」

みさきは目をつぶっていた。霊はまだ活発化していないらしく、気配は弱い。それでもみさきが人前だというのに遠慮なく怯えている姿を見せけているわけは、単純明快だった。

「血塗れやだよおおおおおお、怖いよおおおおおお」

どうやら彼女は、グロテスクなものも苦手なようだった。そういう霊を見て卒倒した過去があるという。

アトラクション本番のときは夜のように暗くなる予定らしいが、いまはひとまず一通り見て回るといふことで、館内の明かりはすべて最大にしてもらっている。そうすると、セットにとりつけられた小道具もはっきりと見えるようになるわけで、なまじりリアリティを追求した人形たちは確かに不気味である。

「だからってそんなに怖がらなくてもいいじゃん」

「しいちゃん、わかってない、わかってないよ。ゴキブリ嫌いな人はゴキブリの絵だっておぞましく感じるんだよ」

(あーあ、言っちゃった)

小声だが聞こえていないか心配になり、志織は加藤を振り返る。彼はきょとんとした顔で、志織とみさきを見比べていた。

「えっと、霊能者の先生は、そちらの方でよいんですね？」

「はい、私が助手です」

「本当ですか？」

「本当です。いざというときに動けるのはあちらです」

とはいっても、いまのみさきの姿に説得力はなかった。本当に、霊を切りつける瞬間と霊が絡まないときはまともなのに、と志織はどこかもどかしい思いだった。

「さっさと終わらせよ？ 明日までに解決しなかったら、お兄さんたちももう一泊しなきゃいけないんだから」

彼女たちをここまで連れてきたのは、みさきの兄の勝士だった。勝士は現在大学生で、車でここまで二人を連れてきた。とはいっても、目当てはこのテーマパークで、いまは友人と二人で絶叫マシンめぐりをしているところだ。

元々は祝家にきた依頼に応じて、みさきと志織の二人で行く予定だった。そこに運転手として便乗してきたのが、勝士とその幼馴染の秀平だ。彼らの分の宿泊費は出ないが、ちょうど予定が空いていたからと割り込んできた。

「お兄ちゃんが勝手についてきたんだもーん」

「でも、おかげで車出してもらって助かったじゃん。電車より楽だし。ほら、今日頑張らないと、明日ももう一回ここ来るんだよ」

「それはいやあー」

志織は苦笑いしながらみさきを引きずるように歩く。そして、首に下げたネックレスを大事に握った。

志織は、数日前、初めてみさきの自宅を訪れた。祝邸は閑静な住宅地に位置し、広い庭とひっそりとした佇まいの日本家屋がよく調和した家だった。

志織はこういう類の家を訪ねた経験がまったくなく、手土産に持ってきた菓子を持つ手が緊張で震えた。呼び鈴を押してからみさきが出てくるまで、粗相をしたときのシミュレーションを脳内で繰り返してしまった。

みさきの父は平凡な勤め人、母も兼業主婦とのことだ。それに大学生の兄である勝士、そして霊能者として活躍していた亡き祖父の妻である祖母の典子の五人家族として暮らしている。

みさきの案内で広い部屋に通されると、その典子が出迎えてくれた。

「孫がお世話になっているようで、本当にありがたい限りです」

典子は深々と頭を下げ、反射的に志織も同じように会釈した。ただでさえ正座に不慣れなのに、こんなに緊張したのではすぐに足がしびれそうだった。

「みさきは、腕は申し分ないのですが、恥ずかしながら精神が未熟で。もうご存じでしょうが」

横川の依頼のあと、細かい依頼にも志織は同行している。けれども志織は、そこで「ええ、よく知っています」とはとても返せなかった。

「こればかりはどうしようもなく、向いていないと言ってもよいのかもしれませんが。しかし、祝家はもう三百年、拝み屋をやっております。ここで止めてしまったら、ご先祖さんにお詫びのしようもありません」

典子は背中を丸める。

「それを酌んで、みさきはなんとか続けさせようとしてくれる、優しい子なのです。つい私どもが甘やかしてしまっていますが、悪い子ではないのです。どうか、見捨てないでやらないでくださいね」

懇々と述べる典子に、志織はどう返事をしていいのかわからなかった。出会ったころ、廃業すればと軽々しく言ってしまった罪悪感が、いまごろになってじんわりとしみてくる。みさきはすこし恥ずかしそうに、祖母を止める。

「もう、お祖母ちゃん。そう言われるとしいちゃんも困っちゃうでしょ」

「あの、みさきさんは全然、未熟とかではないですよ」

遠慮がちだけれどもはっきりとした声で、志織は口を開いた。

「逆に私が教えてもらうことが多くて。私は退治とかできないから、最終的にはみさきさんにお任せなので、本当にお手伝いというか見学というか」

しかもバイト代までもらっているし、と加えようとして、あわてて口をつぐんで一呼吸。

「だから、大丈夫ですよ。確かにあんまり怖がりなんでびっくりして、いまでも時々素人が口うるさいこと言っちゃいますけど」

大人へも毅然とした態度をとって、あとは本当に怖がりさえ直せば、みさきに自分など必要ないのだ。

「最終的にはきちんと仕事するみさきさんのほうが、私の何倍もしっかりしてます」

そう言うと、典子は嬉しそうに笑った。志織も昔は祖父とともに暮らしていたので、年寄りの喜怒哀楽には弱いところがあった。

それからは雑談が続いたが、ふと思い出したように、典子は別の部屋に引っ込み、拳三つ分ほどの大きさの黒石を持って戻ってきた。それを見て、とぐろを巻いた蛇のようだ、と志織は首のあたりにぞわぞわした空気を感じながら思った。

「お嬢さんにも霊視はできるとのことですから、すこしこれで調べてみまじょうか」

全体の質感は滑らかで、磨かれたような光沢があった。それは、祝家が霊能力の有無を調べるために使っているものだという。

「祝家の人間は、嫁いできた者も含めて、これで稼業に携われるかどうかを判断されます」

「え？」

みさきの顔が引きつる。

「お祖母ちゃん、いまじゃなくていいでしょ？ 別にしいちゃんはそんなことしに今日来たんじゃない」

「いいから」

典子は容赦なく孫娘の言葉をさえぎる。みさきはぐっと言葉をのんでしまった。

そのやりとりを横目に、志織は見慣れぬそれと向かい合ってじっと眺めた。

「あの、これは何の石なんですか」

志織の視線は石から典子に移動した。典子は何の感情の窺わせない顔で、黙って首を傾げた。その仕草はみさきにどこか似ていた。

「私も実を言うと、夫や孫に何度言われてもよくわかりません。志織さんのほうがよほど、わかりになると思います」

石はつやつやとしていて光が反射しているのに、どこか柔らかそうな印象があった。しかし、包み込む優しさという性格は持たない。石の周りに黒い霞が見える。ふと、志織は自分の高校で遭遇した車輪を思い出した。あれに似ていた。

「いかがですか？」

そう尋ねる典子の声は穏やかだったが、どこか厳しさをはらんでいる気がした。

志織はすっかり困ってしまいました。これは正直に答えていいものなのだろうか。実は大切な家宝で、侮辱するような真似は厳禁ではないのか。さまざまな考えで頭がいっぱいになる。もしもここで答えを間違えてしまったら、みさきにも迷惑がかかるのではないかと、志織は脇にいる彼女をちらりと見やる。

みさきは志織の不安を察してくれたのだろう、座布団のうえでやや身を動かして、囁いた。

「しいちゃん、見たままでいいよ」

その声が助け舟となった。気が楽になった志織は典子に向き直す。

「あの、率直に言いますと、あまりいい気はしません。以前、同じようなものをまとったものを見たことがあります、そのときも散々な目に遭いました」

志織が一通り感想を述べると、典子は石の横に置いた古い和紙を広げ、そこに書かれた内容を確認めると、頷いた。

「そうですね、ええ」

口調はのんびりとした様子なのに、その場の空気は張りつめていた。典子は拍子木のようなものを取り出して、石を叩いてみせた。

鼓膜がびりびりと震えた。空気の振動が耳から入って脳へ到達するのを感じる。それは、低くかつ長く響いた。唸り声のようにも聞こえる。地の底から響くような音だった。

「いかがですか？」

「なんか……低い声でずっと唸っているような」

「ねえ、おばあちゃん。しいちゃんは遊びにきただけだよ？ あんまりこういうテストみたいなことはほどほどにしようよ」

みさきが身を乗り出すが、典子は無視した。

「志織さん、それ、持ってみませんか？」

強制力のある声だった。志織が何の考えもなく従って手を伸ばす。黒い霧はすっと逃げていく。意外と軽い。霧風を最初に触ったときと同じような印象を受けた。

しかし、持ったところでどうすればいいのかわからない。志織は困って典子を見る。典子は一分ほど志織の手元をじっと眺めていたが、わずかに声を漏らした。

「ああ、これは何も起こらないのですね」

典子はみさきに向き直る。

「みさき、持ってごらんなさい」

志織はみさきに手渡す。彼女の顔はひきつっていた。みさきの指が黒石に触れた瞬間、いままでただの置物同然だったそれは、急に跳ねた。

「うわっ！」

まるで生き物のような動きを見せ、みさきの手の中かで暴れる。みさきは心底いやそうな顔を

した。

「ここまでくると、本格的に霊能者として修行をつんでもよい段階ですね。靈感がある人の大半は、志織さんと同じく、見えて聞こえるだけです。それでも、靈感があるだけよいのですけれど」

典子は拗ねたように口をふくらませた。

「うちは長男が本当に少しだけ見えて聞こえるだけでした。次男と長女はまったくの一般人で、孫にいたってはみさきだけがその石に触るとこのように反応します。他家から嫁いできた私が言うのもなんですが、残念ですね」

志織は黒石を凝視した。その様子を見て、最初の印象が蛇だったことを思い出した。確かに、蛇のような動きをしている。

「あの、これ中身は何なんですか？」

「一応秘密ということになっています。二代目か三代目がとあるお社で眠っていた神様を捕まえてきて封じたという伝えですが。霧風と同じく、我が家の生業には欠かせない存在ではありませんね」

「おばあちゃん、これ戻すね！」

みさきは大慌てで片づけた。あとで、本当なら絶対に触りたくないものだとこっそり打ち明けられた。もしかしたら、みさきには自分には見えないものまではっきりと見えているのではないかと、志織は思った。

「それにしても、こうして靈感がある人とお近づきになれて、本当にありがたいことです。不甲斐ない家族で恐縮ではありますが、どうか私どもの代わりにこの子のお尻を叩いてやってください」

自分よりもずっと年輩の女性に丁寧な頭を下げられると、志織はなんだか居心地が悪かった。

「ところで、志織さん」

典子が顔を上げると同時にまっすぐ志織を見て声をかけてくるものだから、つい焦ってしまう。自然と背筋が伸びる。典子は、志織の胸元に注目していた。

「なにかお守りをお持ち？」

志織は一瞬制止したあと、襟元からネックレスを取り出した。小さなチャームと、剣に似た大きめのトップがついたものだ。

これは父の形見だった。小学生のときに、大好きだった祖父が亡くなって沈んでいる志織に、父が「特別だ」と与えてくれたものだった。それから一月も経たないうちに、その父も亡くなってしまったが、それ以来持ち歩いている。

「お祖母様は何か見えるのですか？」

典子は苦笑しながら首の動きで否定した。

「何も。一般人ですもの。ただね、良いものと悪いものを見分けはなんとなくつくのよ。女の勘みたいなものかしら。それは良いものね。なんだか心が穏やかになるわ。大事になさったほうがいいでしょう。そういうのはね、きっとあなたを守ってくれるわよ」

「しいちゃん……」

はっと我に返り、志織はみさきを振り返る。彼女の肌はすっかり涙で傷んでいた。

「大丈夫？ しいちゃんもさすがに怖いよね……」

「あ、いや。ちょっと考え事してただけで、怖いとかはまったく」

みさきはほっとしたようながっかりしたような顔をしてみせた。

「私はもう、帰りたい……」

いつも以上に顔色が悪いみさきであった。ちなみに彼女は絶叫マシーンも身体の芯からありったけの力で絶叫するくらいに苦手で、このテーマパークで楽しめるものは半分もない。

強化ガラスを張られた窓の床を進み、板を抜いたドアの枠を越えると、アンティーク調の空間に出た。

「ここがメインですよ。本物のイギリスの幽霊屋敷です」

できれば、残すならこの屋敷に憑いている霊にしてほしい。加藤は小声でそう告げた。

上下左右の回転もなくどしりと中央に構えた屋敷は、日の当たる場所で見ればさぞかし少女たちの夢をくすぐるような風情だったろう。壁も窓も家具もそのままだというのが、どれも比較的状态はよく、ファンタジーか昔の翻訳文学の舞台になりそうな造りだ。

「うわぁ」

さすがのみさきも見とれていた。彼女の自宅は伝統的な日本家屋だが、このような西洋風の邸宅にも憧れはあるのだ。

「なんでこれが幽霊屋敷なんだろう……」

「先生、イギリスでは幽霊屋敷ってとても人気なんですよ」

「えっ？」

濁点がつくのではないかと思うほどの声を出し、みさきは顔を歪ませた。

「幽霊が出るからって家賃が高くなるくらいですから」

みさきは首をぶんぶん振った。

「私、イギリスの人理解できない一。日本人でよかったかも……」

それはここで言っているいい台詞ではない。志織はその一言を飲み込んだ。

ばたばた、と天井から走る音が聞こえてくる。

「きゃあっ！」

みさきは志織に抱きついて離れない。

「えっと、いまのは仕掛けじゃないですよ？」

「ええ、まあ……」

やっかいなのは、幽霊の気配と仕掛けが混ざっていることだ。一通り紹介したいとのことで、現在は役者以外の仕掛けの電源が入っている。先ほどのように人形が降ってくることもあれば、ダンスがいきなり揺れる。笑い声が聞こえたと思えば、物が飛んでくることもある。慎重に探れば、それが幽霊か仕掛けかの区別は志織でもつくけれども、油断するとどちらがどちらなのか判断に迷う。

「みさき、大丈夫？ あれは霊でいいんだよね？」

みさきは、自分は何も聞こえなかったと主張するように耳をふさいでいた。

「仕掛け、切ったほうがいいですかね？」

「えーっと」

みさきを見やると、ここにいること自体もう駄目らしい。志織は頭を下げて、仕掛けの作動停止を依頼した。

「はい、わかりました」

加藤は無線を取り出した。

「すみません、照明と空調以外の電源落としてください」

スピーカーからは雑音しか聞こえない。案内人と志織の二人で耳を澄ませる。

「――あ」

よく聞こえないと音源に耳を自然と近づけてしまう。

「――して――」

「うん？」

いきなりノイズが消えた。

「ここ、ぼくのおうちだよ」

子どもの声だった。

「ぎゃあああああああああっ！」

叫んだのは他の誰でもなく、みさきだった。彼女はジェットコースターなどに乗らなくてもここまで声が出せるところがすごい、と既にみさきの声に慣れてしまった志織は妙に冷静な気分だった。

加藤は固まっていたが、気を取り直して呼びかける。しかし、意味ありげな笑い声を最後に、無線はまったく反応を示さなくなった。加藤は凶面のメモを見つめた。

「あー、このエリアが最も怪奇現象の報告が多いんですよ」

「それって、この屋敷に憑いていた幽霊がいちばん怒ってるってことですかね？」

かもしれない、と加藤は急に弱々しい口調になった。

志織は気配を探ろうとするが、どうもうまくいかない。ざわついていて、ひとつひとつがはっきりとしない。何か奥に隠されているのに掴めないようなもどかしさがあった。

「……どうしましょう……」

加藤は青い顔をして、すがるような視線を志織に送ってくる。

「とりあえず、出口はどこですか？」

「この奥に、途中リタイヤ用の非常口がひとつあります。最後まで行くとしたら、一度向こうの屋敷に行って、階段を上って二階へ向かって、折り返してこの上を通ります。そこから階段を下りたところにある正面玄関がゴールです」

「ここから正面玄関に直接行くことは」

「移築したときにセットで一階を分断してしまいました……」

志織は天井を仰ぎながら悩む。まずは一通り見て回るのだから、自分とみさきはこのまま残る

として、彼にどこまで来てもらうかが考えどころだ。

外はまだ昼間。あまり活発ではない時間帯だというのに、霊たちは志織たちに反応を示している。へたに巻き込んでしまったらやっかいかもしれない。

「加藤さん、機械の仕掛けはあといくつですか？」

加藤は図面を広げる。無駄に長い。自分で歩くには少々距離がありすぎるような気がする。

「こ、コースターとか、そういう機械で運んじゃったほうが回転早くないですか？ 怖がりな人も目をつぶってれば出口まで行けるし……」

冬の屋外に放り出されたかのごとく、みさきの声は震えている。加藤はそんな彼女を尻目にけらけらと笑った。

「まあ、いまとなっては、予算はどっこいどっこいだったかもしれませんがね。その場合、よっぽど案を練らないと子どもだましになりますけど」

「じゅーぶんです！ こういうのは子どもだましでいいんです！ 霊能者の私が言うんだから間違いありません！」

本当か？ 志織と加藤は、疑わしい視線を同時に送ってしまった。それを無視するように、みさきは拳を握って熱弁をふるう。

「だいたい、こういう人形とかだって置いちゃダメですよ。幽霊ホイホイじゃないですか。人形だってそこらうろついてる魂が入っちゃうんですから。しかも、こんなに怖いやつなんて、絶対にいけません。いけませんったら」

みさきが必死にお化け屋敷におけるリアルさの不必要を早口で説くが、志織はあえて耳を傾けなかった。

加藤は図面に赤ペンでどこにどんな仕掛けがあるのかを書きこんでいく。あくまでも役者とセットで驚かせるのがメインなので、仕掛け自体はそんなに多くはない。音声が再生されたり、家具ががたがたと動いたり、それだけだ。これなら頭の片隅に置くだけでよいだろう。

「はい、わかりました。加藤さん、なんならその途中リタイヤ口から先に出てもいいですよ。あとは私たちでどうにか――」

「――しいちゃん、私も出」

「私たちは最後まで行きますから」

志織はみさきの言葉を一段階大きな声で遮った。みさきはそのまま化けて出そうなほどに恨めしい声を出しながら、あまりセットが視界に入らないところまで移動しながら体育座りした。

「あの一。本当に、本当に、本当にあちらが霊能者の先生でいいんですよね？」

「……すみません。あの人は、こういうセットが苦手で」

それ以上どう伝えればいいのか。なまじ付き合いがあっていい格好をしたくなる横川のような客ではないため、みさきはある意味気が抜けているようだった。

「あ、もしかして逆に霊のほうが怖くないタイプですか？」

(もしそうだったらとっくにこの仕事も終わらせてます)

志織は言葉を口にせず、笑顔を彼への返事とした。もうそろそろ、みさきの怖がりになんて思えばいいのかわからなくなってきた。



加藤が脱出する非常口を未練がましく眺めるみさきを引っ張りながら、志織は奥へと進んだ。「もうやだよー。こういうの良くないよ。お化け屋敷なんて自然にできるもので、人間が作っちゃいけない代物だよー」

元々アトラクション用に建てられたものではないので、廊下の幅はあまりない。そこに演出用の人形や家具を置いているから、個人宅としては広いはずなのに狭く思える。場所によっては、霧風が無事振り回せるかどうかも怪しい。

「挟みうちされたらどうしようっかねー」

「うにゃー、怖いこと言わないでよ」

「怖いのは私だよ。盾にしかなれないもん」

そこで霧風を使うとなると自分がどこにどう避難すればいいのか。志織は渡された図面と睨めっこする。

聞いた話では、屋敷についての霊同士の相性が悪いということだが、そもそも霊の気配が想像よりも弱い。作られた小道具や大道具のほうにみさきの注意が集中する程度には、影が薄いのだ。わざわざみさきが出るまでもなく、いっそのくらいだったら本当に幽霊が出るお化け屋敷として売り出しても問題ないのでは、と志織も考えを改めていいかもしれないと思ったほどだった。

ホリブルキャスルの内部は、一本道とはいえ迷路のようだ。簡単に終わらないように、わざわざ回り道を作っている。もしも屋敷内を霊たちが自由に移動できるとしたら、追いつくまでがやっかいだ。できれば、一カ所に集めたい。

このあとのルートと加藤の注意書きを指でなぞりながら溜め息をつく。自分で集めておきながら、いざ面倒が起こると霊能者に丸投げとは。まるでみさきが汚れ役じゃないか。みさきはそれが仕事とはいえ、危険が起こったら彼らの責任はどうなるのか。面白半分には霊を商売道具にする真似が、そもそも志織には信じられなかった。

そういう大人にはなりたくない。まだ将来どころか進路すらも確定していないが、行く先はともかく、生きかたは自分で決められる。目先のことにとらわれて、何かをないがしろにする姿は、大人として正しくない気がした。志織はつい唇をとがらせる。

二人は続きになっている部屋への扉を開ける。乾いた草の匂いがした。他の家に比べると、ここはあまり荒れた印象は受けない。もしかしたら、この屋敷がイギリスにあったころは、本当に人が住み続けて大事にしていたのかもしれない。

そこはベッドルームだった。年代物の壁紙や調度品は洒落ているが、残念ながら死体に似せた血まみれ人形がベッドに横たえられていて雰囲気はだいなしだった。

これまでに通った順路でもう散々似たようなものを見てきたのにも関わらず、みさきは悲鳴をあげる。加藤がいなくなって、余計に声に磨きがかかった。これでも部外者に考慮していたと知り、志織もある意味驚いた。そして、彼女はいつも新鮮な気持ちでいることが、ある意味羨ましく思えた。志織はもう、本番同様の演出ならともかく、何もしてこない人形にそこまで恐ろし

さを見出せなくなっていた。

(しょせん、ただ驚かせるためのものだからなあ)

ふう、と溜め息。一瞬間を置いて、それが自分のものではないことに志織は気づいた。みさきでもない。さっきから喚きっぱなしでそんな声を出す暇もない。

志織は周囲を窺った。姿は見えないけれど何かがある。怒りの感情が強いが、これまで会ったことのあるものと少し違う。

「えーん、しいちゃーん。怖いよおおお」

みさきがしがみついてくる。人形に怯えつつも、彼女も同じ気配を感じているらしい。

どこだろう。四方をぐるりと見渡す。すると、扉がいきなり大きな音を立てた。

「ぎょええええええっ！」

みさきのいまひとつ可愛らしさに欠ける悲鳴にまじるように、怒号が聞こえる。しかし、それは早口のうえ、聞き取れない言葉だった。

打音は壁に移る。ひとつどこか叩かれるたびに、声の主の姿が鮮明になっていく。

彼がこちらを向く。明るい青の瞳が、志織たちの姿を捉えた。

「で、で、出たあああああああああ！」

みさきが、他の人間だったら間違いなく声が枯れているに違いないほどの声で叫んだ。彼は、それにびっくりして、後ろに下がる。どこか人間くさい。

「あ、あの……」

志織はつい声をかけてしまった。男の霊は志織を見ると口を開いた。が、何を言ってるのかわからない。興奮しているのだけは理解できる。

「ねえ、みさき」

志織は素朴な疑問をぶつけた。

「私、いままで日本の霊しか見たことないんだけどさ、外国の霊って言葉通じるの？」

いつも通り取り乱していたみさきも静止する。そして、ふるふると首を横に振った。

「どうだかわからない。うち、基本的に地域密着型で、こういうグローバルなのと縁がなかったから」

素朴な疑問に出会い、すっかりみさきは恐怖が抜けてしまった。恐る恐る、彼に話しかける。

「は、はろー？」

みさきが必死で笑顔を作りながら話しかける。その笑顔はかなりひきつっていて、大根役者のようだった。

「はーわーゆー？ あいむ、ふぁいん」

彼女にしてはありえないほど積極的だ。しかし、英語そのものは壊滅的だった。彼は顔をしかめたあと、ペラペラとまくし立てた。

「ちょ、ストップ！ ストープ！ 全然わかりません！ あい、きゃんと、すぴーくいんぐりっしゅ」

彼はますます苛立っているようだった。その感情だけは、二人の霊能力を通して伝わってくる。空気がぴりぴりとし、触れてなくても家具ががたがたと揺れる。

「とりあえず、中途半端な英語使わないほうがいいんじゃない？　へんにそこだけ通じても困るし」

「え、でも……。あの人、霊じゃなくても怖い～」

みさきが怯えて後ろに隠れてしまったので、志織はしかたなく前が出る。

「すみません、私たちは、その、霊能者？　はい、霊能者です。あなたの話を聞きに、ここまで来ました」

ゆっくり、心をこめて喋る。言葉が通じなくても、魂がむき出しの状態であれば、感情は肉体を持っていたときよりも通じやすい。彼は志織とみさきの顔を何度か見比べ、その場にあぐらをかいた。

彼は、このイギリスから移築した屋敷の主であった。生前は貴族だったらしい。家に思い入れがあり、死後もここで暮らしていた。しかし、持ち主となった子孫が不況のあおりを受けて金に困り、そこに好条件で加藤の会社が話を持ちかけ、売却となった。

志織はそんな話をぼんやりと輪郭だけ理解した。みさきは、彼の記憶や来歴も見ることができるので、通訳のような役割をした。志織も修行を詰めば読みとることくらいはもっとできるらしいが、いまはまだ話に耳を傾けるだけで精いっぱいだった。

せっかく平穏に、文字通り第二の人生を満喫していた彼だったが、いきなり見知らぬ土地に放り込まれたあげく、自慢の邸宅はわけのわからない形にリフォームされ、しかも奇妙な連中との同居を強いられた。彼の貴族としての誇りはすっかり傷だらけにされてしまった。その悲しみが直接ぶつけられるものだから、みさきに比べたら感情的ではない志織も、なんだか気の毒に思えてしかたなかった。

もとはといえば元凶は加藤たちなのに、問題が起きたから退治する。この貴族の霊も本来なら消される必要などまったくなかったはずだ。同情心がわいてくるのも不思議ではない。

その気持ちを感じとったのか、貴族は志織のほうに振り向いて、嬉しそうに手をとろうとする。しかし、それは簡単にすり抜けてしまった。霊に触れるかどうかは、お互いの能力や相性によるのだという。それでも、志織やみさきが共感してくれたのが嬉しかったのだろうということだけはよくわかった。

彼の身の上話を聞いていると、いきなり屋敷全体が揺れた。みさきが挙動不審になる。男は舌打ちをする。

「え、なに？」

地震のようだった。床は横に揺れる。赤ん坊がはしゃぐような声が右から左、前方から上へと移動する。

「きゃああああ！」

みさきは這いながら、テーブルの下を目指した。最初に志織と会ったときにかぶっていた私物のヘルメットを忘れたのは、彼女にとって痛恨のミスだった。もちろん、幽霊に対しては特に効果はないのだが。

男は乱暴に立ち上がって、強い語気でわめきながら壁をすりぬけてしまった。同時に、振動は止まった。志織は膝と手をついて、みさきのところまで移動した。みさきは霧風を抱きしめてぷ

るぷると震えている。

「みさき、出る？」

その言葉に、みさきは一瞬拒否しかけた。けれども、ここにいつまでも留まっていたとしてもしかたないことは彼女も理解しており、いやいや頷いたのであった。

順路のとおり、部屋に入ったときとは別の扉から廊下に出る。男はきよろきよろと周囲を見渡ししながら、英語でひたすら怒鳴っていた。そして――

「あ、危ない！」

男をめがけて、いきなり陶器が飛んできた。男の身体をすりぬけ、ガラスは床に落ちて飛び散る。その破片を眺めて、男はますます顔を赤くした。

「トラブルってやっぱりあの人が原因……？」

こそりと志織が問いかけると、みさきはそれを否定した。

「ううん。むしろ他に原因がある」

奥から二人の方まで、風がふわりと吹く。みさきは大げさに溜め息をつく。

「たぶんね、むしろあの人が邪魔なんだと思うよ。他にタチのわるいのがいて、それが指図してるみたい……。もう、ここごちゃごちゃしすぎだよ。家も霊も混ざりすぎて、わけわかんないことになってるう」

みさきが頭を抱えながらうなっている、ふと二人の周囲が暗くなった。

照明はちゃんとしているはずなのに――

見上げると、布のかたまりのようなものが天井にはりついていた。

「で、で、出たあああああ！」

それは暗幕を身にまとった女だった。いきなり飛び下りてきて、床にはりつく。その際、天井に飾られていたバラバラ死体も一緒に落ちてきて、みさきの叫び声に拍車がかかった。

びたり、びたりと女はみさきに焦点を合わせながら迫ってくる。みさきはしゃくりあげながら、蹴るふりで威嚇する。

「来ないで来ないでっ」

「ちょっと、みさき。こういうときの霧風でしょ」

みさきは右手の中身に気づき、志織に頷いて振り上げた――が、その先が何かに引っ掛かり、落下してきた。上半身しかない少女の人形だった。ちぎれたワンピースから内臓がちらりと覗いているデザインだ。

「うげあああああああああああ！」

みさきは半狂乱になって霧風をめちゃくちゃに振る。しかし、床に這った標的には届かない。

「み、みさき落ちついて……」

みさきに触れようにも、へたすると志織に霧風が当たりそうだった。

女は確実に二人との距離を縮めてくる。無表情の白い顔に貼りついた深い色の髪に、背筋が寒くなる。彼女が近づければ近づくほど、重力が増した。

胃のあたりが圧迫される。志織は生唾を飲み込んだ。

「みさ――」

その瞬間、暗幕ごと女がふわりと浮き上がって後ろに飛んだ。みさきも何が起きたのかわからず静止した。

先ほどの男が何かを叫んで、剣を女にかざす。女は恨めしい目で男を見つめながら、床に沈んで消えた。

「しいちゃん！　だ、大丈夫？」

我に返ったみさきが肩をつかんでくる。

「それはこっちが言いたいよ……」

みさきは男に近寄る。

「あ、あの、ありがとうございました」

男は溜め息をつき、べらべらと喋る。きょとんとしたみさきだったが、意を解したようで、表情が変わった。

「しいちゃん。ちょっと作戦タイム」

三人は、先ほどのベッドルームに戻った。みさきはポケットからお札を取り出し、四方に貼った。これで即興の結界になるのだ。

「さっきの人がどうやらリーダーみたいだね」

男はともかく、他の霊がくる心配がなくなると、急にみさきは冷静になる。その落差に男が驚き、その戸惑いが志織にも伝わってくる。

「多分、もとはこっちの家にはいた人だと思う」

みさきは地図を広げ、一角を指す。四国から引っ張ってきたという、女性住人の事故が絶えない洋館だ。

「連れてこられた霊にも格があるの。ぶつかりあって、勝者が敗者を使役して。あの人は、そうしてこの城を完全に自分の支配下におきたいみたい。それで、この人だけがなかなか従わないから苛立ってる」

「あの短時間で、そこまでわかるの？」

「うん」

あれだけ興奮しておきながら情報はしっかりつかんでいるという感覚が、志織には不思議だった。もちろんみさきは下調べも行うが、霊に接しなければわからないことも多いという。本当に、極度の怖がりさえなければ彼女は優秀のような気がする。

「支配下においてどうするの？」

「とにかく敵意だけが頭に残っていて、理由はないみたい。もう、自分がどうして人を攻撃するのも忘れてる。」

志織は女性の霊の顔を思い出す。表情はないのに、目だけはやけに恨みがこもっていて空気が重かった。

「あとの霊は面白がっているのと、逆に怖がっているのとかで小物だね。もう一人強そうなものいるけど、女の人ほどじゃないよ。さっきいきなり物を飛ばしてきたのは完全に愉快犯。とにかく、あの女の人を消せば、問題の大部分はクリアできると思う」

できれば、全員お引き取り願いたいけれど。みさきがそう呟くと、男は悲しそうな顔をした。それに気づいてみさきも慌てる。

「もしも、このまま開業したらさ、どうなってたかな？」

「一週間で何件事故るかなんて考えたくもないよ。注目されてるからお客さんも多いでしょ？」

「放っておいたら、事故って死んだら確実に取り込まれるよ……」

みさきがうなだれる。男は彼女の頭をぽんぽんと叩く。みさきは彼を見上げて、小さく微笑んで礼を言った。志織はそのときになって、ようやく疑問がわいた。

「そういえば、名前はなんて言うんですか？」

男は時間差で問いの内容を理解し、返事をした。

「え？ ウィリアム……何？」

復唱してくれたが、二人は聞き取れなかった。

「私、リスニング弱いんだ……」

今年は受験だ。英語への危機感が募り、志織は頭を抱えた。みさきは、いつもの恐怖はどこに行ったのやら、自ら進んで彼に話しかけた。

「とりあえず、ウィリアムさんでいいのかな？ ミスター・ウィリアム？ おーけー？ おーらい？」

怪訝そうな顔をしたが、ひとまずウィリアムは頷いた。みさきはしばらく指で顎を弾きながら思考をめぐらし、ぽんと手を叩く。

「そうだ！ この人にリーダーになってもらおう！」

「え？」

志織の驚きをよそに、みさきは勢いよく立ち上がった。

「言ったでしょ？ 他の霊は基本的に、あの人と力関係で負けているから従っているだけだ。ウィリアムさんに代わってもらったら、開業しても問題が起きにくいと思う！」

私は絶対来ないけど！ みさきは朗らかにそう付け加える。

みさきは、ウィリアムにわかるように説明する。通じたかどうか志織にはよくわからなかったが、ひとまずウィリアムはにこりと笑って頷いた。そして、勢いよく立ち上がる。

「よし、じゃあ行きますか！」

志織も同じく立ち上がると、みさきは笑顔で座ったままだった。

「みさき？」

「しいちゃん、私、ここにいてもいい？」

霊の通りぬけができないようになっているこの部屋は、彼女にとってとても居心地がいいようだ。

「ダメ。だいたい、霊が通れないんだったら、ウィリアムさんも出られないじゃん」

志織はみさきの手をひっぱるが、普段から腕力はみさきのほうが強く、さらにてこでも動かないというみさきの意思が加わると、本当に持ち上がらない。

「一度解除して、二人が出て行ったあと、また結界張り直すから。なんならウィリアムさんだけ行って、しいちゃんもここにいていいから」

そんな意見を、志織は認めるわけにはいかなかった。

「ウィリアムさんだけでどうにかなるんだったら、とっくにどうにかなってるでしょ？ みさきがお手伝いしないでどうするの」

「うえーん、やだようー。私、ここにいたいよー」

安全な場所限定で出てくるみさきの凛々しさが恋しくなる。やだやだと駄々をこねるみさきの身体が、突然ふわりと浮かんだ。

「ぎょええええええっ」

ウィリアムがみさきの身体を抱え上げ、ゆっくりと立たせた。彼は志織に触れることはできなかったのに、みさきは触れるようだった。それは相性なのか、霊能者としての実力の差のせいかは判別がつかなかったが。

「な、なんですか？」

みさきはとっさに霧風を構えるが、この場合しゃれにならない。

ウィリアムは二言三言何を話したのちにみさきの手を引いた。

「え、え、ちょっと？」

ウィリアムは大きな声で笑う。どうやらみさきがついてくるものだと思っているらしい。

「……じゃあ、行こっか」

志織も彼に合わせてみさきの反対側の手を握る。両側を交互に見たみさきは、観念したように息を吐いた。

「じゃあ、ウィリアムさん先頭で。次は……私が行きます。しいちゃんは最後」

みさきは貼っておいたお札を一枚はがした。そして、ウィリアムを追い出すように急かし、ドアを開ける。

「ぎゃああ！」

みさきは廊下に出たとたん、悲鳴をあげた。なにかと思えば、先ほど落ちてきた人形だ。バラバラ死体と上半身しかない少女の死体は、ある意味芸術的だった。

「もうやだあ……」

「みさきが暴れて落としたんじゃん」

そういえばセットを壊してしまったことになるが、加藤は許してくれるだろうか。妙なところが気になってしまう志織だった。仕事の契約について志織はまったくのノータッチだが、こういう場合の補償はどうなるかが気になってしまう。

ウィリアム、みさきと続き、志織が最後尾だ。みさきを挟んだ方が彼女の精神上もいいし、後方で何かが現れてもペースが乱れない。しかし、そもそも志織は 霊への対抗手段を持たない。みさき家で対魔法を習ってみても、この短期間では何も効果があがらなかった。そんな状態なのに最後尾を任されるのも、それはそれで気が重い。

（お父さん……）

みさき家で典子に言及されてから、父の形見のネックレスに頼るような思いを抱くことが多くなった。こうしたところで効果があるのかどうかはわからなかったが、やらないよりはマシだという気がした。なんとなく勇気づけられるような気がするのだ。

三人は離れないようにしながら進む。そこにいきなり飛んできたのは、生首のマネキンだった。

「いやあああああああああああ！」

みさきは野球選手がバットを振るように、それを弾き返した。生首は壁に当たって床を跳ね、何度かその場でバウンドして止まった。

けらけらと笑い声が聞こえる。志織は周囲を睨みつけるが、気配だけが蝶のようにひらひらと移動するのを感じるだけだった。

みさきは肩で息をしながらも、どうにか平常心へ持っていった。ウィリアムが心配そうに見つめてきたので、ひきつった笑顔で頷いてやった。

順路通り、ウィリアムの城を抜けて、別の家屋へと進む。つなぎ目を越えた先にある大きな客

間で、いきなりみさきが立ち止まった。

「来る！」

じわりと壁がにじむ。志織が凝視していると、さきほどの女が姿を現した。

「ひいっ」

みさきが別のほうを見て震えるので視線を移すと、そこにも誰かがいた。形が定まっていないが背の高い男だということはわかる。

「み、みさき……どうする？」

「しいちゃんは下がって。え、えっと……ウィリアムさん！　まずは男の人お願いします！」

みさきの指示は、ウィリアムにはよく伝わらなかった。首を傾げたものだから、みさきは男を指して、大声で何度も叫ぶ。

ウィリアムは男に剣の切っ先を向けた。思えば、霊同士が争う場面を志織は初めて目撃した。ウィリアムの刃が男の腕を捉えて裂く。男は叫び声こそあげなかったが、姿勢は崩れた。そこにウィリアムが切り込んでいく。みさきに慣れたせいか、志織の目には彼はずいぶん勇敢に見えた。

「ふええええええ」

対照的に、みさきはおなじみの情けない声を発した。それでもけして逃げずに、志織をかばうように立つ。

女はあいかわらず感情を見せない顔で、ゆっくりと迫ってくる。空気が粘度をおび、志織は呼吸することもいやになってくる。無意識にネックレスを握った手に汗をかいていた。

ウィリアムは男に何度も切りかかっていく。男は刃を受け、その身は分断されるがすぐに元に戻る。そこに別の霊もわらわらと彼の周囲に群がって、ウィリアムは苛立ちながらそれをなぎはらう。

二人を助けたい。志織は志織で、自分がもどかしかった。いつもこうだ。ここまでくるとじっと守られるだけだった。志織には度胸と霊視能力以外の何もなく、いざ霊と対峙するときは完全にお荷物だった。それが悔しかった。何もできない自分に苛立つ。

女は不気味なほどに静かに、みさきを見つめていた。みさきは怯えながらも牽制する。

(あ)

自分たちの足下へとするすると布が伸びていく。みさきは気づいていない。

志織はとっさに前に出て、それを足で払おうとした。しかし、寸でのところで動けなかった。足下を見ると、何人もの子どもの霊が志織の足に絡みついていた。

「は、離して……離してよ！」

腕や脚で追い払おうとしてもそれにも勝る力だった。そうこうしているうちに、女の布がすぐそこまで来て、志織の靴を上ってくる。

「しいちゃん！」

みさきは志織を押さえつける霊たちを霧風で払いのけた。しかし、次の瞬間、女の本体が起きあがってみさきに覆いかぶさろうとした。

「みさきっ！」

みさきの構えが一瞬遅れた。女の手が彼女の頭に触れようとしたそのとき、一条の光がきらめいて、女が弾き飛ばされた。

驚いて脇を見ると、男を下したウィリアムが息を切らして立っていた。彼は女が起きあがったのを確認すると、みさきに合図を送った。みさきは助走をつけて飛び上がり、女を勢いよく切りつけた。

突風が吹いてとっさに腕で顔をかばった志織が手を下すと、女はもういなかった。空気も軽く、光の量も増えたように思えた。

他の霊たちはあわてふためいたが、逃げるように消えていった。しんと静まりかえる。

「ウィ、ウィリアムさん、ありが……」

「しいちゃん、大丈夫？ 怪我はない？」

志織の言葉を遮って、みさきは彼女の肩にしがみつくと、無傷を確認するように、ぺたぺたと志織の身体に触る

「ごめん……」

「え？」

志織は意気消沈してしまった。ウィリアムがいたから救われたものの、みさきが危険にさらされたのは自分が不用意に前に出たからだ。

「みさきの役に立とうと思えば思うほど、逆に足引っ張ってるよ」

みさきが怖がり、自分はそうではない。たったそれだけで、自分にも何かできるのではないかと志織は思ってしまった。結果、むしろ事態をややこしくしてしまったのだから、落ち込んでしまう。自分はいつもそうだ。

「本当に役立たずだ……」

霊が見えていても、いや、見えているからこそ調子に乗って中途半端になっている。みさきよりもずっと自分のほうが情けなく思えた。じわりと涙が出てくる。

「卑下しないで」

みさきはそんな志織の両頬をぺちんと叩く。

「今日だって、いままでだって、しいちゃんがいなくてよかったって、私は一回も思っていないんだからね。これからだって、しいちゃんがいてくれないと困るよう」

みさきは涙ぐんでいた。その姿を見ていると、罪悪感がわいてくる。

「ごめん……」

「役立たずだなんて思わないでね。これからも、ずっとずっとそんなこと思わないでね」

約束。そう言って、みさきは志織の指を握った。志織がおずおずと頷くと、そこに突然、真っ白で大きな手が突然視界に現れた。

「うええ！」

みさきの反応は早かった。横へ飛び退くように立ち上がって、霧風を向ける。

「あ、ウィリアムさん……」

にこにこ笑う彼の姿があった。

「なんだ、びっくりしたあ。驚かさないでくださいよー」

ほっとする仕草をするが、見るからに心拍数が上がっていきそうなみさきであった。それでも、彼に対しては必要以上に騒いだり怯えたりしていない。

みさきと出会ってから初めて、彼女が霊を恐れずに接するところを見た。志織はウィリアムが霊であることも忘れかけていた。自然に笑えるみさきの姿に、志織は嬉しいような寂しいような複雑な心境でいた。みさきの怖がりが消えたら、その分自分の重要性は軽減されるのだから。

「え？」

みさきの声に、志織は意識の焦点を二人に合わせた。ウィリアムがゆっくりと優雅に礼をしている――。

ごろん。そこにあるべきものが消えた。むき出しの切断面がみさきの正面に現れる。みさきは金魚のようにぱくぱくと口を動かした。

固まっていると、ウィリアムの胴体が肩をすくめて、床に転がった頭を元の位置に乗せた。にっこりと微笑む彼の首の傷は、みるみるうちに癒え、元のとおりになった。

「うわあああああああっ！」

みさきはまるでムクの『叫び』のような表情とポーズを取った。そして、白目をむいたかと思うとその場で倒れてしまった。ウィリアムはそんな彼女の様子を見てしょんぼりとしていた。

「あ、あの……」

あまりにも落ち込んでいるので、志織はつい彼に声をかけてしまった。

「この子、こういうの苦手なんです」

志織の言葉を理解したのか、ウィリアムは血相をかえて気絶したみさきに謝罪する動作を何度も行ったが、みさきが目覚めることはなかった。

「最後の最後にすみません。でも、それは相手を選んでやってください」

ウィリアムは悲しそうに頷いた。ちょっとした悪戯であったことはわかっているので、彼には同情する面もある。しかし志織は、自分はまともに見ないでよかったかもしれないと陰でほっとした。

安全なところまで志織に引きずられ、そこで目を覚ましたみさきが、その後いっそう怖がりになったのは言うまでもない。

「はははっ、受けるー」

「笑いごとじゃないよ！」

帰りの車のなか、みさきと彼女の兄の勝士の会話が響く。勝士の友人の秀平は絶叫マシン全制覇したためか、疲れているらしく熟睡していた。

その後、みさきはアトラクション内をかなりごねながらももう一周して、霊たちのほとんどがおとなしくなったことを確認した。ウィリアムには、これからたくさん来るであろう客をすこし驚かせるくらいなら問題ないことを伝えたが、どこかよそよそしくなったみさきの態度に寂しそうな表情を浮かべていた。

「もうね、すごくすごく怖かったんだからあ！ あ、思い出ただけで気持ち悪くなってきた……」

「おいおい、吐くなよ。父さんに叱られるの俺なんだから」

ホテルに泊まった昨夜、みさきは夢でもうなされていた。よほど心の傷になっただけらしい。霊嫌いがますますひどくなりそうだ。

「あ、みさき。そういえば、加藤さんからあのお化け屋敷のタダ券いっぱいもらったよ。また来てくださいねって」

「行かない！」

こういうときのみさきは、他のどんな場面よりも主張が強かった。

「しいちゃん、お友達に分けてあげていいよ！ 私は絶対に、もう二度とここにはこないっ！」

志織と勝士はミラー越しに目が合い、お互い苦笑いになった。今度はみさきがお気に入りのキャラクターがいるテーマパークにでも誘おうかと、窓の外で流れていく新緑の景色を見つめながら志織は思った。

夏になり、あのホリブルキャッスルは盛況で、他の絶叫マシーンに並び人気スポットとして好評を呼んだ。テレビ番組の特集で流れる館内の映像を見るたびに、志織はいまでもまだあそこにいるはずの彼の姿をなんとなく探してしまうのであった。

夏も徐々に終わろうとしている。同じ高校三年生の生徒たちは受験勉強の追い込みにかかる季節だったが、志織とみさきは新幹線の窓から景色を眺めていた。

八月といえば、本来なら時間を惜しんで知識を詰め込む時期だろう。しかし、志織は前月の模試で、志望校に合格圏という結果を出したので、どうにか出かける時間を確保できた。でなければ、さすがに志織の母も許さなかつたろう。

みさきも受験生のはずだが、志織以上に勉強しているそぶりを見せなかつた。けれども、彼女は進学校でそれなりに良い成績を修めていて、よほど高望みしなければどこにでも受かるらしい。その余裕が志織は少し羨ましかった。そんなみさきと、名門大学に通う彼女の兄の勝士に勉強を教わっているのだから、自分だって恵まれているわけだが。

みさきは面倒見がよく、移動時間は問題の出しあいに付き合ってくれた。そうして新幹線で終点まで行き、そこからはローカル線に乗り換える。数十分ほど、安穩としたワンマン列車に揺られて着いた駅からはタクシーだ。バスは時間が合わなかつたうえに、次の便までだいぶ間が空いていた。

目的地に着いたころには、すっかり身体がだるくなっていた。三時間のほとんどを座って過ごしたのだから当たり前だろう。タクシーから降りると、志織は大きく伸びをした。

木々に囲まれた小道の先に、依頼主のいる建物がある。自動ドアが開くと同時に、二人は立ち止まった。まるでセキュリティの厳しい場所に来てしまったかのような、張りつめた空気に満ちていた。ほのかに花のような香りがするけれども、それに心が和むような思いも抱けないほどに。

正面の受付と小さな販売スペースが目に入った。売られている小物たちに興味津々のみさきの手を引き、志織は受付に足を進めた。

「恐れ入ります、祝と申します。青木様はいらっしゃいますか？」

受付の女性に呼ばれて出てきたのは、五十代と思われる女性だった。上等なスーツを身にまとっているが、柔和な雰囲気、近寄りがたさはなかつた。

「青木です。駅まで迎えにいけなくてごめんなさい。遠いところまでありがとうございます」

彼女が今回の依頼人だった。普段は地元で生活しているが、時折用事で東京に出てくる。そのつながりで横川と知り合い、彼女はみさきの存在を知ったのだった。

「ちょっと館長さんが席をはずしているの。まずは、館内を見学なさってください。一回りするのには時間はかかりませんから」

青木は二人を展示の入り口まで連れて行くと、自分は上の喫茶室に言い残して階段を上がってしまった。

展示スペースの通路はまっすぐ奥まで続き、突き当たりのところで右に曲がるようになっている。通路の壁付けのケースには、衣装もデザインも多種多様な人形が飾られていた。

「うわー。かわいいー！」

みさきはフランス人形のコーナーで立ち止まると、ガラスに顔をつけるような勢いで、展示物を眺めた。目がきらきらと輝いている。

「人形は怖いんじゃないの？」

テーマパークでの記憶を呼び起こす。あのとき、人形はよくない人形はよくないと声高に主張していたのは誰だったか。みさきはぎくりとしながらも、笑ってごまかした。

「いや、あれはグロかったしー。私ね、こういう人形って憧れだったんだ」

みさきが幼稚園に通っていたころのことだ。周囲の友人はみな、西洋風の人形を持っていた。みさきも親にねだったが聞き入れてもらえなかった。それを見た祖父がみさきに人形を持ってきてくれた。それは、髪が腰くらいまである日本人形であった。

それは、もともと人形に憑いた霊を供養してほしいと、客が持ち込んだ物だった。中にいたのは小物だったので、すぐに祓うことはできたものの、依頼人はもう見たくもないと言って引き取りを拒否した。しかたないので、祖父はみさきに流したのだ。

「なんかさ、さすがにしょんぼりしちゃったよ。みんなでドレスの着せかえっこがしたくても、一人だけ明らかに系統がちがうから浮いちゃったんだよね。日くつきで不気味でいやだったのもあったけど」

みさきはそこで、自分の家は余所とはちがうことを悟ったらしい。もとは幽霊が憑いていたという人形は、みさき以上に他の子どもたちを怯えさせた。

もう霊はいないとはいえ、みさき自身、その人形を持っていたくはなかった。結局、祖父がまた引き取って、知り合いに譲ったらしい。

「こういう、ひらひらのドレスとか着せたかったんだあ……。でも、特別悪いわけじゃないけど、なんか刺々しさがあるよね、この子たち」

志織は人形のひとつひとつをまじまじと見つめる。微弱な何かを感じるが、へたな干渉ははねつけるような意識が感じられた。みさきが言うには、こういう人形は浮遊霊の魂が入り込みにくいようだった。

「警戒されてるみたいな」

そっとみさきは呟く。それぞれの瞳からは心の壁のようなものを感じる。けれども志織には、まったく何も感じない人形に比べたらやや気後れする程度に思えた。

「みさきは平気？」

「とりあえず血まみれでもなんでもなくて、悪霊も入ってなければ、かわいい人形は多少何かあっても平気だよ。これはちょっと落ちつかないけどね。でも、かわいいよねえ……」

前回があそこまでセットに気合いの入ったお化け屋敷でなかったら、もう少し効率がよかったかもしれない。志織はみさきに隠れて溜め息をついた。

通路は時計回りのスロープになっていた。ぐるりと一周すると、中二階の広いスペースに出る。時期によっては、大量の雛人形や五月人形が飾られるらしい。事前にインターネットで検索した画像を見ると、実に壮観だった。

そこをさらに囲むようにもうひとつスロープがあり、奥にある展示室へと続いている。それとは別に階段がふたつ。一方は受付、そしてもう一方は中二階全体と外の景色を眺められる喫茶室

にそれぞれ続いている。建物自体はこじんまりとしているが、居心地の良さそうな設計だった。

青木は喫茶室の窓際で本を読みながら二人を待っていた。若い職員が喫茶の店員も兼ねており、志織とみさきに菓子と緑茶を運んできてくれた。

「いかがでしたか？」

「素敵ですね。昔、ああいうお人形に憧れていたんです」

彼女は服の趣味も女の子らしいし、こういうものには目がないようだ。

さっそく出された茶をすすりながら、志織は問いかけた。

「ところで、ご依頼のときにお話頂いた人形は、展示されていないんですよね？ 表に出ているものは……」

みさきに確認するように横を向いて視線を送ると、彼女も頷いた。

「はい、あれはさほど……。あのお人形は大事にされていたことはわかりますが」

青木はおだやかに笑った。

「ここは市の施設ではありますが、会館当初より私の母のコレクションを主に展示する場でした。母は人形と旅が大好きでね、いろいろな国に行っては人形を買い求めたの」

青木の母は名前を房江という。貿易会社を経営しており、世界各国を飛び回っていた。ある国でふと気まぐれに子どもたちへの土産に人形を購入して持ち帰ったが、家族の誰より房江自身が気に入ってしまった。それ以来、仕事に行くのか人形を買いに行くのかわからなくなるほど、コレクションが増えてしまった。

「その土地の伝統衣装を着ているのがお気に入りですね。見比べてみると、いろいろ面白いでしょう。母は、このお人形さんを見れば、人々がどこでどのように暮らしているのかがよくわかって言っていたわ」

青木は、手元に置いた人形たちの写真集に視線を落とし、表紙を愛おしそうに撫でた。そこに印刷されたフランス人形は、一地方の伝統的な衣装を着ている。あまり見ない形のレースの髪飾りが華やかだった。

「だから、母の死後、みなさんに楽しんでもらえるように市に寄贈したの。正直、私たち姉弟は、母ほど力を入れて管理できる自信はなかったし」

同じように人形がたくさん置いてあっても、ホリブルキャッスルとはえらい違いだった。管理が行き届いており、どれも化けて出るような類のものではない。

「では、いったい何が……」

青木が言いよんどんでいると、突然彼女の横の椅子が引かれ、大柄な男性がどっしりと腰を下ろした。

「どうもどうも、すみません。私が館長の遠野です」

豪快に笑う姿に、志織もみさきも啞然として返事ができなかった。

「こちらが霊能者の先生がた？ いやあ、東京から遠いところまでありがとうございます」

遠野は職員に緑茶だけ持ってこさせると、一気飲みする勢いであおった。まるで、日本酒か何かを飲んでいるようだった。

「あ、渡辺です。助手です」

「えっと、祝です。本日はご依頼ありがとうございました」

ようやく気を取り戻して、二人で頭を下げる。

「それで、ご依頼のものとは……」

みさきの質問に、遠野はあごをさする。

「ああ、うちは基本的には青木さんのところのコレクションを主軸にしているんです。それで、時々人形作家さんの作品並べたり、他の人から寄贈してもらったものを使ったりしているんですけどね」

拝み屋でもなんでもないので、人形の供養や引き取りは受け付けていない。それでも、勘違いした近隣住人からは、いわゆる呪いの人形が持ち込まれることもある。

「あれは、物はいいんです。でも、うちは別に拝み屋じゃないし、近所の寺にもいちいち持ってくるなって拒否されてしまってるし」

その人形は、夜中に館の入り口に置き去りにされていた。さる姫君が所有していた由緒のある品だが自分の手には負えない、引き取って供養してくれ。そんな内容の手紙が一枚添えられていた。持ち主はわからず、返す宛もない。

「とりあえず状態はいいからと預かることにしました。その直後からです」

誰も触れていないはずの人形が倒れたり、破損が多く見つかった。しかも、壊れた人形の多くは、定位置から離れた場所で発見されるという。

ひとつ引っ込めて修理している間に、またひとつが壊れてしまう。そうこうしているうちに、現在の展示数は、元の七割ほどしかない。

「前から、日くつきのを引き取ると、多少何かあったんですよ。でも、ここまで何かが起こるのは初めてでね。もうね、うちは呪いの人形博物館じゃないって壁いっぱい主張したいくらいですよ」

力なく遠野は笑う。

「それで、その人形は……」

志織が尋ねると、遠野は残っていたわずかな茶をすべて飲み干した

「全部飲み終わったら、行きましょうか」

志織とみさきは急いで残りの菓子を平らげ、茶で流し込んだ。みさきがむせる。

遠野と青木によって案内されたのは、事務室の奥にある応接間だった。その更に奥にあるのが収蔵庫で、出番がくるまで人形たちが眠っている。

みさきも志織も博物館の裏側に入るなどめったにないため、きょろきょろと周囲を見渡してしまう。事務室は、展覧会のポスターが貼ってある以外は学校の職員室のような場所と変わらない。

「ここで待っていてください。いま持ってきますから」

遠野は収蔵庫の鍵を持って、出て行った。

「あの……」

沈黙を切るように、青木がおずおずと口を開いた。

「さきほど仰ってましたよね。表の人形には悪い感じはしないと」

志織とみさきは顔を見合わせて、同時に小さく首肯する。すると、青木は肩の力を抜いて、花が咲いたように笑った。

「よかった」

「お母様はとても大切になさっていたんですね」

みさきの言葉に、青木はかすかに頷く。

「ええ。異国の空気が感じられるとね。母は、その土地で暮らす人々の生活をとても大切にしていたから。本当は、会社をうちの弟に譲ったら引退して、移住する予定だったのよ。でも、その矢先に倒れてしまったの」

青木は母親である房江の思い出話を語り始めた。房江は裕福な商家の一人娘で、婿をとったものの戦争で寡婦となり、財産の多くも失ったけれども一人で子ども四人を育てたという。終戦後に興した貿易会社は、代替わりした現在でも業績がいいらしい。

そんな話をなごやかに聞いていた志織たちだったが、突然空気が張り詰めるのを感じた。一瞬で二人の少女の笑顔が消えたのを見て、青木は戸惑った。

「え？ 私、なにか悪いことでも……」

「はい、失礼しますよー」

遠野が場にふさわしくないほどの明るい声で入ってきた。抱えていた木箱を卓のうえに置く。二人は表情を固くして、それを見つめる。

「これなんですよ」

遠野の声の軽さとは裏腹に、そこに立ちこめる気配は重い。みさきの手が震えた。

ふたを取ると、ガラスケースに収められた日本人形が現れた。傍らの小さな器には、古くなった砂糖菓子が盛られていた。大きな目がかわいらしかったが、それよりも特徴的なのは髪の毛の長さだった。

「……伸びてますねえ」

「ええ。測ってみたら二十センチほどでしたね」

腰をゆうに越えるほど長かった。丁寧に化粧を施されており、身にまとっている着物も、一目で上等な生地を使っているとわかった。

「私が持ってた人形もこんな感じだよ」

ぼそりとみさきが耳打ちする。これを幼稚園女児の集まりに持って行ったら気味悪がられてもしかたない。

建物全体を取り巻く空気は、この人形周辺になるとずっと凝縮されていた。

「触ってみますか？」

遠野はガラスケースも取り除く。その瞬間、生温かい風が内側から外に向かって吹いてきた。むせかえるほどの香りが漂う。花というより、香の匂いと言うべきかもしれない。

冷房が利きすぎているわけでもないのに、鳥肌がたつ。彼が人形の髪に触ると、頬がひりつくような気がした。

「それは、人の髪の毛ですか？」

自分は触れないまま、みさきは尋ねた。

「まあ、時代が時代ですからねえ。江戸初期のものだそうで」

遠野の乾いた笑いが響く。みさきは足をぱたぱたと動かし、さりげなく恐怖を表現する。

「それで、除霊はどうします？」

「あ、どこか広い空間をお借りしたいのですが。できればこの建物ではなく」

みさきは挙手し、展示室の方角を見やる。展示物は固定されているとはいえ、ここで暴れられたら、安全は保障できない。

遠野はしばし考えたあと、市の施設に空きがないか確認してみると、役所に電話をかけに行った。そして数分後、市の施設で小体育館に空きが出ているので押さえたと言いながら戻ってきた。

「よほどのことがない限り壊れたりはしないでしょう」

そのよほどのことが起きないことを、志織は祈るばかりだった。

「もう移動しますか？」

みさきは人形を見つめる。

「……そうですね。まだ何のアクションもないので、できれば夜を待ちたいのですが、運ぶだけならいまでもいいかと思います」

小体育館までは、車で二十分ほどだった。遠野に車を借り、人形を移動させる。

念のため、箱に戻してお札を貼ったが、すぐに風で飛ばされてしまった。何度も直しても同じだった。仕方がないのでそのまま運び出そうとした瞬間、箱はいきなり落ちて、その角は遠野の足を直撃した。靴越しだったので大事には至らなかったが、うっすらと靴下に血がにじんでいた。

みさきの顔が険しくなる。

「わ、私が持ちます」

みさきが止める前に、志織がひったくるように受け取る。重い。まるで大石でも抱いているような重さだった。それでもなんとか意地で車まで運ぶと、遠野がエンジンをかける。しかし、何度鍵をひねっても、エンジンが回らない。

「あれ？」

「遠野さん……」

みさきは青い顔で口を開いた。

「車は使わないほうがいいかもしれません。多分、事故起こします」

遠野は口をあぐりと開いた。

「え？」

「いやがっています。この博物館を自分のテリトリーだと思っていて、離れたくないようです」

みさきは博物館を振り返る。灰色の建物が、こちらを見つめているように佇んでいた。

「じゃ、じゃあ、どうすれば？」

そこに志織が加わって口を挟む。

「別の車でもだめ？」

みさきはこくりと頷いた。手で運ぶとしても、道中でなんらかの事故に巻き込まれる可能性が高いという。

「霊ってテリトリーとか気にするの？」

志織は、ゴールデンウィークに訪れたホリブルキャッスルを思い浮かべた。

「気にするのはね。場所にこだわる霊もいれば、物にこだわるのも人にこだわるのもいるよ。それは霊それぞれだけど。一度自分のものと決めたら、執着心が高まって攻撃的になる」

途方に暮れていると、血相を変えた職員が走ってきた。嚴重に固定されていたはずの展示台が、突然倒れたという。幸い近くに客がいなかったからよかったものの、子どもでもいたら確実に下敷きにされていた。

青木は白い顔になった。

「あの、もう動かさないほうがいいんじゃないでしょうか？」

倒れた台に飾られた人形は、房江のコレクションではなかったものの、首がぽきりと折れてしまっていた。ただでさえ母親の人形がいくつも破損しているのだから、これ以上同じことが起きてほしくないという。遠野と志織とみさきは、それぞれ顔を見合わせてしまった。

「先生としてはいかがですか？」

「……ここに留まったとして、そのまま大人しく除霊されてくれるような代物ではないと思います。行くにしても留まるにしても、多少の覚悟をお願いするかもしれません」

それぞれが沈黙し、お互いの判断に対してどう折り合いをつけようか悩んだ。ふと志織は、場の空気が変化したように思えた。香りも薄い。それはみさきも同じだったようで、彼女は箱を改めて見て蓋を開けた。そのなかに人形はなかった。ガラスケースには砂糖菓子の器だけが残されていた。

「嘘……」

青木は呆然とした。遠野も志織も言葉を失った。志織たちの目の前で、ケースは木箱に納められた。それから誰もが目を離れた瞬間などなかったはずだ。

志織はちらりとみさきを見る。無表情を装っていたが、目には涙がたまっていた。

「探してみますか？」

志織の提案に、まず頷いたのはみさきだった。それから遠野と青木が遅れて同意した。

再度扉をくぐると、館内の空気が出る前とは一変していた。汚れが混じった水のなかを歩いているようだった。花のような匂いは一段と濃くなっている。二手に分かれ、みさきと遠野はバックヤード、志織は青木とともに展示室を回るようになった。

「あの人形がやってきてからのこと、もう一度お聞かせ下さいますか？」

収蔵庫に向かったみさきは、遠野に尋ねる。

「確か、あれが放置されてから二週間は経ってないね。その間に壊れたのは、房江さんのコレクションが二十体ほど、それ以外のものが三体……さっきのを合わせれば五体か。それと、道具が五セットほど。一日に何体も壊れて、だいたいそれは夜間」

「青木さんのお人形に集中していますね」

「元の数が多いからね」

遠野は大きくて頑丈そうな扉を開ける。真夏に似合わない、ひんやりとした空気が手前に滑りこんできた。薄い上着でも持ってくるべきだった、とみさきはむき出しの腕をさすった。

棚にはさまざまな人形が保管されている。むきだしのもの、ケースに入っているもの、木箱に収められているもの、薄紙に包んだだけのもの。

例の人形がどこにいるのか、意識を集中させても気配は曖昧だ。けして弱くなったわけではないはずだが、建物に入ったとたんに固体から気体のように相手の存在感が変化した。そして、それは建物の全体に染みついている。このなかにいるだけで、敵の巣に入っているも同然だと思った。

「カメラを設置すれば壊れるし、警備員は話し声がするって怖がるし。それで、職員の何人かが泊まり込もうとしたんだ。そうしたら、揃いも揃ってその日の勤務中にいきなり高熱が出るし。話し声はいままでもあるっていえばあったんだけど、健康被害は初めてだよ」

遠野は力ない笑みを浮かべた。もともと怪奇現象の気配はしばしばあったので、不審者の犯行の可能性ありと警察に通報するかどうかは保留していた最中のできごとだった。

相手はたやすく人間へ干渉できるほどの力は持っている。いざとなったら彼らを守らなければならない。みさきの手を握る力が強くなった。兄のように遠慮がいない相手でもなければ、志織のように自分で動けるわけでもない。あちらの気配に気づかないうちに危害を加えられることも十分考えられる。それを考慮したうえでの行動が必要だ。

みさきは自分の力不足をひしひしと感じている。怖がりを抜きにしても、まだまだ渡り合えるほどの実力はない。だからこそ、いっそう取り乱してはならないのに、霊や物の怪を見ると恐れ叫ぶのは本能といってもいいくらいだった。

(私、本当に、ダメだなあ……)

せいぜい、遠野の前で霊が姿を現さないのを祈るばかりだった。

一方、志織と青木は展示室内を丁寧に見回っていた。その最中、青木は物憂げな顔で、ガラスのなかの人形たちを眺めた。

「ときどきね、心苦しいのよ」

「え？」

「博物館が作られて人形が飾られて、それでいいと思ったの。母が愛した人形を、みんなにも同じように愛してほしいというだけだった。だから、あのお人形みたいに、呪いとかそういったものが持ち込まれる場になってしまったのがね。遠野さんたちだって、お寺さんでもなんでもないので。普通の人たち。それなのに、こういう風にトラブルに巻き込んでしまうきっかけを、私を作っちゃったようでね」

志織はどう声をかければいいのかわからなかった。言葉少なく、二人で順路通りにスロープを上がり、中二階のホールに到着する。現在は企画展示が行われており、人形道具が国や地域別に並べられていた。

かり、と足首に爪を立てられた。志織がぎょっとして見下ろすと、テーブルにかけられたクロスクロスの裾から細い腕が出て、彼女の足をつかんでいた。

「わ！」

志織が声をあげたのを聞き、青木も視線を下にやる。同時に、腕は引っ込んでしまった。

「どうしたの？ 虫？」

青木の問いに答えるのも忘れて、志織は布をめくった。

――薄暗いなか、二つの目が光っていた。

覗き込んできた青木が息をのむ。志織はとっさに布を下ろした。

(いた.....)

驚きのあまり、呼吸が乱れる。目の光がまぶたに焼きついてしまった。志織は震える手で携帯電話のメールで、みさきを呼び出した。

人形が出られないように、布はしっかり押さえる。送信から数分も経たぬうちに、みさきと遠野がやってきた。

「いた？」

「うん」

志織はもう一度クロスをめくってみせる。しかし、そこに人形の姿はなかった。

「え？」

志織と青木は同時に声を出した。台は壁につけられたうえでクロスをかけられている。志織たち以外に展示室に人はなく、誰かが持ち去ることはできないはずだった。

(自分の目で見張ってればよかった.....)

不覚。志織は自分のこめかみを小突いて、自分に向かって舌打ちする。みさきに比べたら怖が

りでもないのに、なぜか見たくないと思ってつい視界に入らないようにしてしまった。

「本当にいました？」

遠野の疑わしげな声に、青木が反論する。

「だってね、遠野さん。私も見たんですよ」

そこにみさきも口を挟む。

「今日初対面の二人が同時に見たんだから、信用できると思います。その……残念ながら？ 移動する人形っているんですよ」

捨てても捨てても戻ってくる。置いてきたはずのものがいつの間にか荷物のなかにまぎれこんでいる。そんな事例はいくつも聞いてきた。

「それはお人形さんが自分の意思を持ったってこと？」

不安そうな青木にみさきは言いづらそうに答える。

「主に二つ。まずは、仰るとおり、人形に意思が生まれた。古くて使われつづけた人形に多いです。もうひとつは、そこらへんをうろついてた霊が人形に入り込んでいること……」

遠野はざっと展示室を見渡す。構造上、大部分の展示物をここから確認することができる。視線をめぐらせると、遠野はかすかに声にならない声をもらした。

「展示室も含めて、人形をすべて点検することは可能ですか？」

遠野は担当の学芸員に確認したが、あまりいい顔はされなかった。扱いかたも知らぬ部外者に変にいじられたくないと言う。そこを青木が懇願して、白手袋とマスクを着用して、学芸員立ち会いの元なら何体かは触れてもよいと許可を得た。

「どれか見たい人形はありますか？」

学芸員の大田がそう尋ねてきたが、できれば自分で適当なものを選びたいという感情が、彼女の表情と声色から透けて見えた。みさきは迷った末、房江のコレクションとその他の寄贈分を三体ずつと指定した。

持ってこられた人形を、志織とみさきは二人並んで見比べる。はっきりと何かを感じられるのは、房江のコレクションのほうだった。

「警戒されてる……」

ぽつりとみさきが呟く。つられて志織も小声になる。

「中になにかいる？」

「ちょっと弱くてわからない。でも、触るとちょっと反発するよ」

みさきが志織に渡そうとすると、別の意味で緊張感が走った。

「もうちょっと丁寧に扱ってくださいね？」

大田の声には念がこもっていた。下手な霊よりもこの学芸員のほうがよほど怖く思う志織だが、みさきは不必要に慌てずに謝罪して、志織への手渡ししかたを変える。

人形に触れた瞬間、静電気が起きたときと似た反応があった。霊がそばにいるときによくある、ぴりっとした感覚。志織は驚いて落とすことはなかったものの、なんだか落ちつかなかった。

次に、一般市民から最近持ち込まれたという人形を手にする。こちらは房江の人形のような反応はなかった。その代わり、あの日本人形と同じ香の匂いがした。房江の人形に比べると、やや

強い。

それを志織がみさきに報告すると、みさきも同意した。

「すみません、壊れたという人形は見せてもらえませんか？」

前々日までに壊れてしまったものは、専門の職人のところに送ってしまっていたが、前日に破損してしまったものだけは見せてもらえた。

「どう？」

志織がみさきの顔を覗き込むと、みさきは苦い表情を浮かべた。そして口を閉ざしたままなので、志織は首を傾げた。

「どうしたの？」

みさきは志織に囁く。

「しいちゃんさあ、霧風扱えるようにならない？」

ここで何を言うか。志織は呆れて物も言えなかった。

ホリブルキャスルのあとも、志織はちよくちよく祝家を訪れ、簡単な退魔法だけは習った。しかし、志織にはみさきほどのことはできず、たいした成果は得られなかった。攻撃も、霊の背景を鮮明に見抜くこともできない。せいぜい、みさきお手製のお札を手を持って、下級霊からの干渉を抑えることしかできない現状だった。ましてや、霧風など扱えるわけがなかった。

志織が首を振ると、みさきが小さく唸る。大田も疑わしげに見つめるほどの挙動不審ぶりだった。

「どうしたの？」

みさきは歯切れの悪い話しかたをする。

「んーとね……夜の展示室に……その、ね。一晩いるのがベストかなって」

「じゃあそうしようよ」

みさきの仕事に付き合っているうちにすっかり慣れてしまった志織の提案に、みさきは電光石火の速さで拒否する。

「いやいやいや、ちょっと待って」

「怖い？」

直球の質問に、みさきはいきなり固まってしまった。凶星だった。

「だって、だってさあ、いくらかわいいお人形さんでもあのなかで一晩過ごすのはあ……」

ホリブルキャスルで一泊よりもはるかにマシだと思うが。志織はそう主張するが、みさきは唇をかむ。言葉をかえて説得しても返事が不明確で、困った志織は溜め息をついた。

「もう、横川さんの紹介でしょ？ お仕事でしょ？ あの人の顔つぶしちゃうよ」

はっとしたみさきは、志織の顔を見つめる。横川の顔が思い浮かんだ。本来なら、駄々をこねている状況ではないのだ。仕事をする以上は、責任をもたなければならない。そんな簡単なことも守れない自分が、みさきは心底情けなかった。そこまで自覚しながらもまだ躊躇いを捨てきれないことも。

みさきは志織の手を握る。

「しいちゃん、一緒にいてくれる？」

頼りない姿のみさきだったが、志織はもちろん承諾した。みさきは腹を決めて、不審そうに二人を見る大田に頭を下げた。

「すみません、展示室に一晩いさせていただけませんか？」

大田は頷きたくないようだった。そもそも、彼女の同僚の三人が泊まり込みを試みて、一斉に倒れたのだから、それは仕方なかった。そこを必死に食い下がる。

「お願いします。今夜解決させてください。何かあったら責任はとります」

大田はそれでも了承をしづつだったが、上司の遠野がそれを聞いて許可してしまったため、何も言えなかった。ただ、展示物は絶対に傷つけないようにと何度も念を押した。

青木は自分も展示室に留まりたいと申し出たが、それは断った。危険をすこしでもなくすためでもあったが、彼女経由でみさきの怖がりやが横川へ漏れるのを防ぐ目的もあった。

念のため遠野と青木が館外で待機することになり、閉館時間を過ぎてその日の業務が終わると、青木は彼と一緒に博物館から出た。名残惜しそうに何度も振り返るのを、志織とみさきは何度も手を振って送りだした。

公立の施設は電気をむやみに使えない。職員たちが全員去ったあとは、非常灯以外の明かりはすべて落とされた。暗闇に薄い光だけがぼんやりと見える展示室は不気味だ。みさきと志織は展示室が一望できる喫茶室の給湯スペースにしゃがんで潜み、時を待った。

「はい、どーぞ」

自由に使って構わないと言われたのをいいことに、喫茶室で使っているポットで茶を淹れ、志織はみさきに手渡した。

「ありがと」

声をひそめて礼を言ったみさきは、ほうと息を吹きかけ、茶を冷ます。空調だけは効いているとはいえ、さすがに真夏のホットティーはすこし時間をおかないと口をつけられない。

「それ、懐かしいね」

志織が苦笑しながらみさきの頭部を指す。今日のみさきは、きちんとヘルメットを装備している。ちゃんとライトもついているすぐれものだ。結局仕事にこれを持参したのは、志織の高校以来となる。

「うん……」

ようやく温度が下がってきたカップに口付けながら、みさきは数ヶ月前の出会いを回想する。思えばずいぶん長く一緒にいる気がするが、二人が出会ったのはつい最近だ。

「しいちゃん、ありがとうね」

「なに、いきなり」

志織が目丸くすると、みさきは微かに笑う。

「しいちゃんの学校のときさ、本当はすっごくすっごく怖かったの」

「本当はも何も、最初から恐怖全開だったじゃん」

志織のつつこみに、それはそうだけどもみさきも肩をすくめる。

「知らない学校っていうのは平気なの。でも夜で、出るとわかっている場所で、相手がどこから現れるのもわからなくて。それが怖くて、頼れるのは自分だけって状況が心細かった。だからね

、しいちゃんがいてくれて助かったんだよ」

「助かったって、私はあのときだって走る以外に何もしてないよ？」

志織は志織で、わけもわからず全力疾走したあの夜が懐かしかった。あの頃もいまも立場はあまり変わらない。変化があったとすれば、度胸に磨きがかかったことと多少の身の安全は確保できたことだ。

それでいい、とみさきは言う。

「いまは隣にしいちゃんがいるだけで、気が楽なんだ。こうして話すだけで緊張が取れるし。本当にありがたいかぎりですよ」

志織はこそばゆい気分だった。思わず頬を掻く。みさきは、ふふっと笑う。

「私さ、やっぱりまだまだ未熟で、依頼人をちゃんと守れないなって思うんだ。今日だって青木さんを立ち合わせられなかったのは、私の力不足もあるし。うん、頑張りたいな」

みさきはカップを床に置く。その瞬間、展示室で音がした。

あの香りが、空調の風に乗ってほのかに漂ってくる。

志織はこっそりと展示室の様子を窺う。中二階の中央に、小さな影があった。

「あれだ……」

志織はみさきを振り返る。そこにあったのは毛玉のように丸まった彼女の姿があった。

「ちょっと……！」

「ふえええええええ」

みさきの顔は、暗がりのなかでもわかるくらい真っ青だった。

「さっきまでの、緊張が取れるだの、頑張りたいたのはなんだったの？」

気づかれないようにと小声のやりとりではあったが、本当は大声で言いたい志織であった。

鈴のように軽やかな笑い声がホールに響いた。

「さあさ、皆の者。今宵もよき宴の始まりじゃ」

気配が騒がしかった。見ると、ぼんやりとした靄をまとった人形たちがケースをどうやって抜け出したのかは不明だが、中二階に集まっていた。

人形たちは姫の人形を囲むように集う。まるで歓談をしているようだった。

「こういう童謡があった気がするわ」

「うーん、霊じゃなかったら微笑ましいかもしれないけどお……」

みさきは震えながらも様子を観察する。

「みさき、あの人形ってどういうものかわかる……？」

答えるみさきの表情は硬い。

「とりあえず、あのなかにあるのは、遺髪を持ち主の心だと思っていい。正確には、本人のじゃないけれど」

「え？ それって」

志織が問いかけようとした声は、みさきの制止の声で遮られた。志織が視線を中二階に戻すと、姫の人形の前に一体の人形が引きずり出されていくところだった。遠くて見えづらいが、房江のコレクションのひとつだったと志織は記憶している。

「さて、そなたらもそろそろ私とともに過ごさぬか」

拒絶の匂いが漂った。それは、引きずり出された人形のものだった。

姿はよく確認できないのに、姫がにっと笑ったような気がした。

「さよか。ならば要らぬ。去れ」

次の瞬間、天井から刀のようなものがいくつも降ってきた。志織は呼吸を忘れた。彼女の言葉を拒んだ人形は、一瞬にして無残な姿になっていた。それは、例えるなら処刑だった。気持ちが悪い。志織は眉をひそめた。

「そろいもそろって強情なこと。こんなに楽しいのに何が気に入らぬ。さて、次は誰かの」

姫の笑い声が響き、ガラスのなかに残った人形たちの緊張と反発が伝わってくる。昼間に調べ

たときに感じたあれは、志織たちに向けたものではなかった。姫の人形たちへのものだったとわかる。

志織はみさきを見る。やはりがたがたと震えている。小動物のようだった。いまにも吐くのではないかと心配になるほどだった。

どうすると小声で尋ねた志織に、みさきは行くと頷いて立ち上がった。まるで正義の味方のような後ろ姿だ。

みさきは息を細く吸って叫ぶ。

「それ以上は、やめなっしょい！」

噛んだ。しかし、みさきはそんなこと気にできないほどに気が張っていた。慎重に一段一段階段を下りる。人形たちのむき出しの敵意が痛かった。

「なんじゃ。無礼な」

姫の声は怒気をはらむ。かたかたと人形が揺れる。みさきは自分を守るように霧風を構えた。

「いたずらに傷つけたり荒らすなって言ってるの……」

声がだんだんと細くなるのももうおなじみだ。ずんと空気が重くなり、頭痛を引き起こす。

「ここは私の城、私こそが主。主が臣を統べているだけのこと。何が悪い」

「勘違いしないで。あなたはここにいるべきじゃない」

その一言に、姫の人形から、ゆっくりと靄があがる。それは徐々に人の形をとり、はっきりとした女性の姿を映しだした。切れ長の目が特徴の、美しい女性だった。華麗な打ちかけを羽織っている。

姫の視線は射るようだった。みさきはとっさに一步下がって志織と肩を並べる。

「この者どもこそ、手討ちにせねばの」

がちやり、と音が鳴る。人形たちが一斉に志織とみさきのほうを向く。

「しいちゃん」

みさきが前方を見たまま声をかける。

「私はあのお姫様に集中しても大丈夫？」

志織はしっかりと頷いた。それを確認したみさきは、霧風を振り上げながら迫っていった。

周囲の人形たちは、姫と同じように人の姿を出現させて、みさきに襲いかかる。そこを止めるのが志織の役割だった。

もちろん、志織は霊に対して自分からできることはない。けれど、身のこなしだけなら以前よりはましになっている。みさきにとっては、それだけで上出来らしい。

志織はなるべく人形を傷つketくなくかった。彼らの動きを無効化させることに集中しようと思った。ポケットからみさきにもらった札を取り出す。まずはそれを手当たりしだい人形に貼っていった。けして人形の肌に直接つけないようにと大田からは口をすっぱくして言われている。もはや迫りくる人形への恐怖よりも、どうやって人形を傷めないかが脳内を占めていた。

志織には父の形見のほかに、祝家から預かったお守りを所持していた。それだけでいままでよりも心強かった。ネックレスを意識したときと同じで、守られている自信が彼女の度胸を増幅させていた。

力を失った人形は倒れていく。もともと数はあまり多くはない。志織は半数以上を片付けると、一度入口側の階段を下りて展示スペースへと回る。ケースのなかにはまだ人形がいる。姫の人形の敵味方関係なく、ガラス面にも札を貼る。志織の使命は、みさきが元凶の姫人形と対峙するのに集中できる環境を整えることである。

通路を回っていると、生き残りが追いかけてきた。それをさばきながら、遠慮なく壁にべたべたと札を付けてまわり、一周して中二階に戻ってきた。

みさきは、依然として姫とにらみあっていた。姫の周囲には、さきほどの刀が何本も浮いていた。みさきは例によって半泣きである。

お札がきかなかった人形をひきつれて、志織はみさきの背後へと回った。

「ここは私の城。誰が渡すものか」

姫の顔が歪み、肌は真っ赤になる。

「最後の最後まで私のもの」

姫が上げた手を瞬時に下ろす。その瞬間、刀はいっせいに襲いかかってきた。

「ぎゃああああああっ！」

叫びながらも、みさきは一本二本と霧風で払い落とす。床や壁に当たると、刀はそのまま消えてしまった。

志織はみさきに近寄ろうとする霊に札をどんどん貼っていこうとするが、一瞬彼らの力が強まった。紙ひとつでは抑えられない。振るわれた腕で壁まで飛ばされた。

「し、しいちゃん！」

うろたえたみさきが駆け寄ってこようとするのを見て、志織は怒鳴って制した。

「危ないから来ないで！ 後ろ！」

みさきは立ち止まる。彼女の後方からまっすぐに伸びた刃がその頬をかすめた。

「うへえあっ！」

みさきはとっさに、第二撃を霧風で受け止める。甲高い音が室内に響く。姫が握った短刀に、みさきは防衛することしかできなかった。

「うあああ、剣道習っておけばよかった！」

なんとか刃から身を守っているみさきではあったが、明らかに姫のほうが優勢だった。志織は志織で、札が効かないとなると残りの人形たちから逃げることもできなかった。

「渡さぬ、渡さぬ」

姫は呪いをかけるように、そればかりを呟いていた。鬼のような顔がすぐ近くにあることで、みさきの恐怖は頂点に達していた。しかし、ここで彼女に対抗できるのはやはり自分だけであり、志織には任せられなかった。

姫は打ちかけを脱いで間着だけになり、いっそう攻撃が早くなる。か弱さは欠片もない。刀の扱いに関しては、あきらかに向こうのほうが上だ。どこか洗練されていて、まるで舞っているようだった。

みさきは、相手の意識に集中する。姫の意識を探り、なにか情報を得ようとした。これも、志織にはできない、みさきだけの能力だった。

ふいに彼女の背後に火が現れた。血が見える。ゆらめく景色に、短刀を手にした姫の姿があった。その傍らには刀を携えた武士が立っている。二人の刃が炎にきらめいて――みさきは目を見開いた。

「も、もう、あなたの城はどこにもありません！」

姫の刀が止まる。みさきはつかえながらも続けた。

「あなたは敗れたんです。もう城は……落ちました！」

姫はわなわたとふるえた。怒りが雷のように部屋のあちこちに放たれるようで、志織はぶるりと震えた。

「落ちぬ！ 滅びぬ！ 何をぬかすか！」

布を裂くような声だった。いっそう刀の振るう速度が上がった。みさきはますます追いやられる。それでも現実を知ってほしくて、負けないように叫んだ。

「ここはあなたが守ろうとしていた城でもないし、あなたが戦う理由ももうないんです」

みさきが語りかけるたびに、姫の怒気は膨れ上がっていく。しかし、同時に戸惑いもわきあがったのを志織もみさきも感じていた。

お札は残り少ない。自分にできるのここまでだと、志織は唇を噛んだ。ここで無力な自分がへたに介入しようものなら、ゴールデンウィークの二の舞だった。

その瞬間、呼ばれた気がした。みさきではない。志織は周囲を見渡す。ぼんやりと、ガラスケースの一角が光っていた。

出して。そう聞こえた。

志織はケースに駆け寄って、札をとっさにはがした。その瞬間、魂のようなものがガラスから抜け出して、中二階へと上がった。志織も慌ててそれを追いかける。

みさきが防衛に徹していると、急に姫の動きが止まった。まるで礫にされているかのごとき姿に、姫自身が戸惑っていた。その隙をみさきは見逃さなかった。躊躇いはあったが、姫の胸を正面から突いた。

花が散るように飛沫が飛ぶ。姫は目を大きく開き、口から血を流しながら倒れ、気配は飛散した。

志織とみさきは同時に、姫の人形本体があった場所に近寄った。そこには、房江の人形たちが姫の人形を取り囲むように落ちていた。

その後、みさきと志織は遠野たちを呼びに行った。さすがに深夜ということもあり、二人は眠そうだった。みさきは、説明はまた朝にするとして、まずは人形と展示室をすべて清めたいと願い出た。了承した遠野と青木が見ているなか、みさきは志織を助手として使いながら人形を一体一体清めていった。

すべて終わると、志織たちは用意された宿で泥のように眠った。夢をみることさえなかった。そして朝になり、迎えにきた遠野の車に乗せられ、博物館に戻った。圧迫されるような気配はもうすでに消えていた。

青木と遠野、そこに大田も加わった場で、みさきは説明をする。

「この人形の髪なんですけれど、お姫さまの……遺髪だと思います。江戸よりも前の時代ですね」

みさきは、姫の向こう側に見えた景色を思い出す。

「男の人たちと一緒に籠城したけれど勝てなかった。それで城が落ちたときに、髪を逃げた誰かに持たせて、自分は自害したようです。おそらく、この着物にぐるんで渡したんじゃないかなって」

みさきの口調は、どことなくいつもよりも重々しかった。

「きっと、持たされた人はお姫さまを慕っていたのでしょうね。その死をしのぶために作られた人形だと思います。ただ、落城で死に追いやられたときの怒りや悲しみが移って、この人形の人格となったのでしょうか」

黙って話を聞いていた青木は、ぽつりと呟く。

「そういえば、どうして母の人形ばかりが壊れたのかしら」

そう言われてみれば。志織もそれは疑問だった。

「お姫様の下につくかどうかだったと思います」

みさきはきっぱりと指摘した。青木や遠野がそろって驚いた顔をする。

「それはどういうこと？」

「お姫様が取り巻きに使っていた人形は、房江さんと縁のなかった人形ばかりでした。お姫様は城にこだわっていた。この博物館を、今度こそ自分の城として所有したかったのでしょうか。けれど、房江さんたちの人形はそれを拒んだ。彼らは、ここが自分たちと亡き房江さんのために用意された場所だとわかっていたのだと思います」

みさきが言うには、姫が力を持ちながらも博物館を完全に支配できなかったのは、房江の人形たちの抵抗があったからだった。青木の手がわずかに震えた。みさきは続ける。

「壊されたのは、お姫様にとっては罰のつもりだったのでしょうか。房江さんのお人形たちは、お姫様に乗っ取られないように抵抗していたみたいです。自分たちの場所を守ろうと」

志織は、昨夜の処刑のような場面を思い出し、苦い気持ちが心に広がった。

「お姫様は強い力を持っていて、しかも生前の無念で自分の城を欲した。そして、房江さんのお人形がそれに反発してしまったのが、今回の騒動になってしまったのだと思いますよ」

青木は同情するような目で、人形を見つめる。みさきは、そんな彼女を励ますように笑顔を作った。

「でも、もう祓ってしまいました。これで普通の人形と変わらないでしょう。ただ、もしも気になるようでしたら神社やお寺に持っていくか、お焚きあげしてください。そのほうが後までひきずらないでしょうし」

もったいない、と声をあげたのは大田だった。遠野は逆に維持に気が乗らないようだった。両者は互いの主張を聞かなかった。意見が合わない二人に割って入ったのは、志織でもみさきでもなく、青木だった。

「あの、みさきさん？ これはもう、何もないと考えてしまってもよろしいのかしら？」

みさきはきょとんとしながらも、肯定した。

「では、私が頂くというのはどうかしら？」

想像もしてなかった案に、その場にいた誰もがぼかんと口を開けた。青木は微笑して続ける。「だってもうお祓いは済んでいるのでしょうか？ それで処分してしまうのはなんか気がひけるわ。それに、私が引き取れば、館の人もいやなことを思い出さなくていいと思うの」

「……まあ、角はたちませんかね？」

言いながら、みさきは志織に視線を送る。ここまでくれば、あとは館と青木の問題だ。志織は明確な解答を避けて、首をかしげるだけにした。

「一体だけなら、無精者の私でも大事にできると思うの。母みたいにね」

大田はまだ不満そうだったが、青木が自分の死後は博物館に寄贈すると言って押し切ってしまった。手続きがどうなるのかは高校生にはよくわからないが、彼らがどうにかするのだろうと自分を納得させた。

遠野と大田に見送られながら、志織たちは青木の運転する車に乗って博物館をあとにした。山に囲まれた町のなかを走る道中、青木はふと口を開いた。

「みさきさん、志織さん。母の人形を守ってくれてありがとう」

その顔は穏やかだった。

「あれは母が生きた証だから、失わなれなくてよかった。母はもういないけれど、人形がいれば母の思い出はずっと残していける」

駅につくと、ふっきれた顔で青木は二人に挨拶した。

「また来てちょうだいね。私も人形たちも歓迎するわ」

去っていく青木の車を見送りながら、改札までの階段を上がった。

来た電車に乗り、新幹線の通っている駅まで向かう。土地の感覚がないから、窓から見える景色のどこにあの博物館があるのかはもうわからなくなってしまった。

車窓から見える山は青く、夏らしさを感じさせる。志織はまた勉強漬けの受験生としての日常に戻るのが楽しみでもあり、少々気が重かった。

「いいところだね」

ぽつりとみさきは呟いた。

「また来る？」

志織が尋ねると、みさきは何も言わずに座り直す。しかし、ホリブルキャッスルのときとは違い、その表情は明るかった。

「ふわあああ」

電車で揺られ、二人同時にあくびをする。結局深夜まで起きていたのだから、座って電車で揺られていると、急に眠気が襲ってきた。

「しいちゃん、着いたら起こしてね」

「ごめん、自信ない。降りるの終点だし、どうにかなるでしょ」

どちらが先だったかは明らかではないが、気づいたら二人とも眠りこけてしまった。その首筋を、真夏の陽光がガラス越しに照らしていた。



「落野市……？」

十月に入ったころのことだった。みさきにカフェへと呼び出された志織は、目的地を告げられると表情が固まってしまった。みさきはその変化に戸惑い、声が弱くなる。

「うん。ちょっと大口の依頼で……。なにか都合悪かったりする？」

志織は逡巡したあと、首で否定の返事をした。

落野市は、都心から電車で一時間ほどの距離にある、典型的な郊外だった。志織はかの地を知っていた。

「昔、そこに住んでたんだ」

「そうなの？」

みさきには以前、祖父と父の死をきっかけに生家を離れたことを話していた。みさきは、志織が父たちの生前のことをあまり嬉しそうに話さないことに気づいていた。だから、あまり深くはつっこまないようにした。

「……もしかしたら、泊まりになるかもしれない」

「え？」

志織は目を丸くした。志織の住まいからもみさきの住まいからも、落野市はさほど遠くない。余裕で日帰りができる場所だった。

「どうして？」

「依頼人の希望なの。お宅に泊まらせてくれるらしいよ。それで、今度の連休を使うつもり」

ストローでアイスティーを飲みながら、みさきはちらりと志織に視線を送った。

「ね、しいちゃん。もしもダメだったら別にいいからね」

「え？」

みさきはコースターの上にグラスを置く。

「辛いこと思い出すんだったら、無理して誘わないよ。私は仕事だからどうしても行かなくちゃいけないけど、それはしいちゃんの義務じゃないからね」

みさきの真っ直ぐな眼差しが、志織の瞳に注ぎこまれる。志織は正直に言うと、迷ってしまった。落野に行きたいなどとは思えなかった。しかし、そうするとみさきだけで赴くことになる。なんだかんだいってみさきは単独でも仕事をこなせるだろうが、彼女を一人で行かせるのも気が進まなかった。

志織は無意識に胸元のネックレスを探っていた。あの町に行くことはないと思っていた。ずっと目をそらし、地名を視界に入れることすらしなかった。

祖父や父と過ごしたあの町は、懐かしい以上に疎ましかった。そして、その大本の原因は、志織自身にあった。志織はそれに向き合えずにいた。

「私も、行く」

その言葉を出すのに、数分はかかった。志織の喉を離れて飛び出しても、重々しさは残る。後

悔は残ったが、自分の心に溜まった澱と決別する勇気がほしかった。

志織の返事にみさきは目を見開いて、志織を見つめた。指でテーブルを軽く叩き、一瞬口を開く。しかし、そこでは何も発することはなく一度閉じ、しばらくしてから改めて言葉を紡いだ。

「大丈夫？」

「うん」

ネックレスが密着した肌が、やけに冷たかった。

「お母さん。今度の土曜日、みさきの家に泊まるから」

志織が帰宅すると、既に母が勤務を終えて戻っていた。志織の言葉に、母は心配そうな表情を浮かべた。

「この間もお泊まりしたでしょ？ 大丈夫？」

泊まりがけの仕事はあまりないが、そういうときはいつも、みさきの家に泊まるということにしてある。母にみさきを紹介したのは春ごろだ。図書館で出会った二人は同じ大学を志望していたことで気が合い、みさきの兄の勝士を家庭教師に二人で勉強しているという設定だ。みさきが進学校で、勝士も名の通った大学に通っていることで母の信用を得ることができた。

みさきの家庭はもちろん彼女の仕事に協力的なので、志織の母が挨拶の電話をかけたときも話をきちんと合わせてくれる。みさきの母だけは、騙すのは気が重いとは言っていたが。そのため、志織はみさきと一緒に外泊しても怪しまれないようになっていた。

志織の母は、祝家に何度も世話になるだけでなく、勝士の家庭教師の負担についても心配した。そこは、祝家が商売をしており、その手伝いをする中で相殺しているとごまかした。嘘というわけでもないが、事実を伝えていないことは後ろめたい志織であった。

「祝さんちでバイトするより、ちゃんと予備校通ったほうがお互いのためにもいいんじゃない？」

それくらいのお金なら、お父さんがちゃんと残してくれているから」

母のそんな言葉も、できれば自分で費用を稼ぎながら勉強をしたいとはねのけてしまった。それ以来この件に関してはなんの詮索もせずに娘に任せていた。

「大丈夫、大丈夫。追い込みだからね。この間も合格圏だったでしょ？ 滑り止めは余裕だし、浪人は絶対にしないように頑張るから」

母はまだなにか言いたいようであったが、諦めてそれ以上何も言わなかった。

志織はサイドボードの上に飾った父と祖父の写真を見やった。学者をしていた父はいつも穏やかで、志織のささいな話にも真剣に耳を傾けてくれた。そんな父が大好きだった。

「ねえ、昔の家ってさ」

「んー？」

志織は、夕食の支度をする母の背に問いかけた。

「お祖父ちゃんとお父さんと一緒に住んでた家っていまどうなってる？」

「ああ、もう無くなってわよ。土地売っちゃったからね。新しい家を建てたんじゃなかったか

しら」

「お母さんはいやじゃなかった？」

包丁の音が止まった。

「あの家売っちゃって、いやじゃなかった？」

「そりゃあねー、思い出詰まってたもの。でも、お父さんの遺言だったのよ」

「え？」

それは初耳だった。

「お祖父ちゃんが死んじゃって、お父さんともそのときいろいろ話しあったのよ。自分に何かあったら、家を売って残ったお金で志織を育ててくれって。この家には残るなって。まさかそう言ってすぐに倒れて死んじゃうとは思わなかったけど」

母の声が詰まる代わりに、野菜を切る音が再び響くようになった。志織はもうなにも母に尋ねることができなかった。父が亡くなってから、いっそう母は頑固になった。母は元々実家とは疎遠で、突然夫と舅を亡くし、一人で志織を育てることになった。その厳しさを、志織は完全に知ることはできないが、母の苦労はよくわかっていた。志織は母に必要以上の迷惑も心配もかけたくなかった。

母とは二人きりになってからのほうが、親子の距離が近くなったと思う。お互い、相手がたった一人の家族だ。支え合わなければ生きていけなかった。それゆえに、母にはいろいろと嘘をついていることが申し訳なかった。

その晩、志織は自分のベッドに潜りながら、ネックレスを眺めた。父が残したもの。それ以外の情報はなにも知らなかった。

父と祖父の墓は別の土地にあった。去ってから一度も露野を訪れたことはない。忌々しい土地だと憎んでいた。

(けれど、これはいい機会なのかもしれない)

志織はずっと逃げてきた。露野で起きた出来事をなんとか忘れようと思いつけた。でないと、自分の心がつぶされてしまうのではないかと思ったから。

志織が生まれる前のことだ。父が高校生のおきに、渡辺家は落野市内にある新興住宅地、秋里という場所にやてきた。適度にのどかで交通の便もよく、暮らしやすい土地だと思ったらしい。やがて父は家を出て結婚し、志織が生まれた。そして、彼女が一歳になったときに父方の祖母が亡くなった。祖父が一人残された家に志織たちも移り、渡辺家は四人暮らしとなった。

志織の母は仕事を持っていて、出産後一年で復帰した。そのため、面倒をみるのは祖父の担当で、志織は幼児期の大半を祖父とともに過ごした。父も母よりは自宅にいる時間が多く、そんなときはいつも側にいてくれた。

「あそこに何かいる」

物心ついたころから、志織には他人には見えないものが見えていた。母は大人の気を引く幼児特有の言動だと思っ、にこにこ笑って聞いてはいたがあまり本気にはしなかった。丁寧に話を聞いてくれたのは父だった。父は幼い志織が怯えるとやさしく語りかけた。

「志織が怖がると相手もよけいに怖がってしまうよ。それは人間もだけど、幽霊は人間よりもさらに繊細だからね。余計にこちらの怖いとか悲しいとかいう感情をむやみにぶつけてはならないんだ」

志織の父もまた霊や物の怪が見える体質だった。みさき以前に出会った人のなかでは唯一、志織の靈感を正しく理解してくれた。志織にとって父こそが理解者だった。幼い彼女が幽霊が見えることにあまり悩まずにすんだのは、父の存在があったからだ。

「ただし、人間と同じように、幽霊にも優しい人と怖い人がいる。危ない人について行っちゃいけないってお母さんが言ってるね。それと同じで、危ないと思っした霊には近寄ってはいけないよ」

父との言いつけを守っていたが、志織は次第に霊に親しみに似た感情を抱くようになった。落野で生活してて悪霊に出会うことはほとんどなかったし、ちょうどそのころ、霊能者を題材にした作品がブームになっていたこともある。

友達はみな「幽霊っているのかな？」と囁きあっていたが、志織は本当に存在していることを知っていた。もしかしたら、自分にも同じようなことができるかもしれない。そう思っていた。

小学二年生の秋の日のことだった。志織は下校途中で、秋里の入口付近まで来ていた。もうすぐ家だと思っながら歩いていると、嗅ぎ慣れない臭いととも、赤い霧がふわりと風に乗って広がった。

それに戸惑っていると、通りの陰から自分の近所では見ない顔の子どもを目撃した。その子どもは足早に去っていく。不思議に思っながら彼女がいた方角を見て、志織は驚愕した。

血まみれになった男が道の隅に倒れて呻っていた。志織はとっさに近寄るが、その前を通る人間は誰も気にとめない。それは、志織にしか見えなかった。

男は悲しみを周囲にまき散らした。しびれるような臭いが広がる。助けてほしいという感情が志織にダイレクトに伝わった。同時に、他の霊とは違う異質さも感じ取った。まるでサイレンが鳴っているように、頭のなかの脈動が大きくなった。

まだ子どもの志織は、この感覚を自分でもよくわかっていなかったが、いつもと何かが違うというのは感じ取った。自分のなかのなにかが、それには近づいてはいけないと警告する。

(危ないものに近づいちゃだめ)

それが父との約束だった。志織は唾を飲み込み、踵を返して立ち去ろうとした瞬間、彼と目が合った。

息をのむ。彼の顔が歪んだ。

「助けて……」

そう言って、手を伸ばしてきた。しかし、それは志織まで届くはずもなく、小刻みに揺れながら宙を搔くだけであった。その姿はあまりにも哀れで痛ましく、志織は目をそらすことができなかった。肌が痛く、心臓が絞られるように縮こまる感覚。

「どうか……」

志織は、そのまま去ることができなかった。足が動かなかった。彼の悲痛な声が心を引っかく。彼に手を貸したい、自分にできることがあれば――。そう思った志織は、その手を取った。

「どうしたの？」

かさついた声で、志織は尋ねた。男は、ぎらついた目を志織に向けた。

「お助け……ください……助け……」

志織は反射的に手を握った。彼は微かに微笑んで、その感情があたたかく大気に広がる。

しかし、志織はそれ以上どうすればいいのかわからなかった。こんなに傷だらけで苦しうではあっても、相手が霊ならば、病院に行く選択肢など最初からない。手を取ったものの、自分になにができるかなんて考えてもいなかった。

「苦しい？ 苦しいの？」

男は涙を流して頷くが、志織は戸惑う。こんな霊に出会った経験はなかった。いつも家族にそうしてもらうように、その頭を撫でてやることしかできなかった。それで傷や辛さが回復するとは志織も思っていなかったけれど、他に思いつかなかった。

「どうすればいい？」

男がどう返事をしたのか、その言葉が何を意味するのか、志織にはわからなかった。

「お水持ってくればいい？ お菓子のほうがいい？」

彼は力なく、志織を虚ろな目で見上げてきた。急に志織は背筋が寒くなった。彼の必死にすぎってくるその意識が、手足に絡みついて上ってくる。そして自分にとってそれは荷が重いという自覚。

志織は無意識のうちに手を離した。ずるりと地に落ちた、赤錆色の腕。見開いた男の瞳。何か言いかけた彼の唇。心地よい熱がふっと消えた。代わりに、冷えた空気が志織の身体を包む。

志織ははっとした。彼がまた腕を動かしたので、もう一度その手に触れようとした。しかし、できなかった。かたかたと震える。男の視線が絡みつく。身体が重くなる。それに耐えられな

った。

自分が彼にできることなど一になにもない。

「ご、ごめんなさい」

志織は立ち上がり、駆け出した。背中で引き止める声を聞いたが、志織は振り返らなかった。振り返ってもどうしようもなかった。

（ごめんなさい……！）

「きゃっ！」

脚に痛みが走り、志織は転んだ。見ると、左のふくらはぎに斜めに裂いた大きな傷が出来ていた。振り返る。男が恨めしそうに、這いながらこちらに向かってくる。

「お待ち、くだ、さ」

志織は地面についたまま、後ろに下がる。アスファルトを伝って、逃すまいという彼の執念が伝わってくる。彼の手が伸びるように、気配が足に絡みついた。歯の奥ががたがたと鳴った。怖い。これほどまでに強い恐怖を志織は感じたことがなかった。

志織は悲鳴をあげて、それを振り払った。途切れる感触。彼が息をのんだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

志織はそう声をかけるしかなかった。そして、すぐにその場を離れた。なにか声がしても、今度は立ち止まらず背後を見やることもなかった。

（お父さん、お父さん、お父さん）

全速力で家に逃げ帰ったが、家には祖父しかいなかった。ただいまもろくに言わず、志織は自分の部屋に直行して、ドアを思い切り閉めた。心臓の音が大きい。志織は体が締め付けられるような恐怖を覚えた。

「どうしよう、どうしよう……」

いままで志織が会った霊とは大違いだった。何もせずに道に立っている霊、学校にいる悪戯好きの霊、近所の家に取り憑いている霊。それらのどれとも違っていった。

困っているなら助けたい、ただそれだけだった。声をかければ何かできると勝手に思いこんでいた。それなのに怖いからと見捨ててしまったのだ。申し訳なさが心に積もっていく。それなのに、戻ろうと思えなかった。

父はいない。相談できない。志織はどうしたらよかったのか悩んだ末、意を決して仏壇から線香を持ち出し、家を抜け出した。恐ろしさで手が震えたのは初めての経験だった。

先ほど出会った場所に戻る。男はいなかった。ほっとしたのもつかの間、すぐに恐怖が増してきた。どこに行ったのだろう。

急に切った脚が痛くなった。志織は途方に暮れた。彼は、どうなってしまっただろう。志織が見捨てて、悲しんだらうか。

探し回りたくても、恐怖で足がすくんだ。それ以上は無理だった。泣きながら家に戻り、祖父に何も話せないまま両親の帰りを待った。先に帰ってきたのは母で、祖父から志織の様子がおかしいと聞き、母は志織の手当を聞きながら尋ねてきた。

「お友達とけんかしたの？」

志織は無言で否定した。なんと説明すればいいのかわからなかった。母が幽霊の存在を信じていないことは既に理解していた。きっと正直に言ってもわかってくれなかったろう。傷は釘に引っかかって転んだときにできた嘘をついたが、母は信用していない素振りだった。

それからようやく父が帰ってきて、志織は泣きながらその日の出来事を打ち明けた。父は厳しい顔だったが、黙って最後まで話を聞くと、頭を撫でてくれた。

「お父さんが変なふうにしたのがいけなかったね」

そんなことないと志織は何度も否定した。危険を感じるものには近づかないと約束していたのに、それを破ったのは志織のほうだった。

何も心配しなくていいと父は言った。そして、母にも心配することはないと告げてくれた。

その晩、志織の眠りは浅かった。何度も起きてしまい、時計の秒針の音がだんだん大きく聞こえるようになった。耳をふさいでもふさいでも、手をすり抜けて脳の奥まで響いていた。

彼はどこへ行ってしまったのか。頭のなかはそれでいっぱいだった。どうかそのままどこか遠くに行ってしまっただけでありますように。そう願った志織の部屋の窓が、急に叩かれた。

志織は息をのんだ。数秒おいて、もう一度叩く音。明らかに風で何かがぶつかったものではない――誰かがノックしている。

(誰?)

尋ねたくても声が出なかった。考えたくもなかった。ここは二階。外には足場がなく、簡単に人が上がってこられないようになっている。

こんこん、こんこん。ノックの音は激しくなり、そして、いきなり一度強く叩かれる。

「ひっ！」

思わず声が出てしまった。静寂が訪れる。呼吸をするのも恐ろしくてじっと息をひそめると、雲の切れ間から月が出たのだろうか、カーテンの向こうがほのかに明るくなる。窓の正面に人影があった。

志織は目を見開くが、動けなかった。動いたら気づかれると思った。

「見つけた」

窓の前にいる人物は、喉の奥で笑いを押し殺したような声で言った。あの男のものだった。

志織は涙を流した。あの、地に落ちた男の腕が、見開いた男の瞳が、網膜に焼きついている。

「お前も見捨てた……」

違う、と言いたかった。自分なりに力になりたかったのだ。けれども、いざ手を取っても、自分にできることなど何もなかった。志織は言い訳を並べた。それがとても自分勝手なことと心のどこかでわかっていたけれども、正当化したくてたまらなかった。

「お前もあいつらも許さない……すべて奪ってやる……」

外がまた暗くなり、気配が消えた。志織は布団をかぶった。わずかな物音さえも聞きたくなく、これが夢であってほしいと願った。

翌朝、母が起こしにやってきて、ためらいもなくカーテンを開けた。前日となんら変わらない、朝の風景が広がっていた。恐る恐る外を覗いたが、男はいなかった。代わりに、窓辺にはあの臭いが残っていた。夢ではないと確信するしかないほどに。

外に出たくない。志織はぽつりと呟いた。

「学校、行きたくない」

その言葉を聞いた母は熱をはかったが、もちろん問題があるわけでもない。にこりと励ましの言葉を残し、朝の支度に戻るために部屋を出て行ってしまった。

どんなにごねても母は理解してくれなかった。そのまま無理やりランドセルを背負わされ、志織は登校しなくてはならなかった。

玄関を開けると、濁った空気が家に入ってきた。志織は驚いて扉を一度閉めた。そしてもう一度開け、現実のなかに飛び込むこととなった。あの臭いが秋里の町全体を覆っていた。

小学校までの一步一步が重かった。次の角を曲がったらいるかもしれない。いつの間にか背後に回られているかもしれない。校門に入るまで、志織の緊張は続いた。

学校にも霊はいたが、なんだか彼らも落ち着いていないように思えた。秋里よりは清浄な空気ではあったが、志織の体にはあの臭いがまとわりついていて、何度手を洗っても取れない。

「なに？ どうしたの？ バイ菌でもついた？」

仲のいいクラスメート、雅哉がからかってきた。彼は近所に住んでいて気心の知れた関係であるが、そのときはなんの冗談を言う気にもなれなかった。

「うるさいよ。ほっといて」

雅哉は水道の蛇口をひねり、ふざけて志織に向かって滴を飛ばしてきた。彼はいつもそうだった。その数日前も、校内で鬼ごっこをして上級生にぶつかり、囲まれてしこたま叱られた。それでも悪びれもせず、同じようなことをくりかえす。

彼のおふざけに慣れていた志織は、いつもならこんなことくらいで怒らなかった。けれども、このときはやけに気にさわった。

「もう、いいかげんにして！」

雅哉はつまらなそうな様子で、ぶつぶつ言いながら去っていった。悪いことをしたと思う余裕も、そのときの彼女にはなかった。洗っても拭いても落ちない、不快な匂いに心が侵食されていく。その恐怖に、幼い志織は押しつぶされそうになった。

学校が終わると、登校のときよりもさらに早足で家へと急いだ。道中、何があっても何がいても、脇目もふらずに歩いた。

気持ち悪い町を通り抜けて、力いっぱい玄関のドアを開けてすぐに閉める。父も母も仕事だった。一人留守番をしていた祖父は書斎の窓辺にいた。晴れた日は、たいていそうだった。

「お祖父ちゃん」

呼びかけると、いつものように振り返って、おかえりと応えてくれた。家のなかには匂いも霧も

強くない。志織はほっとしながら、床に直に座った祖父の隣に腰を下ろしてよりかかった。

「なんだ、どうした」

志織は何も答えずに、ただ祖父の身体にしがみついた。祖父は苦笑して、志織の頭を撫でてくれた。その手に一生甘えていたかった。わけも話さないのになにも尋ねないで優しくしてくれる祖父が嬉しかった。

けれども、どう話せばいいのかわからなかった。祖父もまた、霊が見えるという志織の話を、母と同じように笑って受け流していた。志織は説明のしかたを考えていると、祖父はにこりと笑った。

「お祖父ちゃん、外に出ちゃダメだよ」

祖父は苦笑した。

「いまの時期は散歩が気持ちいいよ。たまには外出なくちゃ、お祖父ちゃんも身体がなまってしまうよ」

「それでも、ダメ。ごめんね、私がおかしいことにしちゃったの。だから、ごめん、外に出ないで」

「おかしいことって？」

志織は思い切って告げた。

「幽霊がいるの。怖い幽霊。私、その人怒らせちゃったの。お祖父ちゃんもどうにかされちゃうかも」

拙いなりに必死に説得したが全然伝わらず、祖父は受け流してしまった。父のように、この感覚を共有することができなかった。祖父も母も、志織がどうしてこんなに悩んでいるのか理解してくれなかった。

その晩も志織は眠れなかった。窓辺にあの男が立ったら、もしも家のなかに入ってきたらどうしよう。そればかり考えていた。

翌日も、志織は重い心で家を出た。この鈍みが霊の影響なのか睡眠不足のせいなのかもよくわからなくなっていた。

あまりに普段よりも落ち込んだ様子に、クラスでは遠巻きにされるほどだった。いつもの友達もなんだかよそよそしい。こんなときでも雅哉なら構わず近寄ってくるのだが、そんな彼もその日は休みだった。しかし、孤独を感じる暇すらも志織にはなかった。

前日より霊の気配が濃かった。いままで景色がこんな風に見えたことはなかった。他の子はなにも感じないようだった。いままで幽霊が見えることに優越感に似た思いがあった。幽霊退治をする霊能者のキャラクターをカッコいいと友人たちと言いながら、自分も霊が見えることをどこか密かな自慢のように思っていた。それは間違いなのだと志織はひしひしと感じていた。そのとき、見えない人々を初めて羨ましく思った。

帰りに、近所だからと雅哉の家までプリントを届けに行くことになった。雅哉の家は、最初にあの男と遭遇した場所のすぐそばだった。行きたくないと言っても通じるわけがなかった。意地悪をしないできちんと届けてやりなさい、と担任の教師に諭され、志織は不承不承お使いを頼まれることになった。

雅哉の家のある通りは格段に臭いが強かった。吐きそうになるのをこらえ、男に怯えながら、志織は雅哉の家まで最短距離で向かった。

雅哉は急な高熱で、薬を飲んでもなかなか治らないと、雅哉の母が言った。もしかしたら数日は休むかもしれない。雅哉には申し訳なかったが、志織は嫌だと思った。次の日もその次の日も、雅哉が休む限りあの道を通らなければならない。このむせかえるほど臭いも色も雑味の強い場所には一秒もいたくなかった。それを、雅哉の母の前で顔を出すわけにはいかなかったが。

彼女にとっての救いは、今朝見た限りでは、雅哉の家よりも志織の自宅の周辺のほうがまだましだったという事実だけだ。

早くこの場所を抜きたい。早く帰って、祖父のそばに行きたい。その思いでいっぱいだった。

早く早く早く。近道をすれば、ひとつの曲がり角を経るだけでよかった。駆け足でそこを通り過ぎる。

そして、志織は呆然とした。自分の家を臭気と赤い霧が覆っていた。雅哉の家のあたりと同じくらいの濃さだ。身の毛がよだつという感覚を、初めて知った。秋にしては気温が高かったはずなのに、震えが止まらなかった。志織は急いで玄関のドアを開けた。家のなかにも霊の気配が微かに存在していた。

「ただいまぁ」

しんと静まり返った家のなかに入ると心細くて、志織は願うように必死に呼びかけた。

「おじいちゃん？」

年をとったとはいえ、祖父の耳は遠くなかった。玄関から呼びかければ聞こえるはずだった。それなのに返事はない。志織は靴を脱いで、真っ先に書斎に向かった。

祖父はそこにいた。窓際に椅子を持ってきて座っていた。目を閉じて、窓枠に寄りかかっていた。祖父が寝ているだけだと見て、志織は安心した。

「おじいちゃん、ただいま」

返事はない。志織はその肩に触れて揺さぶった。

「おじいちゃん、お昼寝だったらお布団でー」

祖父の身体が崩れて、床に叩きつけられた。志織はびくりとする。慌てて起こそうとして、志織はそれがいつもの祖父ではないことに気づいた。彼は呼吸をしていなかった。志織はパニックになった。

急いで父と母に連絡して、志織は救急車を一人で呼ぶことになった。祖父は人間だから、昨日までは元気だったから病院に行けば助かるはず。それを信じていたが、父と母が駆け付ける間もなく、祖父の死亡が確認された。

志織は呆然自失で、現実を整理するのでやっとだった。両親の到着を病院で待たなければならなかったが、大人たちがなにか呼びかけてきてもまったく返事ができなかった。死というものを、理解したくなかった。受け入れたくなかった。

(霊もみんな、こういうものがあつたのかな)

ふと、そんな思考に行きついた。その瞬間、気分が透明になり、家で祖父を発見したときからずっと濁っていた視界がクリアになった。

何気なく顔を上げる。その先に、あの男がいた。ゆらゆらと揺れているが両の足で立っており、志織をじっと眺めていた。

「ごちそうさま」

たった一言だけ言い残し、男は消えた。志織は目を開いたまま、やってきた母に声をかけられるまで、ずっとその場所を見つめていた。いつの間にか、臭いと霧が病院のなかにも入り込んでいた。

両親が来てから、一気に慌ただしくなった。突然の家族の死に、父よりも母の方が動揺した。父は気丈に見えた。葬儀も不備なくしっかりと手配し、当日も忙しくしていた。

志織は泣いた。幼稚園児に戻ったように、激しく泣きじゃくった。近所の友人たちも来ては慰め、母は志織をしっかりと抱きしめた。友は最近の志織の変化を祖父の体調不良のせいだと思い、母は祖父の第一発見者となってしまったことにショックを受けているのだと考えていた。しかし、どちらも違った。

(あの人だ)

祖父の死に、あの男が絡んでいると志織は悟っていた。そして自分を責めた。きっと目をつけられたのは、あのとき自分が手を出してしまったからだ。なにもできないのに、できる振りをしようとしたからだ。そう思いながら、泣いた。

父だけは志織の涙の理由を理解していた。志織は父と二人きりになったときに、心情を吐き出した。

「お祖父ちゃん、私のせいだ。私のせいで、あの人がお祖父ちゃんを連れていったんだ」

父は志織の肩や背を叩いて、落ち着かせようとした。しかし、一度流れると、涙というものはなかなか止まらなかった。

「志織のせいじゃないよ」

「だってあんなに元気だった」

「元気でも、突然亡くなることもあるんだ」

父もさすがに自分の父親の死で疲れているようだった。心なしか声がかすれていた。けれども、志織はそんな父を慮る余裕もなく、ひたすら泣き続けた。

「どうしよう、またあの人が来たら、今度はお父さん？ お母さん？ それとも私がつれていかれる？ ぶたれる？ たくさん怒られる？」

父は志織の頬に触れる。

「そんなことさせないよ。絶対に、させない。志織とお母さんは、お父さんが守るよ」

どうやって？ 志織にはなにもできなかった。父は大人だから、志織にはできないこともできるのだろうか。そう問うても返事はなかった。

祖父の葬儀の後片付けも終わり、翌日からまた学校が始まる、そんな日だった。

「志織、柿、食べたかったな……」

父は縁側を見つめながら、いきなりそんなことを漏らした。庭には、志織が小学校入学するすこし前に植えた柿の木があった。柿は父の好物だ。

「お父さん、私が六年生にならないと実らないって言ってたよ」

まだ若い木を見ながら、志織は植えたときの状況を思い出す。志織が中学生になったあたりで美味しい実がなるはずだから、そのときは皆で一緒に食べるのだと息巻いていた。

父は穏やかな表情で、秋の日差しに照らされた枝を眺めた。

「そうだね。六年生の志織かあ。もうだいぶお姉さんになっているだろうね」

どこか遠い目をする父を見ると、どういうわけか不安になった。祖父みたいになくなってしまわないか。志織は思わず父の袖をつかんだ。父は志織の心情を察したように、彼女の髪の毛を優しく梳いた。

「志織にあげたいものがあるんだ」

父は奥の部屋にひっこむと、何かを手にして戻ってきた。その金属に陽光が差し込み、天井に跳ね返って美しい模様を作る。

父は志織の首に手をまわして、それを留めた。

「なあに、これ」

ネックレスだった。大きな飾りと小さな飾りがひとつずつ。志織はそれを指でいじる。

「特別なお守り。これがあればなにも怖くないよ。いざというときは志織の力になってくれる」

とっさに志織は父を見上げる。しかし、父の手が志織の頭に置かれて視界の一部がふさがれた。そっと伝わる温かさが、どこかくすぐったかった。

「怖くない？」

父にはすべてお見通しだった。ぽろぽろと志織は涙をこぼした。

「志織はもう心配しなくてもいいよ。大丈夫だから。それはね、お父さんが約束するよ」

父はいつものようにそう笑った。志織はただ頷いて、ネックレスを握るしかなかった。

その翌日から、志織はびくびくとしながら学校へ行った。首にかけたネックレスがすこし重かったが、それだけが心の支えだった。教師やクラスメートに見つからないようにするのは大変だったが、何も起こらず彼も姿を現さなかったので、憂鬱な気分は取り除かれつつあった。

その日から、父か母は必ず志織のそばにいてくれた。仕事で遅くなる日があっても、かならず戻ってきてくれた。志織は父母の外出が怖かった。帰ってくるかどうか気になって、落ち着かなかった。玄関の開く音がして、ただいまと呼びかける声が聞こえて、ようやく安心する。そんな日々が続いた。

しかしある日、いつものように授業を受けていると、いきなり職員室に呼び出された。母から電話だという。不思議に思って受話器に耳を当て、志織の世界が一気に冷えた。

「志織？ お父さんが急に倒れて――」

すぐに教師に病院に連れて行かれた。その玄関で待っていた母に連れられて入った白い部屋のベッドに、父が寝かされていた。顔色が白い以外は、いつもと何の変わりのない姿だった。

それからの記憶は飛び飛びだ。いつも朗らかな母が自分の足では立てないほど号泣していたことは鮮明に覚えている。そして、手続きがあるからと母が部屋を出て、志織が一人残されたことがあった。

なにが起こったのかなんて考えたくもなかった。父が死んだのだと大人は言った。嘘だと思った。動かなくても父は父で、死ぬなんてありえないと。けれども、父は目を覚まさず志織が触れてもその手は冷たかった。

（嘘だ、嘘だ。お父さんが死んだなんて、嘘に決まってる）

どうしてだろう。なにが大丈夫だったのだろう。なぜ心配しなくていいと父は言ったのだろう。志織は泣きじゃくった。祖父も死んで父もいなくなったら、母と二人きりだ。明日からどう生きればいいのかのさう。

志織が泣いていると、ふわりと温かい風が吹いた。はっと顔を上げると輪郭がぼやけた父の姿があった。志織はベッドの上の父と何度も見比べた。

（お父さん、本当に幽霊になっちゃったの……？）

父は答えるように微笑む。それならば父は本当に死んでしまったのだ。父の魂が現れたことよりも、父の死がよりいっそう確かなものになったことの悲しみが強かった。

「お父さん……」

父は微笑のまま、歩いて壁のなかに溶け込んでしまった。志織は慌ててそばの窓を開け、父の行方を確かめる。

夜の庭に、ひとつの影がはっきりと浮かび上がっていた。それは、父ではなかった。志織は目を見開いた。あの男だ。

男は確かにこちらを見ていた。そして、にやりと笑って手を広げて、そのまま消えた。

志織は窓から身を隠すようにしゃがみ込んだ。心臓が痛い。呼吸数が増える。頭が痛い。喉がおかしくなりそうだった。

あいつだ。志織は直感でそう思った。あいつがお父さんまで殺した。

唇を噛みしめる。男も許せないし、自分も許せなかった。自分になにができたというのだろうか。霊が見えても、それ以上のことなんてしたことはなかったのに。それなのに、中途半端に手をさしのべて、逃げた。志織は自分が醜く思えて仕方なく、父や祖父への申し訳なさに吐きそうになった。

めまいでそのまま床に倒れる。視界が霞んだ。このまま幽霊なんて見えなくなってしまえばいいのに。そう何度も願った。

しかし、現実はその甘くなく、目を覚ました志織には病院内をうろつく霊がはっきりと見えた。その朝の絶望感は忘れられない。

私のせいだ、いや、私は悪くない。志織はふたつの考えに挟まれ、窒息しそうだった。もしも自分のせいだったなら、それを認めたなら、大好きな父と祖父を間接的に死なせたということに

なる。仮にそうだと考えただけで狂いそうになった。

それ以来、男の霊は自宅には現れなかった。父の葬儀後、志織と母は別の土地に移った。それから霊が見えることには変わりがなかったが、彼が追いかけてくることはなく、志織も彼を目撃することはなかった。

それから、志織は二度と霊に関わるまいと決めた。こんな思いをするくらいなら、見えないほうがずっといい。そう思った。

回想しているうちに、志織はすっかり寝入ってしまった。またあの夢を見る。あの男が、恨めしそうにこちらを見ている。みさきに出会ってからは見るものがほとんどなかったのに。

「助けて……」

男が口を開く。志織は手を伸ばした。いままでは腕が動かなかったはずなのに、その晩はなぜか動いた。とっさにみさきの顔が浮かんだ。

志織は一步ずつ近寄りながら、その手をつかもうとした。しかし、あとすこしのところで見えない壁のようなものに阻まれてしまう。

男は志織を蔑んだ目で見つめていた。

「やっぱりお前はそうだ」

そこで目を覚ます。朝日が眩しかった。口のなかが渴いてからからだった。

枕もとにはネックレスが無造作に置かれていた。志織は溜め息をつきながら、それを身につけてベッドを下りた。

仕事当日。待ちあわせの駅から一度乗り換えを経て、合計一時間弱で落野駅に到着した。志織が住んでいたころとは駅舎も様変わりしていた。記憶と一致しない現実には、志織は少々寂しさを感じてしまった。

改札を出たところにあるロータリーで、みさきは立ち止まった。

「なんか、ちょっと落ちつかないね？」

控えめな表現だった。屋外で昼間、青空も見えている。ごちゃついた印象はなく、遠くには豊かな緑も見えた。それなのに空気が悪い。不純物だらけのようだった。うろついている霊もおびただしい数だった。そして、異様な臭いが懐かしかった。厳密に言えば、それらは志織が物心ついたときから慣れ親しんできたものではないが、彼女にとっては忘れられないものであった。

タクシーに乗り込み、二人は市街地からすこし外れたところにある一軒の屋敷を目指した。その邸宅の主は真嶋という。元は落野市一帯の大地主で、いまでも落野の住民への影響力をもっている。運転手にも「真嶋の家へ」と言えば通じてしまうくらいに有名な家であった。

志織が住んでいたのは真嶋家からさほど離れていない場所だ。もちろん、真嶋の存在については知っている。

「何個か上の学年に真嶋さんちの子がいたけど、昔から落野に住んでいたところの子はみんな気を使って接してたよ」

落野の一部は新興住宅地となって、余所からの人間が続々と入ってきていた。そのため、代々の落野住民である家の子と新しくやってきた家の子で、なんとなくグループが分けられていた。志織は後者だったので、あまり真嶋家とは接点がなかった。実際に遊ぶのは近所の家の子ども同士であったことも関係しているかもしれない。

戦前ならともかく、現在は真嶋家の怒りに触れたからといって、即座に追い出されることはない。それでもなんとなく配慮されるし、地域の顔役も引き受ける。そういう立ち位置の家だった。

真嶋家の門扉はそうそうお目にかかれなくらいに立派だ。敷地も広大で、みさきの家よりもさらに規模が大きかった。志織が住んでいたころと比べると変化は少ないが、塀が新しくなったような気がする。

車を降りた二人は、真嶋邸を見上げて生唾を飲み込む。臭いが強い。うっすらと屋敷を赤い霽が漂っている。視線を交わし、みさきが覚悟を決めたような顔でチャイムを鳴らした。

使用人に出迎えられ、応接間に通される。意外にも家のなかの空気は外に比べると濁ってはいなかった。いかにも富裕層らしい調度品の数々に、志織はびくびくしてしまう。落野に住んでいたときすらこの家にあがることはなかったのに、この地を離れてからこうして訪れるなんて夢にも思わなかった。

しばらくして、二人の人間がやってきた。中年の男性と二十代と思われる女性。二人は並んで座る。

「お越しいただき、ありがとうございます。私が当主の真嶋要介です。こちらは娘の茉莉香」

男性が頭を下げ、一つ遅れて女性が頭を下げる。志織は茉莉香という名を聞いて、彼女がさきほどみさきに話していた真嶋家の子だと思い当たった。見覚えがある。茉莉香は無愛想ではあったが、すらりと背の高い、モデルのような美女へと成長していた。ただ、雰囲気は冷たい。ホリブルキャッスルで対峙した女性の霊にどこか似ている。

要介は、真嶋家の代々の歴史を簡単に語りはじめた。茉莉香はそんな父の話の不機嫌そうに聞き流していた。

「お二人は、落野は初めてでしょうか？」

そこで、おそろおそろ志織が挙手する。

「あ、私のほうは以前住んでいました。なので、土地勘は若干あります」

嬉しそうな顔をした要介の声が大きくなる。

「おや、それは奇遇ですね。どちらですか？」

「秋里です」

茉莉香は相変わらずの無表情だったが、朗らかそうだった要介も明らかに肩すかしでもくらったような様子だった。秋里は新興住宅地だ。つまり、彼らにとっては余所者の住まう土地である。

気まづくなって、志織は慌てて会話をつなげる。

「小学校の途中で転校してしまいましたけど」

「ああ、そうですか……」

要介はさっそく興味を失った様子だった。気まづい沈黙が流れる。茉莉香が場をつなぐ気配もなく、三人の表情を窺ったみさきが口を開く。

「あの、ご依頼内容について確認してもよろしいですか？」

「ええ」

要介は茉莉香に、件のものを持ってくるように言いつけた。茉莉香は返事もせず立ち上がり、部屋をあとにする。

みさきと志織が無言でその優美な後ろ姿を見送っていると、要介はげんなりとしたように溜め息をもらした。

「すみませんね、愛想がなくて。我が家で唯一の女の子だからといって甘やかしてしましまして」

お恥ずかしい、と要介は苦笑いを浮かべる。つられて、志織たちも同じような表情になる。

茉莉香はなかなか戻ってこなかった。しびれを切らした要介が使用人に様子を見に行かせ、ようやく彼女は布の包みを持って戻ってきた。

茉莉香は射るように二人に視線を落とす。霊相手ではないのに、思わず二人ともびくつき固まってしまった。

「お待たせいたしました」

茉莉香の声はガラスに例えられるような響きだった。そして、白魚のような手で、ところどころが黄ばんでしまった布をすりと落とす。現れたのは、むきだしの鏡だった。現代風のもので

はない。博物館や教科書でしかお目にかかれなような形だった。志織もみさきも無意識に見入ってしまったが、茉莉香の細い指が鏡をひっくり返すと息をのんだ。

表面にいくつもの傷があった。針かなにかで引っかいたり突き刺したりしたようで、蜘蛛の巣のような模様が広がっている。部分によっては欠けている。その隙間から、ねっとりとなんかが漏れ出ているように見えた。臭気が強い。この町全体にしみこんでしまった臭いが濃縮されて、その鏡を覆っていた。

「これはね、私の親類が借金のかたに手に入れたものです」

茉莉香に手渡されながら、要介はいまいましように鏡を見る。彼の顔が乱れて映される。

「最初の持ち主は明治時代に没落した家だったらしいですけど、現在は行方がわからなくなっていると聞いています。それで、親類も恐慌で大損しましてね、金を貸してほしいと私の祖父のもとにやってきたときについでに持ってきたものです」

これだけ古いと確かに学者が喜ぶような価値はあるかもしれないが、志織にはその割れた鏡がわざわざ借金のかたになるほどのものには思えなかった。

「あの、それは最初からそうになっていたんですか？」

遠慮がちに志織が尋ねると、要介は力なく首を横に振る。茉莉香は細く息を吐きながらそっぽを向いた。

「いいえ。つい最近、十年前ほどまでは綺麗なものでした。しかし、ずっと蔵にしまいこんでおりまして、最近蔵の整理をしたときにわかったんです」

ただ骨董品が割れただけだったら、そのまま処分すればよかった。しかし、そうはできない事情があった。

これは元の家が自分たちの守り神として崇めていたものだった。要介の親類に預けたときも、差し出してきた者はこう言ったとのことだ。これはありがたい神様なのだから大事に扱うように。そうすればきっと富が得られ、家は栄えるだろう。そして、もしも粗末にしたのなら、逆に祟りが起きるとも。

「そんなに大事なものなら、どうしてこれを差し出したのでしょうか？」

何気ない志織の疑問に、要介は首を傾げる。

「おそらく、もうこれしか残っていなかったのでしょうか。家財はすべて処分して、それでもまだ金が足りないということでしたから」

最後の最後で手放した、守り神の鏡。その情報を得ると薄気味の悪さが増した。

「最も、親類は話半分に聞いていて、信じておりませんでした。金の無心ついでに、そういう曰くつきで面白いからと置いていったのです。私も……はじめはまったく信じておりませんでした」

「では、なぜ今回はこれを……」

みさきの問いに、ぴくりと反応したのは茉莉香だった。それを志織は見逃さなかった。しかし、みさきも要介も気づかず、話を進める。

「実はここ十年間、露野は人口の減少が止まりません。死者が相次ぐし、事故数も不自然に跳ね上がって、別に転勤族でもないのに短期間で去っていく家族も増えました。そうすると、

ねえ……」

要介は言葉を濁す。つまりは、真嶋をはじめとする古くからの住民は新参者を好まないが、いまの時代では彼らがいなくて町が寂れて空洞になる。それも身勝手なように志織には思えた。それが、自分が新参者側にいたからかどうかはわからないが。

「まだ表だって騒がれてはいませんが、それでも妙な記者にでも目をつけられたら、それこそこの町が終わってしまいます」

「それは、鏡が原因だと？」

問われた要介は答えに詰まる。そして、やや薄くなった頭を指で押さえながら返事をした。「使用人がね、言うんですよ。夕方になると蔵のあたりに人影が見えるって。これもずっとしまえばなしだったことからもおわかりでしょうが、あの蔵は価値のないものを入れているだけで、家の者が出入りすることもほとんどありません。それもちょうど十年前からなんです」

要介の表情がひきつる。偶然にしては妙に一致しているでしょう、と。そして彼は志織に向き直る。

「えーっと、そちらは渡辺さん？ あなたはいつ外へ移りましたか？」

志織は首が締まるような感覚になった。喉が乾く。失礼とは思いつつ慌ててコーヒーを飲み込んでも、まったく沁み込んでいかない。

茉莉香の目が志織に向く。声だけでなく、瞳もガラスのようだった。みさきが心配そうにこちらを見てくるので、志織は一呼吸おいて気持ちを落ち着かせてから、ゆっくりと答えた。

「私も、十年前です」

要介は言葉を選びながら質問を続ける。

「親御さんの都合ですか？」

「……そうとも言えます。祖父と父が相次いで亡くなって、母と私だけになりました」

父は、自分が死んだら家を処分して別のところに住むようにと遺言を残していた。さいわい、母には資格があってどこでも働くことができたから、思い切って県外に引っ越すことになった。

そう告げると、要介の顔が険しくなる。もしも鏡が、いま目の前にいる少女の家族の死にも関係しているならと思うのが恐ろしいらしい。

志織はこの場で言うかどうか、迷っていたことがあった。しんと静まりかえる応接間の居心地は悪い。それに耐えきれず、つい漏らしてしまった。

「祖父と父が死んだのは、私のせいかもしれないと、そう思っていました」

要介の呼吸が止まる。三者の視線が志織に集中した。

「しいちゃん……？」

みさきは弱々しく首を傾げた。

志織は胸元に手をやった。シャツごしに感じる、硬質な感触。

「私が……あれと出会った……そのせいだと」

「あれとは？」

遠慮がちに尋ねる要介と、人形のような顔の茉莉香を交互に見ながら、志織は口を開き、過去に起こったことをかいつまんで説明する。茉莉香はじっと志織を見つめ、要介は俯いていた。み

さきは表情を硬くして、無言で話を聞いていた。

「その、男というのはどんなものですか？」

志織の長い話が終わって最初に口を開いたのは、青い顔をした要介だった。

「髪は、肩くらいまでです。赤い着物を着ていて、顔は……面長で目が細くて……」

最後に姿を見てから約十年。それでも、思い出すのは容易だった。

「見たら絶対にわかります。それだけは自信を持って」

志織はまっすぐ、真嶋親子を見つめた。その表情は対照的で、要介は動揺が強まり、茉莉香はマネキンが代わりに座っているのではないかと思わせるほどに静かだった。志織と目が合っても、わずかに瞬きをするのみで、瞳すらほとんど動きがない。

「蔵に出るのも男だと聞いています。人相まではわかりませんが。ではまず夕方の蔵をお願いいたします。それまでは……ご自由になさっていて結構です。お二人のお部屋は用意しておりますので。町を見て回りますか？」

志織たちは顔を見合わせる。

「すこし休ませていただいてからでもいいでしょうか？」

答えたのはみさきだった。要介はひとまず話を打ち切って、使用人に二人を案内させた。

「みさき、休む？ 気持ち悪い？」

通された部屋で二人きりになると、志織はみさきの顔を覗き込んだ。ここは予想以上に霊が多い。昼間なのにこんなに見えるのは珍しいことだった。みさきにはなかなか厳しい場所のはずだった。

「そう聞きたいのは私のほうだよ」

みさきは鞆のなかから鏡を取り出して、志織に突きつける。そこに映る志織の顔は、紙のように白かった。志織が息をのむと、みさきは溜め息をついた。

「しいちゃん、私、しいちゃんに無理はしてほしくないよ」

動揺を隠すように、志織はぶんぶんとう首を振った。

「大丈夫、大丈夫だよ」

ここでみさきに心配かけてしまったら、それこそ自分がいる意味などない。志織は何度も手を開いては閉じて、気持ちを落ち着かせる。

呼吸が穏やかになって顔を上げると、ほっとしたみさきの顔があった。それを見て、志織は彼女に対して申し訳なく思った。

「いつもどおりで行こう」

みさきはにこりと笑った。

「うん、いつもどおりね」

二人はそれぞれのベッドに座り、向かい合わせになる。

「みさきは、大丈夫？」

真嶋邸のなかは不思議となにもいないように見えるが、外にはホリブルキャッスルを思い出すほど大量の霊がうろついている。志織でも気後れしてしまうくらいだから、みさきにはもっと辛いのではないかと。みさきは、脱力ぎみに笑った。

「……大丈夫じゃない。例によって……」

みさきは脇に寝かせていた霧風を握りしめて床に立てる。

「でも、仕事だから」

みさきは、志織の分まで自分が気を張り詰めていなければと感じていた。それが志織にも伝わってくるから、志織は彼女に申し訳なく思っていた。

ぎり、と志織は拳のなかで親指の爪を立てた。その痛みで、精神を元の状態に戻す。

二人は地図を広げる。露野はそこそこ栄えているが、面積は周辺の都市に比べるとあまり広くはない。車を持たないのは厳しいが、そこは場所をピックアップするしかない。

志織は無意識に秋里の地名を探していた。同じ校区だったこともあり、真嶋邸からたどればすぐに見つけられた。胸骨のあたりがちりちりとした。祖父、父、そして近所に住んでいた人々の顔が思い浮かぶ。

(そういえば、雅哉くん、どうしてるだろう)

彼はまだ熱が続き、結局志織が越すまで入院となってしまった。仲が良かったのに、後にした会話で冷たくしてしまい、プリントを届けるのもいやだと思うようになってしまった。自分は本当に薄情者だと志織は頭を抱えた。仕事が終わったら会いに行こう。会えなくても、様子を聞けたらいい。

志織は再び、地図上に置いていた指を真嶋邸に戻した。茉莉香の顔を思い出す。先ほどの場では明言しなかったが、あのとき、男に遭遇する直前に志織が目撃した子どもは茉莉香だった。親しくないとはいえ、学校でも目立っていた彼女を見間違えるはずはなかった。

男と鏡の関係を考える。鏡を見ても、要介の話を聞いても、あの男と鏡に関係があると考えるのが自然だ。しかし、なぜ茉莉香があのタイミングであそこにいたのか。それがわからなかった。

茉莉香は極力なにも話そうとしなかった。志織のおぼろげな記憶では、昔からそういう人だったと思う。真嶋家の人間で、子どもたちが常に囲んでいるとはいえ、けして活発な印象は受けなかった。もしも真嶋ではなく別の家の子として生まれていたら、きっと教室の片隅でひっそりと読書でもしていそうだった。

もっと話がしたい。不運なことに、茉莉香はみさきたちが部屋に通されるのと同時に外出してしまった。とりあえずは、夕方を待って、あの男と真嶋家の因果関係を確かめることを優先する。

「ね、みさき。神様と霊と物の怪は違う？」

志織は要介の話を思い返す。男が鏡に宿っていたものだとすれば、すなわち神だということになる。確かに、男は他の霊とは違って見えた。しかし、志織はそれが相手の性質の違いなのかはよくわからなかった。他人には見えないものとしてまとめてしまう。

「うーん、そうだな。もちろん違うけど、やっぱりあっちの人って共通する部分はあるよね。それに、結局境目ってわからないんだよ。いきなり変化しちゃうときもあるし、霊だって場合によって悪霊にもなるし、そうでもなくなったりするし」

言葉が止まる。みさきはベッドに寝転んだ。ふかふかとしていて心地よい感触だ。

「霊よりも神様のほうが強いよね……？」

志織の問いかけに、みさきは小さく首肯した。

「もちろん。ただね、現在の持ち主である真嶋さんたちがあんな感じでしょ。そういう場合って

、神様も力が弱くなるんだよ」

みさきは霧風を眺める。霊なら問題ない。対峙するのは怖いけれども普段どおり本体を切れば解決してしまう。しかし、向こうが神となると不安だった。相手にしたこともほとんどないし、まだ霊能者としては未熟なところがあるみさきが立ち向かうとなると、いままでになく難しい仕事になるかもしれない。

「単純に悪霊なら、すぐに片がつくんだけど」

みさきは細く息を吐く。

「悪霊、か……。私のところに来る依頼ってたいがいこういうのばかりだなー」

そういえば、と志織も過去の事件を思い返した。誰かしらに危害を加えるものばかりだ。まあ、出なければそれぞれの客も依頼などしてこないだろうが。

「霧風が理由なんだけどね。説得して自分の力で成仏する手伝いをするんじゃないで、問答無用で消滅させたいような相手が主に私のところに回ってくるの」

志織も自分のベッドに腹ばいになる。そして、疑問をぶつける。

「もしかして、そういう説得で成仏専門の人もいる……？」

「うん。でも、ほとんど私とはかち合わないよ。お互い真逆だからね。それに、あっちは霧風みたいなものを嫌うこともあるし」

そういえば、結局志織はみさき以外の霊能者を見たことがなかった。なんとなく興味をそそられる。切るだけが除霊ではないのだと、いまさら気づいた。

「私の力不足もあるけどね。私はこんなんだし……」

いまのみさきでは、ろくな説得もできやしない。相手の背景を知って心苦しくなっても、現在のやりかたしか彼女には選択肢がなかった。

「は一あっ、恨みとか悪霊とか事故とかじゃなくてさ、幸せな感じの案件って来ないかな」

「えー、そういうのって存在するの？」

みさきは一気に振り向く。

「ほら、座敷童子とか！ そうだよそうだよ、座敷童子相手だったら全然怖くないよっ。搜索とかじゃんじゃん引き受けちゃうよ」

嬉々と依頼を引き受けているみさきの姿が、どうしても想像できない志織であった。そんな話をしていると、だんだんと心がほぐれてくる。普段の二人に戻っていく。そういう空気にしてくれたみさきに感謝しなければならなかった。

日没まで時間があつた。まずは、真嶋邸周辺の探索をすることにした。

外に出ると、志織もみさきもそれぞれ緊張感が走る。霊の数が多くて泣きそうになるみさき、かつて住んでいた場所を通ることに怯える志織。なんとなく二人の物理的距離が縮まる。お互いに顔を見合せて頷いた。

「うううううう、しいちゃんには悪いけど、この町住みたくなあい」

このときばかりはなぜか安心する、みさきの愚痴だった。どこもかしこも霊だらけだ。弱いものばかりだが、それでもみさきには辛いのだ。

「結構仕事やってるよね。それでもダメだとね……」

「いや、ね。私もいい加減慣れようとしたんだよ？」

ホラー映画療法を勝士に提案されたが、初めの十分でもう限界だったとのことだ。その話を聞いて、根本的になにか間違っているような気がした志織であった。

話しつつ怯えつつで、歩いているうちに秋里へ到着した。ここもちらほらと変わっていたが、道など基本的な部分はそのままだった。

懐かしかった。家族でこの道を数え切れないほど歩いた。祖父と並んで、母と手をつないで、父とおしゃべりをして。もうそんな一時は二度と訪れない。わかっているはずなのに、あらためてこの場所に立つと切なさにおそわれる。

「しいちゃん、どう？」

みさきが言いづらそうに尋ねてきた。彼女の目がぎょろぎょろとしている。その理由は、志織にもすぐにわかった。

「……ない」

かつてこの土地は、他のどこよりもあの男の気配に包まれていた。しかし、いまとなってはむしろ他の場所のほうが強い。真嶋邸周辺に比べたら、空気が綺麗だと言ってもよいくらいだった。それでも、元の自分の家に立ち寄る勇氣はないのだが。

「話に聞いてたのと、ちょっと違うよね？」

「うん……移動したのかも」

もう十年だ。その間、志織たちの前には現れなかったが、それが別の土地に行けない理由とするには少し弱かった。

気配を探れるか。志織とみさきは同時に、気になる方角を指した――それは同じ方向だった。

「行こう」

珍しく率先して動くみさきだった。彼女なりにまだ志織に気を使っている。歩き出したみさきを、志織が引き止めた。

「待って」

志織は自分の家に面したものではないほうの通りをたどる。

「みさき、私、ここであの人に会ったの」

もちろん、そこには誰もいなかった。秋里自体霊の存在が薄く、他の霊もまばらだった。

志織は視線をめぐらせ、一軒の家に向かってその表札を見る。それは、記憶していたものとまったく違った名前だった。

「あれ？」

「し、しいちゃん？ どした？」

志織はまじまじと表札と玄関を見比べる。ここは雅哉の家だったはずだ。しかし、別の家が入っているようだった。

(引っ越しちゃったのかな……)

志織の心が苦い色に染まる。後悔がどんどん増えていく。それを自分の頬を軽くはたくことで、いま後悔しないようにする誓いとした。

「なんでもない。みさき、行こうか――」

振り返ると、周囲を見渡していたみさきが思わず霧風を落としていた。志織は思わず構えたが、そこに霊はいない。秋里の住人と思われる女性が、見慣れぬ少女たちを訝しむように眺めながら通りすぎて行った。

「ちょっと、みさき？ どうしたの」

「しいちゃん、いまの人、見て」

小声で囁かれ、志織はわけもわからず女性を注視する。この町の住人は濃度に個人差があるが赤い靄を身にまとっている者が目立つ。彼女も例にもれず、周囲が赤い。そして、臭いがする。そんな通行人は彼女以外に何人も見かけたが、他人とその女性で決定的な違いがあった。気配が薄い。平時の人間の気配が円だとすると、その一角が欠けているように見えた。

「魂がちぎられてる」

みさきはそう表現した。普通の霊は人間を害することがあっても、魂の質量や形を変えることはできない。

「あの人、たぶんもうすぐ死んじゃう……」

「え？」

みさきは苦々しい顔をした。

「魂が何度か……その……食べられているというのがいいのかもしれない」

志織は愕然とした。女性はそのまま行ってしまふ。靄と臭いが空気中に残された。

「それって、あの人のおしわざってこと？」

みさきは明確な返答を避けた。しかし、その表情は暗かった。

「早くどうにかしなきゃね……この町、いままで以上に相性悪いかも」

その後、二人は感じたままに歩いた――途中、みさきが何度も幽霊に叫びそうになっては志織がその口をふさぐということを繰り返しながら。

不思議なことに、気配の位置はいつのまにか変わっていた。もうここまでくれば見つかるかもしれないと思うところで、こつぜんとまったく別のところに気配が移動する。ただ歩き回って体力を消耗するだけだった。

夕方になれば蔵で待機しなければならない。二人は体力温存も考えて、真嶋邸に戻った。

自分たちにあてがわれた部屋に戻り、志織は札の確認をする。これだったら志織程度の人間でも武器として扱えるが、完璧には使いこなせない。あくまでも補助の品に留まる。

これで何度目になるか数えるのもわずらわしい、歯がゆさ。本当に志織には能力がなかった。それでも、自分にできることをやるだけだった。

待ち望んでいた夕方は、思っていたよりも早くやってきた。それで志織は秋を実感していた。桐の木や植え込みの影に隠れて息を潜める。みさきよりも自分が震えていた。鏡はとっくに蔵の棚に戻している。罨を張るように蔵に札を貼り、待ち伏せる。

「き、来たあああ」

間抜けな声でみさきが言う。扉をすり抜けた影があった。志織は目を見開いた。瀕死のごとき弱さはなかったが、確かにあの男だった。生唾を飲み込む。

男はまっすぐに蔵へと向かって行った。しかし、そこで立ち止まる。空気がぴりぴりとしはじめた。

男が振り向く。うつろな目だった。二人は固まり、先にみさきが飛び出し、志織がそれに続いた。男はにやりと笑う。その視線はまっすぐ志織に向いていた。とっさにみさきが志織に重なるように前に立つ。

風が吹く。志織は初めて彼と出会った日を思い出していた。必死にすがってきたあのときの面影はもうない。悲痛な苦しきも強くない。あるのは攻撃性だけだ。敵意を直接向けられ、吐き気がした。

男の姿が揺らぐ。瞬きをした次の瞬間、すぐそこまで迫っていた。

「しし、しいちゃん、下がって！」

言いながらみさきは霧風を前に出した。金属を弾くような音。霧風ごしに、男の真っ赤な顔がすぐ近くに見える。

「ひいいい！」

みさきはそのまま向きを変えていなす。男はそのまま制止する。

「こ、来ないでえ」

生まれて間もない小鹿のように、がくがくとみさきは震えた。志織はそんな彼女の背中に手を当てて支える。

男が一步踏み出す。みさきが一步下がり、つられて志織も下がる。

「は、ははは、ははははは！」

彼は歯を剥いて、急に笑いはじめた。明瞭な声だった。みさきがびくりとする。男は腹を抱えるように身を折り、肩を震わせた。その瞬間、一気に炎が噴き出して、志織たちに降り注いだ。見た目に反して熱は感じなかったが、思わず目を閉じる――閉じたはずだった。

桐の木のすぐそば、急ごしらえのような粗末な小屋に連行される彼が見えた。即席の祭壇には、鏡が光っていた。周りを取り囲む人々が刀や鉈を構える。男が胸を切りつけられた瞬間、志織

もまた胸に熱が走るのを感じた。見ても傷はついていない。それなのに、じわじわとくる痛みが消えない。

腕、肩、脚、背……人々は男の身体を刻んでいく。床に血が広がった。彼が痙攣しながらも手を伸ばす。

「どうかお助けください」

返事の代わりに手の甲を切られ、男は悲鳴をあげる。

「お許しください、なにとぞ、なにとぞ」

その場にいた全員が、彼を冷たい目で見下ろしていた。志織はぞっとした。

「もう良いでしょう。出ましょう」

男を残して、彼らは去っていった。

「お待ちを。お願いします、待って、助けて」

そのうちの何人かが立ち止まり、ちらりと男を見た。男は必死にすがろうと目で訴える。しかし、その思いは届かなかった。言葉のひとつもかけられず出て行き、扉は無慈悲に閉められた。彼は呻いた。男は捕縛されていなかったが、もう這う気力すらもなかった。その姿は最初に会ったときのままだった。彼の内にわいた絶望が大波のように襲ってきて、溺れそうになる。

煙が立ち込めた。小屋の隅に炎が上がる。彼は叫んだ。叫ぼうとしたが、もう声もろくに出せなかった。

「お助けください」

絞るような声だった。

「助けてください」

何度も叫んで呼ぶ。けれど、応える者はいなかった。小屋に煙が充満し、床にも壁にも屋根にも炎が絡む。油の臭いと焦げる臭いが混ざる。そうしてようやく、志織は全身に高い熱を感じて、悲鳴をあげた。

小屋は燃え続けた。全てが、男の身体さえも灰になるまで。たったひとつ残ったのは、炎に包まれたにも関わらず美しいままの、あの鏡だった。鏡の鏡面に引き込まれる。男の魂がそのなかにあった。

気がつくとも男の姿はなく、目の前にあるのは蔵だけだった。二人は顔を見合わせる。志織だけではなく、みさきも真っ青な顔だった。

みさきは息を吐きながら芝生にへたりこんだ。その腕には、切りつけたような傷があった。

「ちょ、みさき？ どうしたの？」

跪こうとした志織は、ちくりとした痛みでバランスを崩した。みさきほど大きなものではないが、手の甲が裂けていた。

「……しいちゃんも見たの？」

志織の傷を見ながら、みさきは掠れ声で尋ねた。

「え？」

「あの人が切られて、焼かれたの……」

苦々しく頷くと、みさきはこめかみの部分をおさえた。

「みさき？ なにが起きたかまったくわからないよ……」

「霊の背景って見たことない？ まさにいまのだよ」

霊と対峙したとき、みさきがその霊の過去になにがあったかを察知することはあっても、志織が同様に見ることはほとんどなかった。志織は呆然とした。いつもはみさきが過去を見て、それを志織に説明する。自分がさきほど目にしたものがそれだとは思えなかった。

周辺を見渡す限り、男の気配はどこにもなかった。靄も薄くなっている。志織は、その赤さが炎のようで気持ち悪く思った。

お互いを引っ張りあうようにして、二人は屋敷に戻った。使用人から話を聞くと、要介も茉莉香も不在だった。茉莉香はまだ帰ってきておらず、要介は仕事で急に呼び出されたという。報告は翌日で結構とのことだった。

二人の食事の支度はもう出来ていたが、食欲はなかった。残すわけにもいかずどうにか口に入れたが、胃が落ち着かず違和感ばかりが残った。

「しいちゃん、同じものを見たということ前提で言うね」

気まずい沈黙を打ち破るように、みさきは口を開いた。

「小屋のすぐそばにね、桐の木があったでしょ」

「うん」

「多分あれは、この敷地の出来事だと思うよ。さっきの桐の木じゃないかなって思うんだけど」

志織は目を見開く。背筋をなにかが撫でていく。

「でも、あの男の人が、神様なんだよね？ どうしてこの場所？ 元の家の人のところでもなくて？」

志織は混乱する。なにがなんだかさっぱりわからなかった。みさきは絨毯を見つめながらじっと考え込んでいた。自分に比べたら落ち着いているその態度は、過去視に対する慣れなのか、それとも自分には見えなかったものも彼女には見えたのか、志織はまったく窺えなかった。

「今夜は遅いらしいけど、明日、少なくとも要介さんは午前中は家にいるって。そのときまでにこちらで話しあいたいこと、聞きたいことをまとめよう」

みさきはノートとペンを取り出す。志織は彼女の綴る字を見つめたが、気持ちは安定しなかった。

「助けて」

まだどこかで、彼が訴えているような気がした。

平時であれば、高級なベッドでの睡眠はさぞかし快適だっただろう。しかし、こんな状況で満足に眠ることはできなかった。二人はぼんやりとした頭で起床し、簡単に身支度を整えた。

客間を出て階段を下りると、前日と同様、要介と茉莉香が並んでいた。彼らはもう食事を済ませているらしかった。志織は真嶋親子をちらりと観察する。あまり親子らしさを感じない。自分と父は仲が良かったから、なおさら志織の目には不思議に映った。それは、要介が原因ではなく、茉莉香が他人に興味がないような印象を受けた。

紅茶を飲みながら、みさきが簡単に昨日の報告をする。収穫はあまりなかったが、男との接触は行ったと。要介は冷や汗をかきながら、それを聞いていた。

「それは、渡辺さんが十年前に出会った男で間違いないのでしょうか」

志織が頷くのを見て、要介は唇を噛んだ。ふと志織が視線を彼からそらすと、茉莉香と目が合う。濃い茶色の瞳に、志織の姿が映っている。そして彼女はつまらなそうに、時間が経って濃くなったポットの茶をカップに注ぎ、ミルクを入れた。何度も何度もかき混ぜる。

「私も伺っていいですか、真嶋さん」

志織の言葉に、要介はぴくりと肩を動かす。唾を飲みこむ音が聞こえた。

「その鏡には、なにが宿っていたのですか？ 本当に神様なんですか？」

「ど、どうしてそんなことを聞くんです」

「恐らく、あれはそう古い人ではありませんね。多く見積もっても、百年くらい前の人です……落野の人」

みさきの言葉に、要介は卓に肘をつけたまま項垂れた。みさきはテーブルに置かれた鏡を見やり、前歯をかちかちと鳴らした。

「私も、詳しくは聞いていないんです。ただ、守り神と」

「もしも知っていることがあれば、どんな小さなことでも構いません。それが解決の鍵になります」

みさきが念を押すように言い、要介は自分の娘よりも年若い少女たちに圧された。彼は茉莉香を見るけれども、彼女は父がどうなろうと無関心と言いたいような態度だった。むしろ、少し笑っていた。志織たちの二人の視線に耐えきれず、要介は大きな溜め息をついた。

「……元の家には、独特の風習があったと聞きます。決まった年に、鏡へ生け贄を捧げるというのです」

生け贄。血なまぐさい言葉に、二人は同時に眉をひそめた。そして、昨日見た光景を思い出す。

「六十年に一度。生け贄を捧げれば、その後六十年の安泰が確約されます。生け贄が鏡に宿った守り神になるというのです」

要介は立ち上がるような勢いでまくし立てる。

「けれども、私は、そんなことしていません！ 現に、これも蔵に入れてずっと――」

ほとんど叫びに近い声になったところで、要介は我に返った。決まりが悪そうに座り直す。  
「すみません、先ほどお二人に嘘をつこうとしました。あれが何者なのかわかっております。それに、元の家が没落した原因も」

「生け贄を差し出すのを……拒否した？」

志織の言葉に、要介は抵抗を見せつつ首肯した。

「とある代の当主は、自分の家の風習を嫌っておりました。それで、六十年に一度の儀式をしなかったのです。それから次の六十年を迎える前に、時代の波に乗れずにその家は傾いてしまったそうです」

「真嶋さんの親戚の方は？」

「あまり評判のいい男ではなかったと聞いております。没落してもなお生け贄を拒んだ例の家は、その男に売ること、金をもらうだけでなく厄介払いできると思ったようです。そのときに、これがどういうものか一応は伝えたいのですが、彼は信用しませんでした。その後起こった恐慌でも、祟りだと思わず偶然だと思っていたようです。それで、私の祖父に金の無心ついでに面白がって持ってきたようです」

その後、要介は口ごもる。くすりと笑い声が漏れた。その主は茉莉香であった。

「それで、お父様？ 二人にも続きを話したほうがいいんじゃない？」

初めて彼女が感情を見せた。面白がっている。綺麗な微笑みなのに、志織もみさきも寒気がした。

要介はやけになったように語る。

「親類も、渡す相手は選んだようですね。祖父は鏡の由緒に興味を持ちました。そして、ちょうど生け贄を捧げるべき次の六十年目はそんなに遠くなかった。その年を迎えた祖父は一一教えのとおり生け贄を捧げました。いまから七十年ほど前の話です」

さっと血の気が引いていくのを志織は感じた。

「真嶋も世間の例に漏れず、戦争でさまざまなものを失いましたが、その後はむしろ戦前以上の財産を獲得いたしました。事業がうまくいったのもあの鏡のおかげ。祖父は陰でそう言っていました」

「生け贄は……」

「集落の、真嶋に反抗的だった若者と聞いています」

要介は一度席を立ち、どこからか一枚の写真を持ってきた。そこに写っていたのは、まちがいなくあの男だった。

「彼が生きた証はすべて処分されたはずですが、これは、たまたま残っていたものを、私がこっそり貰い受けました」

生きていたころの彼は、生氣にあふれた笑顔を浮かべていた。志織は心苦しさを感じた。

「そうして、我が家は儀式を成功させたのですが、十年前にまたその年が訪れました」

要介は、どうして自分の代なのかと呪った。実際彼の父は、自分のときでなくてよかったと漏らしたことがあるらしい。

「私は、悩んだ末、儀式を行いませんでした。そして、手放すのもそれはそれで怖かった。だか

ら蔵の奥に隠したのです。そうしたら、このたった十年で――」

彼はそれ以上なにも言えなかった。テーブルに突っ伏すようにした要介に、くすくすと笑う声がかぶさる。要介も志織もみさきも驚いて声の主、茉莉香に注目する。

「お父様、大丈夫よ。だって、ちゃんと鏡は働いてくれているから」

要介は、自分の娘が何を言っているのか理解できなかった。志織は勇気を出して、彼女に聞いた。ただした。

「茉莉香さん、昨日、私はお話ししましたよね。秋里で最初にあの人と会う直前に、子どもと出会ったって。それは……あなたではないかと」

茉莉香は口の両端を上げる。

「茉莉香？」

要介が震える。手元にあったカップが倒れ、わずかに残っていた中身がテーブルに広がった。

「渡辺さん、なにを言うんですか？ 確かにこれは他人からは悪く見られがちですが、本当は――」

「何月何日かは覚えていないけど、秋里には行ったわよ……鏡を持っててね」

要介は口をぽかんと開けた。自分の娘のはずなのに、目の前にまったくの他人に見えた。呼吸が荒くなる。心臓のあたりが苦しい。

そんな父の様子を眺めた茉莉香は実に楽しそうだった。

「だって、お父様も言ってたじゃない。あいつらが目障りだって。だから追い出してあげようと思ったのに」

邪気のない微笑みだった。要介は茉莉香の肩をつかんで揺らす。

「どうして、どうして……」

「他にも新参者の住む場所があったと思います。どうして、秋里だったんですか？」

志織に対し、茉莉香は笑みを崩さない。

「秋里に住んでた子でね、いきなりぶつかった子がいたの。もう、びっくりね。しかも、謝罪が軽くて、みんなで怒ってもへらへらしてて」

そのエピソードを、志織はどこかで聞いた。そして、無意識に口から声が漏れる。

「雅哉くん……」

茉莉香は思い出したように手を叩いて、頷く。

「あ、そんな名前。生意気でね、やっぱり新しいところの子ってダメだなーって思ってたんだ。そうしたら、生け贄の話が出たでしょ。ああ、あの子しかいないってそう思ったの。どうせ余所者だし」

儀式の日が刻一刻と迫っていて、親族間では連日話し合いが行われていた。それを立ち聞きした茉莉香は、彼を生け贄にすればいいと思いついた。

茉莉香は、いままでの無愛想な様子はなんだったのかと思うほど饒舌に語った。大人の目を盗んで鏡を持ち出し、下校する雅哉の後をつける。そして、彼の家の前で鏡をコンパスでめっちゃくちゃに傷つけた。そうすれば、きっと呪われて儀式が完了するはずだと思ったから。

「それ、間違ってますよ」

みさきはいつもよりも低い声で告げた。茉莉香は要領を得ないといったような顔を見せた。

志織は、こんな言いかたをするみさきに違和感があった。笑ったり泣いたり怯えたりは、もう何度も目撃している。しかし――。

「だったら鏡がずっと綺麗なままでいるわけないでしょ。あの鏡はそんなことで生け贄を得ません。ほかに正しい方法があるんです。そうでしょう、要介さん？」

冷たく鋭い視線を要介に送る。要介はおののきながらも同意した。茉莉香は二人を見比べて、呆けた表情を浮かべた。

みさきは茉莉香を力いっぱい睨んだ。志織は、本気で怒ったみさきを初めて見た。誰かに対して軽く怒ったり文句を言ったりしたことはあっても、こんなにもはっきりとした感情を誰かに向かって表すことが彼女にあるなんて思わなかった。

茉莉香は、そんな様子も気にも留めない。

「なんだ、だったらそうしたのに」

瞬間、突風のような音と弾ける音が連続して鳴り、茉莉香の顔が跳ねた。一瞬の出来事に志織も要介もあっけにとられ、みさきが茉莉香を引っぱたいたと認識するまでに時間がかかった。

「あなたね、自分がなにをしたのか考えなさいよ！」

破裂するような声で、みさきは茉莉香を罵った。霊と対峙するたびに怖い怖いと狼狽する、普段の彼女の面影などなかった。思わず志織はみさきの腕をつかむ。

「み、みさき……落ち着いて」

「しいちゃん、止めないでよ！ この人のしたことわかってるの？」

みさきの呼吸が荒くなる。いまにももう一度殴りかかりそうな勢いだ。

みさきは霧風での修練を欠かさないので、見た目よりも手がずっとごつく、腕力もある。テーブル越しだったから威力が殺がられただけで、もしも本気で手を出したら、茉莉香の細い身体など思いきり飛ばしそうなほどだ。

「それで、その雅哉くん？ 彼はどうなりましたか？」

みさきの言葉に志織ははっとして、茉莉香を見る。茉莉香は薄く笑った。

「死んじやった。ちょっと時間がかかって、他の人に先こされてたけどね」

志織は目眩がした。崖から突き落とされたように錯覚する。みさきの腕がもう一度唸ろうとした。それを見た志織がとっさに羽交い締めにして止めたが、乾いた音が響いた。

茉莉香はきょとんとしている。声を押し殺しながら泣いていた要介が、彼女の頬を叩いたのだ。

「お父様、どうして？」

みさきはともかく、父が自分をぶったわけが、茉莉香にはわからなかった。

「あんなに余所者嫌がってたじゃない。お金のためでも、こういう時代が嫌だって。だから、私頑張ったのに」

「本気で言ってるのか？」

こくりと肯定する茉莉香に、要介は絶望してそのままへたり込んだ。重々しい静寂が室内を包む。

要介はそのまま志織とみさきの方に向き直り、土下座した。茉莉香は止めようとするが、彼は頑として顔を上げなかった。

「お願いします、娘の処遇はこれから当家できちんと処理します。ですから、あれを、あれの被害をこれ以上広げないでください」

志織はその姿を見下ろして、胃のあたりが熱くなった。父として、財産家として、その姿はとても哀れだった。

みさきも志織も返事ができなかった。志織は膝をついて、要介の身体を起こす。

「とりあえずは、解決を最優先にしたいです。そのあとは……」

「そのあとは、真嶋家の問題で私たちが関わるものではありません。この子の言うとおりに、問題の解決を第一に考えますが」

みさきは眉をひそめて茉莉香に目をやる。茉莉香はまた感情のない表情で、父親とみさきを見つめていた。その顔が不気味だった。

「話を元に戻しますね。座りましょう」

率先して席についたのは茉莉香だった。志織は遠慮がちに、要介は半分魂が抜けたような様子で座る。

「あの鏡は、捧げられた生け贄を神様として六十年間縛りつけるものです。その六十年というのが、本来は前の生け贄が完全に力を失うまでの期間ですね。そして、鏡は新しい生け贄を取り込んで前の生け贄を食らって消す。しかし、鏡はもう使いものになりません」

志織はあの陰惨な儀式の様子を思い出す。そのときに見た鏡に比べると、傷ついた現在のものはどこか空虚とすら思えた。

「あの人は解き放たれてしまいましたが、鏡のなかに戻ろうしていても戻れません。だから、落野市内を徘徊しているんです。無差別に人々を少しずつ襲いながら」

みさきは窓の外に視線を移す。

「ああいうものは同じ霊を食らうケースも多いんですけどね。もしかしたら、元は家につく悪霊を食らうものだったのかも。私としては大変残念ですが、この町をうろついている霊の数が異様に多いです。どちらかというと、生きた人間を狙っているのかと」

「だって、そうやって呪ったもの、私」

茉莉香が口を挟む。そのどこか得意げな様子に、みさきの怒りが再燃しそうになる。

「要介さん。事故や死亡者……新しくやってきた人の割合はわかりますか？」

尋ねられた要介は口ごもる。

「いまとなっては、元の住人のほうが少ないくらいですから……」

その返答にみさきは小さく溜め息をつく。立ちあがった彼女は、志織を引っ張って自分たちの部屋に戻った。

「みさき……」

みさきが自分の荷物を漁りながら支度を整えている最中に、志織はぽつりとこぼした。

「怒ってくれてありがとう」

それを聞いて、みさきは振り返る。

「お礼を言われることじゃないよ……。あそこで誰が怒らないでいられるの？　しいちゃんが怒らないのが不思議だよ」

確かにそうだった。しかし、もうなにがなんだかわからなくなっていた。茉莉香を憎めばいいのか、あの男を憎めばいいのか、自分を責めればいいのか。

「あの人が何もしなければ、お父さんもお祖父ちゃんも雅哉くんも死ななかつたかな」

自分で選ぶ権利すら与えられなかつた可能性を幾通りも想像してみると虚しい。

「しいちゃん、私はそうだと思うよ」

みさきは霧風を何度か素振りする。これまで何度霊とやりあってもけして欠けることもなかつたそれが、いまはさらに力強い存在に感じた。

「しいちゃん、行こうか」

真嶋邸から離れて搜索する。男の気配は掴みにくかった。先ほどまでは頼もしかったみさきであったが、一步外に出て霊とすれ違うと、急に弱気になった。そのギャップにある種の安心感をおぼえながら志織は、そんな彼女の支えになるよう努めた。

「霊的な理由で空気が悪くなると、その分集まりやすいんだよ……。早く……。帰りたいね」  
「うん……」

この町に戻ってきたものの、なかなか生まれ故郷を愛しいと思う気持ちがわかなかった。さきほどのことがあったから、なおさら鬱々とする。どこもかしこもいやな思い出につながっているような気がした。

どれくらい歩いただろうか。昼ごろに出たはずなのに、いつの間にかずいぶん日は傾いていた。市内のあちこちを巡っていた二人は市街地を経て、シャッターが目立つ通りに移動した。洒落た店が立ち並んでいた跡が残っているが、人気がなく寂しい空気が満ちていた。

そのときだった。臭いがして背中がちりちりとした。二人は同時に振り返る。彼がいた。とっさにみさきはがちがちに固まった腕で霧風を構える。男はそんな彼女を嘲笑する。

「な、なぜ」

みさきの声が震える。

「なぜ人を襲うんですか？」

しばしの沈黙のあと、彼は答えた。

「人が、憎いから……。それ以上の理由はない」

男はみさき目がけて右腕を振り上げながら走り寄ってきた。みさきは立ちすくみそうになる足に力を入れてその腕めがけて切りかかったが、それはいとも簡単に避けられた。男は彼女の背後に回り込んでそのうなじを狙おうとする。

志織はいつものように荷物から札を取り出して、彼に叩きつけようとする。けれども、弾かれてしまう。反動で尻もちをついた志織を男は見下ろす。色が濃くなった夕日の強烈な光がその肩に差し込む。ぞくりとして、志織は次の行動がなにも思いつかなかった。

男が横に飛ぶ。みさきが再度彼を切ろうと攻め込んできたのだ。男は志織の傍らに回ると、その首筋に手を置いた。

「鏡を……」

「わ、渡さない！」

みさきは霧風を構えながら叫んだ。声が裏返ってしまっていた。

男は手を斜めに下ろす。薄い痛みがあった。顔をしかめて、志織は倒れる。襟からネックレスがはみ出て、地面に落ちた。それを見つめる男が逆光となって目がくらむ。フラッシュのような光が何度か発せられた。思わず志織は目をつむる。閉じた瞼でも閃光は感じられた。刺激で目も痛む。

数秒経って、それが急に止んだ。ゆっくりと志織は目を開けて驚愕した。目の前に、父の姿があった。それが前日と同じ過去視なのだと理解するのに時間がかかった。

「お父さん」

志織の声に、父が振り向くことはなかった。父はじっと前方を見つめていた。そこには、あの男がいた。志織は息をのむ。父は手に持っていたもの――志織のネックレスについている飾りをポケットに入れて、頭を下げた。

「どうかお願いします」

男は無言で父を見つめていた。志織への憎しみがあがりあがり周囲の空気に満ちていた。

「妻と娘だけは見逃してください。娘は何の力もない子どもです。あなたを殺した真嶋の人間でもありません」

それでも憎いというのなら、と父は顔を上げる。

「代わりに私の命を差し上げます。それで娘をお許してください」

志織は心臓が止まりそうだった。父がなにを言っているのか理解したくなかった。しかし、要介と目の前の父が重なる。娘のために懇願するその姿に、胸が壊れて張り裂けそうだった。

「お父さん、そんなこと言わないで。ダメだよ……お父さん！」

志織は呼びかける。けれども父には聞こえていないようだった。駆け寄ろうとするのにできない。なにかが動くことを阻んでいた。

夜の道は暗く、外灯がちかちかと瞬いていた。ほとんど影になった男は笑ったように見えた。そして、その心にもう志織がいなかった。彼は父に狙いを定めた。

「しいちゃん……しいちゃん！」

みさきの、悲鳴のような呼びかけで、志織は我に返った。みさきの顔は涙でぐしゃぐしゃだった。気づけば、志織自身も泣いていた。

「大丈夫？」

一拍遅れて、志織は力なく頷いた。空はもう暗い。さきほど見た光景と同じだ。まだ自分が現実にいるのか幻覚に閉じ込められているのか判別がつかなかった。頭が痛く、激しい呼吸が止まらない。涙も際限なくあふれる。

彼はまた消えてしまった。みさきはそれ以上何も言わず、タクシーを拾って真嶋邸に戻った。気まずいのか、今夜は在宅しているはずの要介が出迎えることはなかった。

部屋に戻って横になっても志織は回復しなかった。泣きすぎて目が痛かった。父の懇願する姿が目に残っている。志織はなぜ父が死に、それ以降は母と自分に害が及ばなかったのかを理解した。父が志織をかばい、自分の命を差し出した。彼はそれを了承した。その事実を突き付けられた。

「みさき、見た？」

志織のベッド脇に置いた椅子に座っていたみさきは一瞬迷ったあと、わずかに頷いた。

「やっぱり……私のせいなんだ……」

みさきも同じ光景を見たのなら、認めたくないがこれが事実だ。みさきは志織の袖を掴まむ。

「しいちゃん、そんなことないよ」

「どこが！ 少なくとも、お父さんは私のせいで死んだようなものじゃん！ 自分が身代わりになるからって……」

つい声が大きくなってしまふ。この感情をどう受け入れたらいいのかわからなかった。父はなにも落ち度がない。志織が約束を破らなかったら、祖父も父も死ぬ必要はなかった。自分こそが死ぬべきだった。そうとしか思えなかった。どうしてあのとき彼に近寄ってしまったのだろう。後悔の海に放り出されて、どんどん沈んでいく。息ができなくなっていく。

「軽蔑したでしょ？ 私、バカだから、みさきのような人みたいに自分にもなにかできるもんだと思ったんだよ。それで、こうなったんだよ」

自分が無力なのは何度も実感した。しかし、今回ばかりは本気で自分を憎んだ。茉莉香に押しつけたかった責任が、すべて圧しかかる。父は妻子のために自分を犠牲にした。彼の志織への怒りを自分に向けさせて、自分が身代りになることで志織を守ろうとしたのだ。

「いいな、みさきが羨ましい」

志織は自分の腕で目元を隠す。こんなに泣いても、まだ涙が出てくる。干からびてしまいそうだった。

「私、本当にあの人になにもできない。私のせいでお父さんが死んだのに……」

口にすると、無力さも空しさもよけいに高まった。こんなことをみさきに吐露してもしかたないが、言わずにはいられなかった。

志織は自己嫌悪と後悔でなかなか起き上がれなかった。そんな己にまた苛立つのであった。

「ごめん、こんなん。本当、なにやってるんだろう」

時間に余裕があるわけではない。二泊という期限があった。一刻も早く彼を除霊したい。それなのに、まったく身体が言うことを聞かないのだ。幽霊への耐性が強いことが取り柄だというのに、足を引っ張っている。みさきに申し訳なかった。

「幽霊と直接やりあえないなら、こんなときだからこそ、せめてみさきの力になれって自分でも思うよ……」

「大丈夫。しいちゃんはここで休んでて。いまから、私一人で行くよ」

突然、みさきは唇を真一文字にして立ち上がった。

「みさき？ なに言ってるの。一人じゃ」

起き上がると天井がぐるりと回転した。志織はふたたびベッドに沈む。みさきはそんな相棒を見て苦笑した。

「そんな身体の人をつれていくほど、私も鬼じゃないって。平気平気、これでも、しいちゃんと出会う前から一応仕事はしてたんだよ。それに、最近はわりとしっかりしてるでしょ？」

志織が慌ててもう一度身を起こすが、みさきはその肩を押さえてゆるやかに布団に戻す。

「心配しないで。こんなことくらいでバイト代も引かないから。まずはじっくり休んでてよ。それでね……」

みさきは、口の両端をわずかに左右に広げて笑う。

「もしもちゃんと一人で仕事して帰ってきたら、そのときは褒めてくれる？」

もちろん、と志織は言おうとした。しかし、突然眠くなって、自分でも何を言っているのかわ

からないまま眠りについた。みさきはそれを見届けると、霧風を担いで真嶋邸をあとにした。

志織は自分が情けなかった。わざわざみさきに弱音をぶつけるような状況でも立場でもなかった。本当は自分のほうがよほどみさきに甘えていたのがよくわかる。それなのに、普段の仕事でみさきが怖がりであることを理由に、彼女のほうが自分に甘えているのだとどこかで錯覚していた。

自分の弱さへの嫌悪が、じわじわと浸食していく。何度も自分を責める。特に夢は見えていないはずなのに、不快な浮遊感だけはやけに鮮明で、うなされた。

目を覚ますと、窓から見える景色は既に暗くなっていた。

(何時だろう)

時計を見ると、まだ八時にもなっていないかった。たった一時間くらいなのに、朝まで寝ていたような気がした。

服は汗で濡れていた。いざ起きあがってみると、倦怠感はあるものの、動けないことはない。むしろ、今度は少しでも動いたほうが、不調が取れていく気がした。意識もだんだんと靄が晴れていくような感覚だ。

みさき。志織は替えの服に手を取った瞬間、彼女のことを思い出した。すぐに着替えて部屋を飛び出し、手近にいた真嶋の使用人をつかまえる。

「す、すみません！ みさ、祝さん戻ってますか？」

「いいえ、まだですけど」

すぐに追いかけてやうとする志織を、使用人が止める。

「祝様から頼まれています。今日はお休みください」

志織はとっさに振り払った。思いのほか力が出て、お互い驚いて固まってしまったが、志織は謝ってそのまま玄関を通過して前庭を抜けて、門の外へと飛び出した。

涼しい空気が肺を出入りする。世界はすっかり秋だ。夏の名残はもう欠片も感じられなかった。志織は目を閉じて、男の気配に意識を集中する。昼間よりははっきりとしていた。きっとみさきもそこに向かっているだろう。志織は自分の感覚を頼りに走りだした。

ちょうどそのころ、町外れの工場街にある廃ビルで、みさきは男と対峙していた。正直、まだ震えている。これまではいつも一緒にいた志織がいないから、なおさら恐怖が全身に満ちていた。けれども、強がりと言って志織を置いてきたのはみさき自身だった。

みさきはみさきで、志織をつれてきてしまったことを後悔していた。ただでさえ過去に苦しんでいたのに、その傷口をえぐってしまった。いつもそばにいてくれる彼女に対して、あんな思いをさせてしまったことが申し訳なかった。

「いいいい、いったい、なにが目的なの？ もうあの子の代わりにお父さんを食らったんでしょ？ しかも、真嶋の人間でないのもわかってたんでしょ？」

こんなときくらいびしっと決められないのかと自己嫌悪する。そんなみさきを前にして、男はにやつきながら首をかしげる。

「もう真嶋かどうかは関係ない」

「え？」

「死んだ人間はもういい。生きた人間の魂がほしい。そうすれば満たされる」

志織が遭遇したように、彼は最初、不完全で力なき存在だった。それは、真嶋家が伝承どおりに儀式を行ったとはいえ、元の家とまったく同じというわけにはいかなかったせいでもあった。前の生け贄は消え、彼の魂は瀕死の状態のまま鏡に取り込まれてしまった。

苦しみや痛みが消えない。死の直前の状態がずっと続いていた。そして、飢えていた。それは鏡に宿る神の常だった。真嶋に取り巻く悪霊、悪意、妬み、恨み——それらをいくら食らえども飢えは消えなかった。

いつまで続くのだろうか。もう永遠にこのままだろうか。鏡に捕らわれた彼は絶望した。そんななか、急に光のもとに放り出された。

「余所者を呪っていいのよ……この人はみんな殺していいの」

見知らぬ誰かが呟き、そして去っていく。その背中から真嶋の匂いがした。その瞬間、死の間際の記憶がよみがえった。

「お待ちください」

男は呼びかけた。しかし、彼女は振り向かない。眩しい光のほうへ歩いていく。真嶋はあのときと同じように自分を見捨てていく。

「お助け、ください……」

力が入らず、そのまま顔も地に伏せる。真嶋に傷を負わされ、また誰からも救いの手が差し出されることなく見捨てられることへの絶望に心が浸っていく——そのときだった。

「どうしたの？」

自分を見下ろす影があった。先ほどの子どもが戻ってきてくれたのだと思った。男は必死に腕を伸ばした。

「お助け……ください……助け……」

彼女はその手を取った。その瞬間に、彼は救われた気がした。しかし、握られた手を通していきなり相手の恐怖が逆流して入ってきた――それは自分への嫌悪でもあった。

「ごめんなさい」

彼女はいきなり走り去っていく。ああ、まただ……。また行ってしまう。

「お待ちください……」

必死で呼びとめようとするが、彼女は悲鳴をあげて行ってしまった。彼は悲しみに震えた。この苦しみをいつまで繰り返せばいいのか。真嶋に逆らっただけでこんな地獄に落ちるのか。炎に焼かれるように、憎しみが自分の魂を焦がした。

そのときだった。また一人、子どもが目の前を通った。今度はこちらを気に留めて見ることすらない。

また見捨てる――男は憎んだ。彼の肉体ではなく、その若い魂を反射的にえぐり取る。それが自分のなかに吸収されたとたん、あれだけ飢えていた我が身がすこしだけ満たされた。あの儀式から長い時を経ていたが、こんなことは初めてだった。

もう一度魂をえぐる。またすこし満たされる。その瞬間、男は悟った。満たされるには生きた人間でないとならない、と。それから彼はひたすら生きた人間を食らった。いつしか飢えはなくなり、力にあふれるようになった。

はじめは自分を見捨てたあの真嶋の家の者を食らう予定だったが、彼女は真嶋ではなかった。代わりに父親だという男の魂をもらいうけたから、もうこだわる必要はなかった。むしろ、魂を食らっているうちに真嶋自体への関心が薄れた。たったひとつ、あの言葉だけが心に留まっていたが。

「余所者を呪っていいのよ……ここの人はみんな殺していいの」

無意識に露野と縁が薄い魂を選んでいた。その意味は自分でもわからなくなっていた。さいわい食料はどんどん補充される。彼はただ食らうことを考えるようになった。

みさきはそこまでの流れを知ると、寒気がした。茉莉香のしたことは取り返しがつかない。そして、この男はまだ人の形を保っているが、もう人ではない。邪神、あるいは鬼。もうそういう種類の存在だった。

同情すべきところはたくさんある。そんな魂を成仏させられたらいいが、自分には手がおえない。そして、一刻も早くこの彼をどうにかしないと、露野が終わってしまう。みさきは覚悟を決めて霧風を握り直す。

もちろん恐怖はある。歯が合わず、がたがたと音を立てる。怯えるを通り越して、もう叫ぶことすらできなかった。

たった一人で対処しなければならない。重圧が両肩にかかる。いまは頼る人間などいない。今度こそ自分だけでどうにかしなければならないのだ。みさきは自分の器と無力さを知る。

みさきは思い切って前に踏み出し、地面を蹴る。霧風で横に薙ぎ払うが、それでは男に届かない。彼は身軽だ。みさきを嘲笑うようにひらりひらりと舞う。そして、わずかに隙でも見せれば、容赦なくその身を魂ごと削っていく。

彼が迫るたびにみさきは泣きたくなる。この期に及んでも心が弱い自分に嫌悪感が高まった。

霊も物の怪も、この世のものではない存在なんて大嫌いだ。それでも戦わなければならない。

声をあげながら、みさきはもういちど切りかかったが、それは止められた。そして、男は霧風を受けとめながらも、もうひとつの腕でみさきの身体を払いのけた。

みさきは後方へ飛ばされた。全身を打つ。力比べではまったく適わない。さすがの霧風も、現状では彼を即座に断つことができなかった。隙をついて確実に当てなければ弾かれてしまう。

みさきは無意識に涙を流していた。こんなときに泣いている場合ではない。よけいに自分が情けなかった。

男が近づいてくる。立ち上がらなければならない、それなのに起き上がれない。みさきは唇を強くかむ。血の味がした。苦い。

「みさき！」

志織が駆けこんでくる。男の注意が志織に向いた。みさきは那一瞬を狙って、霧風を振った。男の上腕をとらえ、彼はバランスを崩した。

「しいちゃん、どうして来たの！」

志織に答える暇などなかった。男が一気に距離を詰めて迫ってくる。それを避けるので精いっぱいだった。手刀が志織の胸元を掠める。その瞬間、ネックレスの鎖が切れて、遠くの床に落ちて滑っていった。

志織はそれを取りにいこうとしたが、背中に熱い衝撃が走って、その場に倒れる。目の前に影が落ちる。いつの間にか男は刀を手にしていて。博物館で出会った姫のような短刀ではなく、霧風と同じくらいの長さで、まるで鏡のような刀身に志織の顔が映った。

刀を真上に振りかぶる。切っ先がきらめいた。志織は、ここで自分が死ぬのだと思った。

男はそのまままっすぐ下ろそうとしたが、急にその刃の行先を変えた。間髪入れずにみさきが横から飛び込んできて、その刃を霧風で叩いた。霧風のまとう気配が揺らぐ。

みさきは一秒の間もおかず、彼の腰を狙った。しかしそれがかわされる。

志織はその隙に身を起こそうとしたが、手が震えた。なかなか思うように身体が動かせない。

そんな志織をかばうように、みさきは霧風を振るいつづける。博物館のあと、修練に力を入れるようになったものの、みさきの太刀筋はまだ安定していない。まだ霧風をやみくもに振り回しているも同然だった。

せめて勢いだけでも。みさきは一度引いて、反動をつける。そして横薙ぎに切りはらおうとしたそのとき、手から霧風が抜けて行く感覚があった。

(まずい！)

集中力が途切れる。すんでのところ握る力を強くして手から離れずに済んだが、次の動作が遅れた。崩れた体勢を直そうとしたと同時に、脇腹がえぐれるような痛みを覚え、同時に吹き飛ばされた。

うまく呼吸ができず、みさきは咳き込む。霧風を支えにして立ち上がろうとするが、力が入らなかった。男がみさきに狙いを定める。それを見た志織は這うように移動して男の脚にしがみついた。

彼に触れた部分が火傷するように痛む。それをこらえて志織は荷物から札を取りだす。せめて

これだけでもと男の身体に押し当てようとした。

「きゃ！」

志織の手のなかで、それはいとも簡単に燃えてしまった。男の笑い声が降ってきて、志織は蹴りを入れられて再び床に叩きつけられた。

「しいちゃん！」

志織よりもみさきを優先しているのか、男は倒れた志織を横目にみさきのもとへと進んでいく。みさきはようやく両の脚で立つかどうかというところで、思うように身構えられない。

その様子を見て、志織は即座に上半身を起こした。頼りになる札は彼には全然効かない。無意識に周囲を見渡した志織はそばに落ちていたネックレスに目を留める。剣の形をした父の形見——自分のお守り。

「いざというときは志織の力になってくれる」

父はそう言った。志織は考えるより先にそれを手に取った。

（お父さん……）

父を思い浮かべる。娘の代わりに自分をと彼に言った父。志織は目の前が真っ白になった。そして、叫び声を出しながら走り寄り、ネックレスの剣で、横から男の腕を思いきりえぐった。

男は悲鳴をあげる。その反応に志織は驚き、立ち止まる。彼は身を折り、歯をむき出しにして志織を睨んだ。それに躊躇しそうになるが、志織はさらに一步踏み込んで、男の脇腹を狙って突き刺す。男が仰向けになって倒れる。

男は志織を見つめる。口をわずかに動かし、何かを言おうとする。一瞬怖気づくが、志織は目をつむりながら彼の胸に突き刺した。男の身体が跳ねる。その様子を見て、志織は儀式を思いだして吐きそうになったものの、なんとかこらえる。

「みさきっ！」

みさきはどうか気力を振り絞って二人のもとに駆け寄る。霧風が唸り、彼の首をはねる。血は流れず、落ちた男の頭が転がり、すこしして停止する。

ぱくぱくとなにか喋ろうとするが、まったく聞こえない。そして男の顔から力が抜けた。一瞬だけおだやかな顔を見せ、男は消えていった。

その瞬間、その場を強い光が支配した。たくさんの光球があふれ出た。そのうちのふたつが志織たちの身体に入り込む。色とりどりのそれらはふわふわと踊りながら、天に上ったり彼方へと飛んでいった。志織とみさきはそれを呆然と見送った。

「あれ、きっとみんなの魂だ。ずっとあの人のなかに溜まっていた」

ぼつりとみさきが呟く。あれだけの魂が男のなかにあったのだ。光の数だけ、人が死んだ。志織は震えながら、その美しい光景を眺めた。死んでしまった人は、誰も戻らない。戻すことはできない。あれだけの肉体が失われた。

吹く風や漂う空気には、もうあの臭いも色もなかった。どこか懐かしく感じるそれを、志織は胸いっぱい吸い込んだ。

「う……く……」

みさきがいきなり呻く。びっくりして志織が振り向くと、涙と鼻水で顔が濡れていた。

「ふえええええええええ、しいちゃん」

みさきは抱きついてくる。もう足腰に力が入らないようだった。志織は、ちいさな子にしてやるように、ぽんぽんとその背中を叩いてやった。

「怖かった、怖かったよう……」

「大丈夫って言ってたじゃん」

「それでも、やっぱり怖かった、うえっ、ふっ」

みさきの顔を見て、こんな状況なのに志織は笑ってしまった。

「よだれ垂らしてるよ」

志織はハンカチを差し出す。みさきはそれを受け取ると、遠慮なく顔全体を拭った。

「……鼻かんでもいい？」

「それは勘弁して」

志織は苦笑しながら、空を見る。手に持っていたネックレスがなんとなく熱い。

彼を刺してしまった。それでよかったのか志織にはわからなかった。元は彼も哀れな存在だったから。

志織はまだ残っている魂の光を目で追う。彼らが向かう先になにがあるのかはわからない。まだ志織のなかにある罪悪感は消えない。せめてそれぞれの死者にもあの男にも安らぎがあってほしいと、そう願った。

翌日、二人は改めて要介に事の次第を報告した。たった数日で、すっかり彼はやつれてしまったように見えた。

もう鏡にはなんの力も残っていないから、地域の神社に納めてしまえばいいとみさきから聞くと、わずかに安堵したようだった。

「あの、茉莉香さんは……？」

要介は落ちくぼんだ目で、空っぽの自分の隣を見つめた。

「あれは遠くにやります。しばらく表に出してはならないでしょう。医者にも見せようと思います」

要介の声は震えていた。

「茉莉香は、なにかの罪に問われますか」

みさきは首を横に振った。

「たとえ茉莉香さんが今回の直接の原因だったとしても、それが誰にでもわかる証拠というものはないんです。だから裁くとか法律とか、そういうものとは無縁です」

要介は途方にくれた様子だった。これから彼らはどうやって生きていくのだろう。志織は疲れ果てた要介の姿が悲しかった。

こうして二人は真嶋邸をあとにした。霊の数はだいぶ減っていた。

「く、空気が良くなってきたから、よそに行ったみたい。これから平和になるんじゃない……一般レベルでは。真嶋さんみたいなおうちは知らないけど」

少なくなったとはいえ、霊がいる限り、みさきの恐怖心は消えない。志織にしがみついて移動する。

「あー、やっぱりしいちゃんいると落ち着くわー。もう私、しいちゃんいないとダメだ」

「じゃあ、そばにしようかな……バイト代が出てるうちはね」

みさきはぱっと顔を上げる。目がまたうるむ。

「い、いじわるう……」

「冗談だよ。みさきが呼んでくれるんだったら、いつでもつきあうって」

みさきは嬉しそうに笑う。志織はそれを見て、たとえ自分が無力であっても、彼女が必要としてくれる限りは力になりたいとあらためて感じた。

「ここに住んでたんだ」

志織はみさきを連れて、出立前にもう一度秋里を訪れてた。区画のはずれに、かつて志織が住んでいた家があった。彼女が祖父や父と一緒に暮らしていたころの家屋は既がない。いまは別の人間が別の家を建て直して住んでいる。それでも、周囲の家の並びはほとんどそのままだから、懐かしい。

志織は土地の片隅に、ひょっこり伸びた木を見つけた。志織がいたところと段違いの高さだったが、間違いなく父と一緒に植えた柿だった。志織がいた頃に実をつけることはないままだったが、いまは色づいた果実をわずかに確認できた。

「ずっと取っておいてくれてたんだね、この人」

みさきは敷地内に入らせてもらうかと提案してきたが、母が土地を譲った相手はさらに別の家族にこの家を貸しているとだけは聞いている。おそらく、現在の住人は志織たちのことを知らないだろうし、ここでいきなり訪ねても困ってしまうだろう。志織は首を横に振った。

前を通り過ぎるだけ。志織は懐かしそうに柿の木を見やり俯く。幼稚園のときは、志織も父の影響で柿が大好物だった。もしも実がなったら一緒に食べるはずだったのに、父の死後になって綺麗な実がついたのは皮肉であった。

「柿、一緒に食べたかったなあ」

志織がぼんやり思い出に浸っていると、いつの間にかみさきがぽかんと口を開けて立ち尽くしていた。志織は首を傾げながらも彼女の視線をたどる。その先には柿の木があり――。

「あ」

一人の男性が、木の頂点を見上げるようにして立っていた。そして、ゆっくりとこちらを向いて微笑む。

（お父さん……）

まぎれもなく、志織の父だった。生きていたころのままの父だった。

志織の頬を涙が伝う。まばたきするごとに、視界がにじんでいった。

父が口を動かす。

（……おかえり）

ああ、ずっと待っていてくれたのだ。志織は何度も頷く。

「ただいま。お父さん、ただいま」

悲しいことを思い出すからと、露野にくることはなかった。けれど、父はずっとこの町にいたのだ。それを確信した志織は涙を拭うが、とても追いつかない。

父はそこから動かなかった。けれど、成長した娘の姿に安堵するように笑いながら、笑顔で景色に溶けていった。

志織はその場に座り込んでしまった。みさきが近寄って、彼女の背中を撫でる。

「あの、どうしたんですか？」

二人そろってしゃがみ込んでいると、声をかけられた。見ると、品の良い女性が買い物袋を抱えながら覗きこんでいた。どうやら、渡辺家から土地を買った人間のようなのだ。

「あ、ごめんな、さい」

まだ涙が止まらず、うまく言葉が出ない志織を代弁するように、みさきは簡単に志織の素性を説明した。婦人はそれを理解すると、家に引っ込み、ペットボトルと手提げ袋を持ってきた。

「そういうことなら持って行きなさい。いつも美味しく頂いているのだけれど、量が多くて食べきれないの」

渡された実の色はあざやかだった。戸惑っていると、みさきは愛想よく礼を言った。それにつられる形で、志織も勢いよく頭を下げることができた。

婦人とはほんのすこし立ち話をしてから別れた。少し重くなった荷物が嬉しかった。

「みさき、ありがとうね」

駅にむかいながらそう呟くと、みさきはからっとした笑顔を返した。

「ううん。私もなんだか嬉しかったよ。しいちゃんのお父さんにちゃんと会えたしね」

なんだか暖かい日射しに包まれたような心地だった。志織は彼女の存在に感謝した。彼女と出会って約一年になるが、みさきがいなかったら自分はここにいなかったし、父と再会もできなかった。

「うちのお父さんも幽霊だったけど、怖くなかった？」

「まさかー。しいちゃんのお父さんが怖いわけないじゃんっ！」

「あはは。これでもう克服かな？」

二人で笑いあっているうちに駅に到着し、改札を通過してホームに立つ。フェンスの向こうにある景色に、もう憂鬱は感じない。志織は懐かしさに浸りながら、帰宅後のことを考えていた。

「ね、しいちゃん……」

みさきが話しかけてくる。

「ん？ ごめん、何？ 聞いてなかった」

みさきの顔色が悪い。真っ青だ。

「え、何？ どうした？」

みさきは手をすっと上げて、下り方面を指す。ひたすらまっすぐ延びている線路の彼方に、何かの影が見えた。ゆっくりとこちらに近づいている。

それは、人に見えた。というのも、あまり原型を留めていない。かろうじてつながっている手足を動かし、バランス悪いのか、壊れたおもちゃのようにがくがくと躓きつつ進んでくる。どう考えても、生きた人間ではない。

「ぎゃあああああああっ、出たあああああああああああああ！」

ホーム上にいるのは自分たちだけとはいえ、人目もはばからず、みさきは叫ぶ。志織は、そんなお馴染みのみさきの叫びに苦笑しながら、彼女の肩を軽く叩いた。